

音聲に着するを以て、戲論を作して、若しは有、若しは無といふ、着を破るを以ての故に、涅槃も空なりと説く、是れを第一義空と名く、聖人の心中の所得を破るにはあらず、聖人は一切の法の中に於て、相を取らざる以ての故なりと。復次に一切の法は皆平等法界に入るときは、則ち高下なし、豈に無生法の中に、勝劣の相あらしめんと欲はんや、是の故に第一義不可得なり。

(1) 沛奴 Phena

「頗字は一切諸法不堅如聚沫の故に」とは、梵には(1)沛奴と云ふ、譯して聚沫と云ふ。大水の中の波濤鼓怒し、相激して聚沫と成るに、種種の相、生ずことあり、乃至固く結び相持して、遂に堅の用あり。然れども危より細に至りて一一に觀察するに、ただ是れ縁また縁に従ふ、攝摩す可からず、都て實性なし、その本際に至れば即ち舉體是れ水にして、都て所生なきが如く、今世間の種種の五陰も亦復是の如し。今末を攝して本に歸し、丈を去て尺に就きて之を觀するに、乃至絲忽の際の如きも、介然微動するは皆是れ展轉して縁に従る。若し是れ衆縁に従り生ずるは自性なし、若し自性なきは、當に是の生は即ち不生なりと知るべし。本不生際に至れば但だ是れ心性の海なるのみ、而も六趣の妄情に隨ひて、遂に世界の目あり。夫れ心性の海とは即ち是れ法界なり、法

界とは即ち是れ勝義涅槃なり。若し能く是の如く見る時は、また洪波震蕩して、種種の普現色身を作すと雖も、亦澄清の性をも壞らざるなり。

(1) 滿駄 Ban-dha

「麼字門は一切諸法縛不可得の故に」とは、梵には(1)滿駄と云ふ、此には翻じて縛とす。人の縲維の爲に拘はられて、動轉することを得可かざるが如きは、是れ縛の義なり。若し方便を以て是の結を解く時は、則ち解脱と名く、若し身と繩とを離れては別の縛解の法なし。天帝釋、微細の縛を以て、阿修羅王を縛りて、切利天の上に置くに、念を起して還らんと欲する時は、五縛已に其の身にあり、若し念を息むる時は、縛自ら除解するが如し。若し(1)波句の絹網はまた此に過ぎたること百千倍數せり、何に況や業・煩惱・無爲の縛等をや。要を以て之を言はば、若し諸の因縁を離れて、諸の法數に墮せざる者を、乃ち無縛と謂ふ、是れを字義とす。中論に云はく、五陰を離れて別に衆生あらば、則ち五陰を以て衆生を縛すべし、實には五陰を離れて衆生なし。若し五陰を離れて別に煩惱あらば、別に煩惱を以て五陰を縛すべし、而も實には五陰を離れて別の煩惱なし。是の如く等の種種の因縁を以て、當に無縛なりと知るべし。無縛なれば則ち無解なり。縛解なきが故に、涅槃即ち生死なり、生死即ち涅槃なりと。觀縛解品の中に廣

(1) 波句 梵語 Padya なり、層惡き義にて天覺の波句と續き天覺の玉なり。

(一) 婆嚩 Bhava

く説けるが如し。復次に若し諸法本來不生なり、乃至聚沫の如くならば、是の中には誰れをか能解とし、誰れをか所縛とせん、是の故に諸縛不可得なり。

「婆字門は一切諸法有不可得の故に」とは、梵には(一)婆嚩と云ふ、此には翻じて有となす、有は謂はく、三有乃至二十五有等なり。若し婆字を見れば、即ち一切の諸法は悉く因縁ありと知る。衆縁合するが故に説きて有と名く、決定の性なし、所以は何となれば、若し法、定めて有相あらば則ち終に無相なし、是れ則ち常とす。三世を説くが如きは、未來の中に法相あり、是の法、現在に來至して、轉じて過去に入れども、本相を捨てずといはば、則ち常見に墮つ。若し定めて無ありと説かば、是の無は必ず先有今無なり、是れ則ち斷滅の見とす。是の二見に因るが故に佛法を遠離す。中論の破有無品の中に廣く明せるが如し。今觀するに諸有は縁に従る、即ち是れ本不生の義なり、本不生なるを以ての故に作もなく・行もなく、乃至縛もなく・脱もなし。是の故に婆字門は縁に従りて有なるを以ての故に、一切の字門を具足す。若し一切の字門を具するは、即ち是れ三昧王三昧なり、能く二十五有を破る(二)釋迦牟尼なり。此の義に由るか故に破有法王と名く。

(二) 釋迦牟尼此の婆字は釋迦牟尼佛の種子なる故に斯く云ふなり。

(一) 野那 Yana

「野字門は一切諸法一切乘不可得の故に」とは、梵には(一)野那と云ふ、此には翻じて乗とす、亦名けて道とす、人の舟車に乗取るとき、則ち能く重きに任へ遠きに致して、至到する所あるが如し。若し野字門を見れば、則ち一切衆生は種種の因縁を以て、生死の果報に趣向し、及び涅槃に趣く者、各所乘ありと知る、亦無量の諸乘は悉く是れ佛乘なりと知るを、名けて字相とす。今觀するに、諸法は本不生なるが故に、即ち是れ無行・無住・不動・不退なり、是の中に誰れをか乗者とし、當に何の法にか乗すべき。復次に是の乗は三有の中より出でて、(二)薩婆若に至る、五百由旬、寶處に非ざる者なし、何れの道を行きて、何れの處に往詣すと欲せんや。是の故に一切の乘不可得なるを、乃ち摩訶衍道と名く。

「囉字門は一切諸法一切の塵染を離るるが故に」とは、梵には(三)囉逝と云ふ、是れ塵染の義なり、塵は是れ妄情所行の處なり、故に眼等の六情、色等の六塵を行すと説く。若し囉字門を見れば、則ち一切の見聞觸知す可き法は、皆是れ塵相なりと知る。淨衣の塵垢の爲に染さるるが如く、亦遊塵紛動して、太虚を昏濁し、日月を明かならざらしむるが如し。是れを字相とす。中論に種種の門を以て見法を諦求するに、見者ある

(三) 至薩婆若五百由旬義釋には「薩婆若の中に至りて住す、若し三有の實相を見るは即ち是れ薩婆若なり、五百由旬……」とあり、宜歟。(三) 囉逝 Rajas

ことなし。若し見者なくば、誰れか能く見法を用て外色を分別せん。見と可見と見法と無なるが故に、識・觸・受・愛の四法も皆無なり、愛なきを以ての故に、十二因縁の分も亦無なり。是の故に眼に色を見る時、即ち是れ涅槃の相なり、餘塵も例して爾り。復次に阿字門を以て展轉して諸塵を觀察するに、其の本不生なるを以ての故に、造作なきが故に、乃至所乗の法及び乗者なきが故に、當に知るべし、見聞觸知す可き所の法、悉く是れ淨法界なりと。豈に淨法界を以て如來の六根を染汗せんや。慈掘摩羅經に、佛は常眼具足して滅すること無きを以て、明かに常色を見たまふ、乃至意法も亦是の如しと。是れ囉字門眞實の義なり。

「囉字門は一切諸法一切相不可得の故に」とは、梵には(二)邏吃灑と云ふ、此には翻じて相とす。ある人言はく、性相差別あることなし、火性即ち是れ熱相なりと。或は言はく、少し差別あり、性とは其體を言ひ、相とは識る可きを言ふ、釋子の禁戒を受持するが如きは是れ其の性なり、剃髮割截染衣は是れ其の相なりと。若し囉字門を見る時は、即ち一切の法は皆悉く相ありと知る。相にまた二種あり、一には惣相、謂はく無常・苦・空・無我の相なり、別は謂はく、諸法は無常・無我なりと雖も、而も各の

(一) 邏吃灑 114-

相あり、地の堅、水の濕、火の熱、風の動等の如し。捨を施の相とし、不悔不惱なるを持戒の相とし、心變異せざるを忍の相とし、發動を精進の相とし、心を攝すを禪の相とし、所着なきを慧の相とし、能く事を成すを方便の相とし、生死を織り作すを世間の相とし、織ることなきを涅槃の相とする等なり。今觀するに、有爲無爲の法は體性皆空なり、此の相は誰れがために相とならん。中論の三相品及び十二門論の中に、廣く説けるが如し。復次に淨法界の中には、百六十心等の種種の諸相不生なれば、則ち造作なし、造作なきが故に、乃至畢竟じて無塵なり、無塵なるが故に、一切の相を離る、一切の相を離るるを以ての故に、名けて諸佛自證の三菩提とす。

「囉字門は一切諸法語言道斷の故に」とは、梵音の囉劫跋をば名けて語言とす。若し囉字を見る時は、即ち一切の諸法は語言の地を離れずと知る、是の諸法は有因有縁ならざることなきを以ての故に。若し法本來不生ならば、則ち是れ諸の因縁を離れたり、是の故に語言道斷なり。復次に若し法是れ作相ならば、則ち宣説す可し、無作なれば則ち語言道斷なり。若し虚空の相是れ有相ならば、則ち宣説す可し、諸法如虚空の相

も亦復無相なるを以て、是の故に語言道斷なり。若し法、行あり・遷變あり・影像あらば、則ち宣説す可し、若し行なく・遷變なく・影像なければ、則ち語言道斷なり。乃至諸法若し是れ有相ならば、則ち宣説す可し、今一切の法は一切の相を離れたるが故に、表示す可からず、人に授く可からず、是の故に語言道斷なり。復次に無相も亦定相なし、當に知るべし、一切の法は相に即して無相なり、非相に即して無相なるに非ず、彼の三目の如く不可思議なり、是の故に語言道斷なり。餘の法門も此れに例して知る可し。

(一) 扇底 (fan)

「奢字門は一切諸法本性寂の故に」とは、梵には(一)扇底と云ふ、此には翻じて寂とす。世間の凡夫の、少分恬怕の心を獲て、誼動を止息する如きをも亦名けて寂とす、乃至二乗の人等の、永く諸行の輪廻を斷ちて、涅槃の證を得るをも亦名けて寂とす、然れども本性常寂には非ず。然る所以は、諸法は本よりこのかた常に自ら寂滅の相なり、三界六道何者か是れ涅槃に非ざる、無漏智の生ずる時、また凡夫と何か異なる、而も今獨り其の中に於て滅度の想を作す、豈に顛倒に非ずや、又若し諸法本性寂ならば、四十二地の中に於て、何者か是れ如來地に非ざる、何者か是れ凡夫地に非ざる。

若し彌勒菩薩、本性寂を以ての故に一生記を得ば、一切衆生も皆亦まさに記を得べし。若し一切衆生、本性寂の中に於て。凡夫の事を修學するを妨げずば、彌勒菩薩も亦まさに凡夫の事を修學すべし。而も今差別の想を作す、豈に戲論に非ずや。若し奢字門に入る時は、則ち是の法は平等にして高下あることなく、常に動く所なくして、而も爲さざる所なしと知る。故に解脱の中に容受する所多し、大般涅槃も能く大義を建つと云ふは、皆此れを以てなり。

「沙字門は一切諸法性鈍の故に」とは、若し梵本に質を存せば、當に性、頑に同じと云ふべし。頑とは木石の識知する所もなく、觸受の義もなきが如きを謂ふ。云ふ所の同とは是れ興喻の言なり、一向に即ち彼れに同なるには非ず。又(二)大品に般若は無知なり、自性鈍なるが故にと云へるは、即ち此の字門の義と合す、故に文を飾る者、古譯の辭を存するのみ。夫れ自性鈍とは即ち是れ極無分別の心なり、愚にあらず、智にあらず、慧にあらず、識もなく、智もなく、妄もなく、覺もなし、乃至一切の諸法、動搖すること能はず、ただ是れ一純に金剛の地よりも固し。然る所以は、世間の人の如きは、取捨不忘なるを以ての故に、智慧を尙びて愚癡を棄て、涅槃を尊びて生死を賤ん

(二) 大品 大品般
若經第十三。

す。而も今一概に本不生なり、乃至一概に本性寂なれば、誰れをか利とし、誰れをか鈍とせん。彼の金剛の利刃の如きは、不堅の物に對するを以ての故に、偏へに一邊を用ふるを以ての故に、則ち名けて利とす。若し所向の處を悉く是れ金剛ならしめば、舉體みな圓にして、偏用す可からず、則ち利の相同じく鈍に歸す。

「沙字門は一切諸法一切諦不可得の故に」とは、梵には^サ薩野也と云ふ、此には翻じて諦とす。諦とは諸法の真相の如く知りて、不倒不謬なるを謂ふ。日をば冷かならしむ可く、月をば熱からしむ可くとも、佛、苦諦を説くこと、異ならしむ可からず、集は眞に是れ因なり、更に異なる因なし、因滅すれば則ち果滅す、苦を滅するの道は即ち是れ眞の道なり、更に餘の道なしと説けるが如し。復次に^ニ涅槃に云はく、苦を解すれば苦なし、是の故に苦無くして眞諦のみあり、餘の三も亦しかり、乃至四諦を分別するに、無量の相及び一實諦ありと。聖行品の中に之を説けるが如し。是れを字門の相とす。然も一切の法は本不生なり、乃至畢竟無相の故に、語言斷の故に、本性寂の故に、自性鈍の故に、當に知るべし、見もなく・斷もなく・證もなく・修もなしと。是の如くの見斷證修は悉く是れ不思議法界なり、亦空・亦假・亦中なり、實にあらず・妄

(1) 薩野也 Sat-ya

(2) 涅槃 南本涅槃經第十二。

にあらず、定相として示す可きことなし、故に諦不可得と云ふ。中論の四諦品の中にも、亦廣く其の義を辨せり。

「訶字門は一切諸法因不可得の故に」とは、梵には^{ケイ}係怛囉と云ふ、即ち是れ因の義なり、^(一)因に六種あり、及び^(二)因縁の義の中の因に五種あり、阿毗曇に廣く説けるが如し。若し訶字門を見るときは、即ち一切の諸法は因縁によらずして生ずること無しと知る、是れを字相とす。諸法は展轉して因を待ちて成るを以ての故に、當に知るべし、最後は依なしと、故に無住を説きて諸法の本と爲す。然る所以は、中論の如きは、種種の門を以て諸法の因縁を觀するに、悉く不生なるが故に、當に知るべし、萬法は唯心なりと。心の實相は即ち是れ一切種智なり、即ち是れ諸佛の法界なり。法界は即ち是れ諸法の體なり、因とすることを得ず。是れを以て之を言はば、因も亦是れ法界、緣も亦是れ法界、因縁所生の法も亦是れ法界なり。前に説ける阿字門は本より末に歸して、畢竟じて是の如くの處に到る。今亦訶字門も亦本より末に歸して、畢竟じて是の如くの處に到る。阿字は本より不生なれども一切の法を生ず、今も亦無因待を以て諸法の因とす。終始同じく歸す、則ち中間の旨趣皆知る可し。

(1) 係怛囉 Het-ya
(2) 因に六種俱
舍論第六に六因俱
説けり能作因俱
有因同類因相應因
運行因異熟因な
(三) 因縁の義俱
舍論に四縁を説く
緣増上縁無間縁
緣の因縁の中に五
の因縁の立つ能は
前の六因中に餘の
五因を除きたる餘
依立持養を五因と
す。

復次に此の中の旋陀羅尼字輪の相とは、謂はく、一字を以て一切の字義を釋し、一切の字を以て一字の義を釋す、一字の義を以て一切の字義を成立し、一切の字義を以て一字の義を成立す、一字の義を以て一切の字義を破し、一切の字義を以て一字の義を破す。一字と一切字との如きは、逆順に旋轉することも、此れに例して知る可し。

云何が一字を以て一切の字を釋する。迦字を釋する時の如きは、ただ種種の因縁を以て、本不生を觀じて、即ち無所作の義を見る。乃至訶字を釋する時も、亦種種の因縁を以て、本不生を觀じて、無因の義を見るなり。云何が一切の字を以て一字を釋する。阿字門を釋する時の如きは、種種の因縁を以て、無造作を觀じて、即ち本不生の義を見る。乃至種種の因縁を以て、諸法の無因を觀じて、即ち本不生の義を見る。餘の字も例して爾り、當に廣く之を説くべし。

云何が一切字を以て一字を成立する。謂はく、一切の法は本不生なり、無作なるを以ての故に。虚空の如く無相なるが故に、無行の故に、無合の故に、乃至無因の故に。云何が一字を以て一切の字を成す。謂はく、一切の法は無作なり、其れ本不生なるを以ての故に、乃至一切の法は無因なり、其れ本不生なるを以ての故に。

云何が一切の字を以て一字を破する。もし人の執じて、諸法は本あり生ありといはば、彼れを破して言ふべし、若し諸法は造作を離れて、而も生ありと云はば、是の義然らず。乃至若し諸法は因不可得にして、而も生ありと云はば、是の義然らずと。云何が一字を以て一切の字を破する。もし人の執じて造作ありといはば、彼れを破して言ふべし、若し諸法本不生の義已に成立して、而も作ありと云はば、是の義然らずと。乃至因ありと執せば、亦彼れを破して言ふべし、若し諸法本不生の義已に成立して、而も因ありと云はば、是の義然らずと。

云何が逆順旋轉する。謂はゆる、若し法本來不生ならば、則ち無造作なり、若し無造作ならば、則ち虚空の如く無相なり、若し虚空の如く無相ならば、則ち行あることなし、若し行あることなくば、則ち合あることなし、合あることなくば、則ち遷變なし、乃至若し無因ならば、當に知るべし、法は本不生なりと。是れを名けて順とす。若し法、無因ならば、則ち諦不可得なり、若し諦不可得ならば、則ち自性鈍なり、若し是れ自性鈍ならば、當に知るべし、本性寂なりと、若し本寂ならば、當に知るべし、無相なりと、乃至若し本不生ならば、當に知るべし、無因なりと。是の如くの八種の

義門を以て、自在に旋轉して之を説くべし。

復次に今一切の法と言ふは、是れ惣相なるのみ。若し摩訶般若經に依らば、色より乃至一切種智まで、一一に別異して之を説くに、義則ち無量なり。又一一の門、當に眞言住心品の中の淺深の相に約して、次第に分別すべし。字門轉するを以ての故に、義も亦不同なり、故に能く百千萬億の旋陀羅尼を出生す。

復次に如來の一切の言説は、眞言に非ざること無きが故に、當に是の如くの字義を以て、普く一切の修多羅に入るべし。是の故に智度論に云はく。菩薩若し一切の語の中に阿字を聞く時、即時に義に隨ひて、謂はゆる一切の法は、初よりこのかた不生の相なりと知るべし。阿提をば秦に初と言ふ、阿轉をば秦に不生と言ふ。若し囉字を聞くときは、即ち義に隨ひて、一切の法は離垢の相なりと知るべし。囉字をば秦に垢と言ふ。若し波字を聞く時は、即時に一切の法は第一義の中に入ると知るべし。波羅末陀をば秦に第一義と言ふ。若し遮字を聞くときは、即時に一切の行は非行なりと知るべし。遮利夜をば秦に行と言ふ。若し那字を聞くときは、即ち一切の法は不得・不失・不來・不去なりと知るべし。那をば秦にと。彼の論の四念處品の中に廣く説けるが如し。

(二) 智度論 第四十八

(一) 婆嚩娜 Bhi-yana

復次に一切の名言の中に、阿の聲あるは悉く阿字門に入る、迦の聲あるは悉く迦字門に入る、乃至訶の聲あるは悉く阿字門に入る。是の故に一字門の中に無量の義を具す、訶字門の中に從ひて、ただ無因の義あるのみに非ず、餘の字門も當に例して爾りと知るべし。且く娑哆也の如きは是れ誦の義なり、是の故に經に、娑字門一切諸法諦不可得と云ふ。又娑哆は是れ着の義なり、是の故に供養法の中に、娑字門一切諸法無染着と云ふ。又婆嚩の如きは是れ有の義なり、是の故に經に、婆字門一切諸法有不可得と云ふ。又婆嚩娜は是れ觀の義なり、是の故に供養法の中に、婆字門一切法離諸法觀と云ふ。餘は皆此れに倣へ。所以に大品經及び華嚴の入法界品に、皆四十二字門を説き、涅槃の文字品・文殊所問經・大集の陀羅尼自在王品に、各悉曇の字母を釋すること、此の經の所説と、其の義或は異、或は同なり。若し此の意を得るときは、諸經冷然としてはるかに會へり、違ひ妨ぐる所なし。

復次に一一の字門に皆不可得と言ふは、中道の義を明さんが爲の故なり。今且らく車字門に寄せて之を説かば、鏡中の面像を觀るが如きは、本質を以て因とし、淨鏡を縁として、影像現見することある、是れを所生の法とす。妍媸の相現前して謬らず、

不可得は言中道第一義諦は言心量及ばざる所なれば不可得と云ふ。今諸字の字義は直ちに第一義諦の實相に契合せるが故に不可得と云ふなり。

みな成就することを得と云ふ。

次に世尊の説ける偈の中に、「真言三昧門は一切の願を圓滿す」とは、具さに梵本を存せば、真言の下に於て、更に道の字を加ふべし。加行の人、一縁にして阿字に住するを、即ち阿字の三昧と名く。此の阿字の三昧は即ち是れ心明道を開く門なり、餘りの一切の字も亦是の如し。一切の願とは梵には^{サハバヤシヤ}薩嚩奢と云ふ、是れ心に祈願する所の願なり、謂はく、諸の衆生、此の三昧門を修すれば、一切の志求みな圓滿することを得。此の願圓滿する時、即ち是れ諸の如來の不思議の果なり。常住の果・無師の慧すら猶ほ能く衆生に給與す、何に況や世間の悉地の願をや。復次に如來の一一の三昧の聲字實相は、有佛にも無佛にも法として是の如くなるが故に、即ち是の故に流せず、即ち是れ^三如來の本地法身なり。此の法身を以て、遍く衆生に施さんと欲するが爲めの故に、還つて自在神力を以て、是の如くの法爾の聲字を加持す。故に此の聲字は、即ち是れ諸佛の加持の身なり。此の加持の身は、即ち能く普く隨類の身と作りて、在らざる所なし。當に知るべし、聲字も亦また是の如しと。是の故に行者但だ一心に諦縁して、此の聲字を觀せば、自ら當に佛の加持身を見るべし。若し加持身を見れば、即

(一) 薩嚩奢 三昧

(二) 如來の本地法身不二性相
即一人の法に、眞言
即佛の身、佛身即
ち眞言なり。

ち本地法身を見る、若し本地法身を見る時は、即ち是れ行者自身なり。故に一一の字門は、即ち是れ如來の不思議の果なり、別處より來るにあらざるなり。

「衆の勝願を具足するは、眞言の決定の義なり」とは、具に梵本を存せば、當に一切のあらゆる勝願を具するは、眞言決定の實義なりと云ふべし。此の中の勝願は、梵には嚩嚩と云ふ、是れ種種の功德を具するなり、謂はゆる、三昧・惣持・力・無畏等の所願已に滿ち、求むる所悉く備るの義なり。前の願の字と、梵音は各殊なり。云ふ所の決定とは且く阿字の如きは、若しは聲、若しは字、舉體不生なり、聲と字との義も即ち全く體を擧げて不生なり。若し證する時は、還つて只だ此の不生を證す、中間に更に間雜することなく、亦異路なし。若し此の眞實の義を見る時、假使十方の諸佛同時に現前して、種種の相似の波羅蜜を説きて、其の心を改易せしめんと欲すとも、然も亦疑惑を生せず、故に決定と云ふ。復次に具足衆勝願とは、是れ如來の十世界微塵數の内證の功德なり。決定せるを以ての故に、一一にみな金剛印と成る。此の自證の身よりまた加持身を起すが故に、「超越於三世」と云ふ。「無垢同虚空」とは、即ち是れ淨無垢不思議の心地なり。大方便を以て、此の地の上に於て、普門漫荼羅を畫作す、故

に經に次に、「不思議の心に住して、諸の事業を起作す」と云ふ。梵本には具に心地と云ふ、偈の中には五字を以て句を成すを以て、累ね書す可からず、然も地とは即ち是れ心の體なり、故に但だ住不思議心と云ふ。眞言三昧門の中に、是の如く不思議の果徳ありて、一國に周給して、等しく衆生に賜ふに堪能なりと雖も、若し諸の衆生、難遭の想を生じて、供養し修行すること能はざれば、譬へば王膳まへに盈つれども、飲噉に心なきが如し。則ち諸佛も其れ此の如きをば云何せん、故に經に次に、「若し修行の地に到るに、不思議の果を授けたまふ」と云ふ。此の(一)修行地は即ち是れ淨菩提心の初法明門なり、例へば聲聞の見諦以後、また修道の位に入るが如し。此の菩薩、(二)百字明門の中に於て、各蓮華胎藏漫荼羅世界海を見るに、其の莊嚴の相皆悉く不同なり。先づ法字門大空輪の中より、訶字門を以て大風輪を超す。次に其の上に於て、嚙字門を以て、香水海を起す、次に其の上に於て、阿字門を以て、金剛地・金剛輪山を起す、餘は華嚴經に説けるが如し。此の百の蓮華藏の一一の世界の菩提漫荼羅に於て、各十世界の諸菩薩・金剛等ありて、以て眷屬たり。此の瑜伽者、能く座を起たすして、悉く是の如くの諸佛の會の中に至る、亦能く次第に諸の善知識を詢求す。故に(三)初地の菩薩の化、百佛

(一)修行地とは通じて修行の地なり
 (二)百字明門とは淨菩提心の初法明門なり
 (三)初地の菩薩の化とは蓮華藏の十世界の諸菩薩の會の中に至る事なり

(一)初地の菩薩の化とは蓮華藏の十世界の諸菩薩の會の中に至る事なり
 (二)百字明門とは淨菩提心の初法明門なり
 (三)初地の菩薩の化とは蓮華藏の十世界の諸菩薩の會の中に至る事なり

一三、亂脫

四二

國に滿つと云ふ。徒らに之を見るのみに非ず、亦能く此の百の蓮華藏を以て、轉じて自身と作す。初地の牙・莖・花・苞・等の十心滿つる時に至りて、一明門の中より、(一)十解脫門を開出して、千世界を成すに、皆是れ隨分不思議の果を授くることを蒙るなり。一地の畔に至り、虚空雲海明門の中に於て一一にみな蓮華藏莊嚴世界の性・相・形類・展轉不同にして、用て自身と作して、自在無碍なるを見る。是れを不思議果滿と名く。次に二偈あり、勸信印成す、故に「是れ第一の眞實なり、諸佛の開示したまふ所なり」と云ふ。此の中の開示は、即ち是れ佛の知見なり、法華と義同じ。次に半偈に、「若し此の法教を知らば、當に諸の悉地を得べし」と云ふは、是れ諸佛の道同を引きて、世諦を信せよと勸む。若し眞言行者、明かに此の法教の中の次第方便を解して、必定の信を以て、説の如く修行せば、當に一切の悉地を成就することを得べし。若し此の説然らずといはば、是れ十方三世の佛に、本誓を違背して、衆生を欺誑する罪あり。次の一偈は眞諦を信せよと勸む。然も此の悉曇の字母は、幼童も皆亦誦持す、護摩供養等に至りては、韋陀の世仙も亦皆共に作す、而も今此の眞言門獨り秘密を成す所以は、眞實の義を以て加持する所なればなり。若しただ口に

△多の聲 文法上の複数を云ふ。

△維摩詰 人名なり。今この文は維摩詰の經に依る。

眞言を誦じて、其の義を思惟せずば、ただ世間の義利を成す可し、豈に金剛の體性を成すことを得んや。故に偈に、「最勝の眞實の聲の眞言と眞言の相と、行者諦かに思惟せば、當に不壞の句を得べし」と云ふ。此の聲とは即ち是れ眞言門の語密の體なり、阿の聲の中の第一眞實の義の如きは、謂はゆる本不生なり。初に眞言と云ふは、梵本に△多の聲を以て之を呼ぶ、即ち是れなり、即ち是れ惣じて百字門の世諦字輪の相を指すなり。次に眞言の相と云ふは、是れは此れ眞言の實相なり、即ち此の眞言の實相は、諦かに思惟するに由るが故に、一一にみな蓮華臺に入る。句とは是れ迹息の處なり。經に云はく、「その時に執金剛秘密主、佛に白して言さく。希有なり、世尊、佛は不思議の眞言相の道法を説きたまふ」とは、聲聞の法には、解脱の中に文字あることなけれども、而も△維摩詰は文字を離れずして、解脱の相を説くが故に、不思議解脱と名くるが如く、今此の字輪も亦爾り。即ち無相法身を以て種種の聲字を作し、種種の聲字を以て無相法身を作すが故に、不可思議眞言相と名く。「一切の聲聞緣覺と共にらず、亦普く一切衆生の爲にするに非ず」とは、此の經は是れ法王の秘寶なり、妄りに卑賤の人に示さず、釋迦出世して四十餘年にして、舍利弗等の慇懃に三請するに因り

△今此の本地 顯教の法華經とは此の最深秘處とは此の最大法華經に於て説き得ざりし本地の義にあたる深秘の義なり。

て、方に爲に略して、妙法蓮華の義を説きたまひしが如く、△今此の本地の身も、又是れ妙法蓮華の最深秘處なり。故に壽量品に云はく、常に靈鷲山及び餘の諸の住處に在り、乃至我が淨土は毀れざれども、衆は燒盡すと見ると、即ち此の宗の瑜伽の意なるのみ。又補處の菩薩の慇懃に三たび請ひしに因りて、方めて爲に之を説きたまへり、苟くも頓悟の機なければ、則ち其の手に入らず、故に普く一切衆生の爲にするにあらず。亦是れ前の偈の中の、修行地に到りて方に不思議の果を授くと云ふを領す。次に勸信印成の二偈を領解することを云ふ、故に「若し此の眞言道を信する者は、諸の功德の法みな當に満足すべし」と云ふ。若し満足する時には即ち是れ衆の勝願を具足するなり。已上は廣く眞言の支分を説き竟りぬ。

執金剛また上の文を承け躡みて「佛、次に入漫荼羅所須の次第を説きたまへ」と請ひたてまつる。世尊の説きたまへる偈の中に、先づ奉食香花等及與寶瓶の二句を答へたまふを、惣じて供養の支分と名く。諸の供養の具の中に就きて、先づ花を獻することとを明す。凡そ奉獻する所は、各諸尊の性類、及び漫荼羅の方位等に隨ひて、一一に善く之を分別せよ。當に色香味觸をして、人の心を適悅せしむべし。其の水陸の不祥

の諸花は、但だ折伏の用に作す可きのみ。白・黄・赤の三色の中に、如來部の類には、當に白色を用ふべし、蓮花の眷屬には、黄色を以てせよ、金剛の眷屬には、赤色を以てせよ。復次に當に漫荼羅の方位の如くすべし、圓壇ならば白を以てし、方壇には黄を以てし、三角の壇には赤を以てせよ。復次に諸佛には白を用ひよ、諸菩薩には黄を以てし、諸の世天には赤を以てせよ。其餘の香等も亦當に此の意に准傍すべし、兼ねては蘇悉地・瞿醯等の文を採りて之を用ひよ、備さに載す可からず。鉢頭摩は是れ紅蓮華なり。凡そ青赤白蓮等の水生の諸華は、皆通じて諸尊に獻す可し。龍華奔那伽とは、此の奔那伽は是れ龍樹花なり、彌勒世尊此の樹下に於て成佛したまふ。其れただ龍華と云ふは、是れ龍の中に尙ふ所の花なり。西方に頗る其の種あり。其の計薩囉花と末利花と得菓羅花と瞻蔔花と無憂花と底羅劍花と鉢吒羅花と娑羅樹花とは、皆是れ天竺にある所なり、此の方には具さに識る可からず。經に是等鮮妙花と云ふは、梵本に兼ねて或の聲あり、此れ等の諸花みな通用す可きを謂ふ、故に擧げて以て例とせり。然れども或は餘分にはある所なれども、彼の方には無き所ならば、但だ人の心をして好む所あらしめ、世間に以て吉祥と爲すをば、皆供養す可し。當に一一に意を存して

(一) 其の栴檀乃至
四卷の義釋に依れ
り栴檀は青木と稱
金の栴檀は青木と
是れ此の栴檀香
なり此の栴檀香
とあり蘇悉地經
(二) 蘇悉地經塗
香藥品瞿醯經奉
請供養品

善く之を分別すべし。採り集めて以て鬘と爲すときは、錯雜し、莊嚴し、或は綴り、或は結べるを謂ふ。行人の懸淨淳厚の心を以ての故に、則ち諸尊をして歡喜護念せしむ。

次に塗香を明す。(一) 其の栴檀と青木と鬱金とは皆此の方に有る所なり。苜蓿香とは梵には薩跋嚩と名く、今の迦頗は類なり、今時の妬路婆草も是れ迦頗の類なり、今西方の苜蓿香は此の間の苜蓿香と稍異なり。及び餘の妙塗香とは、沉水・甘松・丁香・桂心・西方の苴蔻・香附子等の如し。(二) 蘇悉地と瞿醯との中に説けるが如し。又云はく、其の塗香の中に、衆生の身分と及び紫鑛并に蟲の食せる等を用ふること勿れ、當に淨好の者を取りて、水を以て之を研るべし。若し佛に獻せば、當に新好の鬱金或は黑沉香を用て、和するに龍腦を以てすべし。蓮華の眷屬には、當に白檀を以てすべし。金剛の眷屬にも亦當に白檀を以てすべし。自餘の諸尊には、意に隨ひて合して之を用ひよ。合す所の香に隨ひて、みな龍腦を置け。

次に焚香を明す。當に沉水香・松香・嚙藍香・龍腦香を用ふべし。白檀香は西方には摩羅度と名く、是れ山の名なり。即ち智論に云ふ所の、摩梨山を除きては、更に旃檀

を出す處なしとは是れなり。白膠香ビヤクコウは是れ娑羅樹の汁なり。室利嚩塞迦香シクリパツキヤとは此の方の薰陸香クンロクに似たり。室利は具德吉祥の義なり、言ふ心は、此の香は天神に至るまでも、皆悉く愛樂するが故に、以て稱とす。「及び餘の焚香の類、芬馥として世の稱美する」とは、亦上に於けるが如し。(三) 罽醢に云はく、燒香は白檀・沉水を用て相和して、佛の類に供養せよ、其の樹の汁の香は蓮華の類に供養せよ、黒沉及び安悉は金剛の類に供養せよ、或は彼の法に依りて香を作りて、普遍く和合して、以て諸尊に獻せよと。「應に法教に隨ふべし」とは、眞言密印を以て去垢し加持する等を謂ふ、供養次第の中に説くが如し。自餘の塗香及び花等も、此れに例して知る可し。

次に「教に依りて諸食を獻す」とは、經の大本の中の如きは、諸の食供等に各修治の方便あり、深密の意に至りては、一一に法門と相應すべし、此の方には既に具せざれば、但だ蘇悉地等に依りて、法の如く造作し・結護し・加持するを、即ち依教と名く。乳糜ニウヂとは、西方には粥に多種あり、或は烏麻の汁を以てし、或は諸豆并に諸の藥味を以てす、(三) 十誦の藥法等の文に廣く明せるが如し。然も乳糜を以て最上とす。凡そ食を獻せん時は、當に更に加ふるに酥ソと沙糖等を以てして、色味を兼具せしめて、先づ

(三) 十誦の藥法
同第三十五卷等に
飲食醫藥のこまを
明せり。

之を奉るべし。各西方には飯に多種あり、亦酪飯を以て上とす。此の食を獻せん時は、配るに沙糖と鹽との薑との諸味を以てす。又羹を奉るには、當に彼の方の造食の法に依り、或は國俗の用ふる所に隨ふべし。歡喜丸は酥を以て諸の餅を煮て、揉ミふるに衆味と及び三種の辛藥等を以てして、種種に莊嚴せしむべし。漫茶迦マンチャカは是れ此の方の薄餅なり。其の百藥餅は、是れ天竺の餅の法、糖と蜜との諸味を以て麵に和して、酥油を以て之を煮る、至りて甘美なりとす。沙糖餅とは、此の沙糖を塞茶センチャと名く、狀は益州に出づる所の者の如し。色は甚だ鮮白なり。之に觸るれば便ち碎く。此れを用て水に和して、先づ麵を以て餅に作りて、數次其の中に漬けて、然して後に之を食す。淨妙とは務めて精潔ならしめ、色香を兼備せしむるを謂ふ。布利迦フリカは譯して著饅餅ジャクランベイと云ふ、種種の上味を以て和合して、饅と爲して之を作る。問穴餅とは二種あり、或は刺して孔穴をなす、或は狀、亂絲の如く重重の間穴あり、加ふるに衆味を以てす。末塗失囉餅マツラシラとは亦著饅なり、兼ねて糖と蜜とを之を塗る。娘諾迦餅ニョクカとは起麵キシメンを用て之を用て之を著饅に作して酥油を以て煮るなり、狀は水上の浮泡の如くして甚だ愛しつ可し。無憂とは是れ縁を巻ける沙糖餅なり。推鉢吒食ヒツパツとは是れ不起麵ヒツパツの饅餘ヒツパツなり。是の如くの

諸餽饈とは亦諸の方國に隨ひて、あらゆる上味と及び珍妙の果とを、意に隨ひて之を獻するを謂ふ。其の白糖と石蜜と沙糖と酥蜜とを、又各別に之を置け。種種の諸漿飲とは、西方には漿の法甚だ多し、皆雜ふるに香藥を以てす。美にして疾を癒す、及び滯陶等の諸の非時漿は、毗尼に説ける所の如し。其の乳酪を食するには、亦畢撥或は龍腦等を用ひよ。醫明の食法の如く之を爲せ。大抵西方に食及飲噉を造る、先後の次第は、多く藥術に依る、養生防身の功あるが故に、多く天年を盡して、夭折の患鮮し。凡そ食を置く處には、當に塗香を以て周遍して之を塗るべし。食を置く壙の内には、遍く蓮荷の葉或は芭蕉の葉等を布きて、周遍せしめよ。若し無くば新淨の白氈、或は淨き布を用ふべし、極めて淨水を以て洗濯して、香を以て遍く塗るべし。食を布く時、上首の諸尊には當に之を増加すべし。謂はく、中胎藏の毗盧遮那、第二院の觀音・金剛手、次の院の文殊等の四菩薩、外院釋迦牟尼び所奉の本尊等なり。もし餘位に一分を置かば、上首の諸尊には當に二分なるべし。或は餘位に二分置かば、上首の諸尊には三分を置け。瞿醯に云はく、漫荼羅の主には當に數倍して之を加ふべし、此の階降の不同ありと雖も、然れども上諸佛より、下世間の鬼神に至るまで、みな心を以て供養し、

務めて豊厚均等ならしむべし。乃至辨せずば但だ當に部主を供養すべし、或は食を内院に置きて、運心して一切の諸尊を供養せよと。所奉の香花等も此れに例して知る可し。

次に燈明を奉獻することを説かば、香油の類甚だ多し、謂はく、麝香^{セシヤク}・蘇摩那^{ソモナ}香油等なり。凡そ香油を作る法は、當に新花を取りて鬘を作る法の如くすべし。之を穿きて、日中に懸け置きて、承くるに油器を以てし、物を以て油を取りて、花の上に捨て之を灌ぎて、還つて油の中に墮らしめ、又また油を取りて之を灌ぐ。是の如く周りてまた始め、日出より入りて乃ち停め、明日又新花を取りて之を作ること前の如くし、此の油の香氣をして、此の花の香氣と均等ならしめて然る後に止む。其の食及び燈明等を獻する諸器には、衆寶を以て上とす、若し辨すること能はずば、銀銅等を用ひよ、乃至新淨の瓦器も亦事に充つることを得。

四方繪幡蓋とは、若し財力あらん者は、當に一一の尊の所に於て、各別に之を置くべし、亦雜寶を以て上とす。若し辨すること能はずば、綵乃至繪畫を用ひよ。畫く時には當に淨き物を用ふべし、膠等を用ふることを得ざれ。若し廣く造ること能はずば、

下至四方に各一蓋を置き。門標鈴鐸等は、みな力分に随ひて作れ。種種の莊嚴は兼ねて入秘密漫荼羅品の中に示す所の相に准約せよ。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第七終

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第八

沙門一行阿闍梨記

入漫荼羅具緣品第二の餘

經に云はく、「或は心を以て供養せよ、一切皆之を作せ」とは、(一)世尊の説きたまへるが如く、諸の供養の中には心を最も上とす。前の如くの一一の供物をば、皆當に運心して遍く法界に及ぼし、眞言秘印を以て之を持すべし、供養次第の中に廣く説くが如し。或は觀せよ、大寶樹王の遍く一切世界を覆ふこと、華嚴の菩提樹王の相の具足し莊嚴するが如く、一一の所須の受用の具に随ひて、悉く中より出して、窮盡あることなし、遍く一切賢聖の前に至りて廣大に供養し、并に普く一切衆生を濟ふと。是の如く運心し已りて、當に虚空藏轉明妃^{コウクウザウアンミンキ}を用ひて加持すべし、自然に意に隨ひて成就するなり。

次に吉祥瓶の法を説く。當に金銀等の寶を用ふべし、乃至無くば盜^{ホトギ}或は淨瓦を以て之を爲りて、極めて圓滿端正ならしむべし、又洩漏^{スイロウ}せしめざれ。毗尼の中の方便の如

(一)世尊の説きたまへるが如く、諸の供養の中には心を最も上とす。前の如くの一一の供物をば、皆當に運心して遍く法界に及ぼし、眞言秘印を以て之を持すべし、供養次第の中に廣く説くが如し。或は觀せよ、大寶樹王の遍く一切世界を覆ふこと、華嚴の菩提樹王の相の具足し莊嚴するが如く、一一の所須の受用の具に随ひて、悉く中より出して、窮盡あることなし、遍く一切賢聖の前に至りて廣大に供養し、并に普く一切衆生を濟ふと。是の如く運心し已りて、當に虚空藏轉明妃^{コウクウザウアンミンキ}を用ひて加持すべし、自然に意に隨ひて成就するなり。

五寶五穀五
 穀品に依れば五
 穀とは胡麻・小豆・
 大麥・小麥・稻穀・
 祇・毗・夜・乞・羅・提
 波・婆・訶・提・波・枳・
 羅・尼・羅・金・銀・商
 波・或は珠なり。蘇
 悉地經備物品に依
 れば五穀は右に同
 眞珠・赤珠・螺貝・
 哩・勿哩・訶底・稅
 擬・里・訶底・稅・
 三・里・訶底・稅・
 七・里・訶底・稅・

く、淨水を灌漑して、其の中に盛滿して、(二)五寶・五穀・五藥を入れよ、罽醢の中に於て之を説けり。然も此の五藥は皆五天より出でたり、此の方に遍く有るは能はず。又前に説きし所の如き、諸の塗香の末を取りて、水に和し、兼ねて龍腦と牛黃とを置け。瓶の口に於て挿むに寶華を以てせよ、或は方土の有らゆる名花に隨ひて、其の花・果・條・葉・茂好にして圓具せるものを取りて、間錯し垂布せしめて、極めて端嚴ならしめよ。綵繒を以て頸に纏ひ、并に華鬘を繋けて、塗るに衆香を以てせよ。結護作淨の方便は亦供養次第の中に説くが如し。(三)中胎藏には當に五瓶を安くべし、最中の大日の瓶をば華臺に安在し、餘をば外の華臺の中に置け。(四)凡そ中胎に食を獻せん時は、四佛四菩薩は各本座に隨ひて、華臺の内にをき、毗盧遮那に奉らんをば、華臺の前に置け。(五)若し力あらば、一一の尊の所に於て、みな一瓶を置け、如し爾ること能はずば、内外の方に隨ひて、上首の諸尊の處に於て之を置け、其の四門の處には各二瓶を置け、四角には各一瓶を置け、通門の外に別に一瓶あらしめよ、降三世の眞言印を用て之を加持せよ。出入の時に身に灑ぎて自ら護し、及び弟子を召して入れん時にも、亦用て之を灑ぐに擬す。護摩の處にも又別に一瓶を置け、大略百餘瓶なる可きなり。(二)經

四 亂脫

(一) 大勤勇 運智
 院の三角形。蓮華金剛類の
 主 蓮華部の主即ち觀音院の觀自在
 ち 金剛部の主即ち金剛手の金剛
 手となり。四大菩薩 文殊・虛空藏・地藏・除蓋障なり。
 六 亂脫

八 亂脫

(四) 兼服 上好の服を云ふ、其價常の物に兼倍するの謂なり。

に六瓶と云ふは、是れ最少の限なり、當に中胎と四方とに於て各其一を置くべし、其の門外の一瓶は必定して之を闕ぐることを得ざれ。(一)若し十八の瓶を用ひば、中胎に一瓶を置け、第二院の(二)大勤勇の處と、(三)蓮華金剛類の主と、及び門とに凡そ四瓶なり。第二院の(四)四大菩薩、謂はく文殊等に各一瓶を置け、外院の四門四角、及び門外の者と、之を用ふるに適に足りぬ。(六)灌頂を受けんと欲する所の者若し多くば、各人数に隨ひて一瓶を造らしめよ、闕少することを得ざれ。香水瓶の如く諸の闕伽の器も亦然り、當に金・銀・白瑠璃等を用ひて、塼となすべし、乃至商佉と熱銅と石と木と或は樹葉・新瓦を以て衆の香水を盛り、諸の名花を置け。前の如く置く所の瓶の處に亦一一に之を置け。

又當に諸尊の處に於て、各淨衣を奉るべし。前の所説の如く、上首の諸尊には亦獻食の法に准じて倍增し已る、故に「各奉(四)兼服」と云ふ。若し辨すること能はずば、但だ上首の諸尊の處に於て之を置け。或は箱篋を以て、其の所有に隨ひて、中胎院の内に置きて、運心して一切の諸尊を供養せよ。凡そ中胎に獻する供具は、當に胎外の一重の空界の中に置くべし。若し無名の諸尊に獻せば、當に三重の界縁の内に置くべ

(一) 深秘釋 六種
 供養は六度に配
 す。檀は閻伽、或
 は塗香、忍は花鬘、
 進は燒香、禪は飯
 食、慧は燈明なり。
 燒香の唯だ一つに
 して中央にあるは
 精進の六度總てに
 遍す可きを表す。
 一、亂脫

(二) 天樹王 切利
 天上に波利質多羅
 樹あり、高さ百由
 旬、枝葉擲がること
 五十由旬、衆雜色
 の花芳香を發すこ
 云ふ。

し。又供養の時には、先づ當に閻伽水^アを奉り、次に塗香を獻じ、次に花・燒香・飲食を
 獻じ、後に燈明を獻すべし、經文は先後不次なり。復次に若し(一)深秘の釋ならば、
 三塗香は是れ淨の義なり、世間の塗香の能く垢穢を淨めて、熱惱を息除するが如し。
 二今行者、等虚空の閻伽を以て、菩提心の中の百六十種の戲論の垢を洗滌す。住無爲
 戒を以て之を塗れば、生死の熱惱除滅して、清涼の性を得、故に塗香と曰ふ。謂ふ所
 の花とは、是れ慈悲より生ずる義なり。即ち此の淨心の種子、大悲胎藏の中に於て、
 萬行開敷して佛菩提樹を莊嚴す、故に説きて花とす。燒香は是れ遍く法界に至るの義
 なり。(二)天の樹王の開敷する時、香氣は逆風にも順風にも自然に遍布するが如く、菩
 提の香も亦爾り、一一の功德に隨ひて、即ち慧火の爲に燒かれ、解脱して風に吹かれ、
 悲願力に隨ひて自在に轉じて、普く一切を熏す、故に燒香と曰ふ。飲食は是れ無上の
 甘露、不生不死の味なり。若し此の果徳成熟して更に過上なき味を服する時を、即ち
 入證と名く、故に説きて食とす。謂ふ所の燈とは、是れ如來の光明、暗を破る義なり。
 言ふ意は果地に至る時、心障都て盡きて、無盡の慧を轉じて遍く衆生を照す、故に説
 きて燈とす。若し豎に説かば、一一の地の中に。みな是の如く五義を具す。若し横

に説かば、一一の門の中に、みな是の如く五義を具す。例へば上の文に明す所
 の諸の食は、口に適ふことは即ち一なりと雖も、然も調膳の人の身手に隨ひて、種
 種の滋味の不同なることあるが如し。餘の香花等も當に例して爾りと知るべし。若
 し行者善く五字門を以て、金剛の無戲を作して、普く衆に應ずること、譬へば五
 味を和し、五彩を布き、五音を韻べ、五樂を調ふるに、性分は五種に過ぎずと雖
 も、千變萬化して巧轉窮まらざるが如し。當に知るべし、是の人は即ち塗香三味の
 義を解し、亦花三昧・燒香三昧・飲食・燈明三味の義を解し、亦此の五種の陀羅尼の
 義を明す。是の如くの種種の法門の供具を以て、心王の如來を供養し、能く諸尊を
 歡喜せしむれば、求むる所必ず獲。若し此の中の意趣を以て、反つて世諦の香花等
 を觀するに、自然に彼の色香の性分の所應の用處を知り、無量の方便、物に觸れて
 生ず。

經に「是の如く供養を修して、次に應度者を引く」と云ふより以下は、正しく作法
 の時の加持教授の支分、及び護摩の支分を明す。加持教授の中に就きて、凡て金剛手
 の三問を答へたまふ。謂はゆる云何が弟子を引かん、云何が灌頂せしめん、云何が師

二 金剛甲 櫻金
 剛甲の印言を結誦
 するなり此の印
 言によりて行者の
 被服より諸光を生
 じて諸覺の障を生
 ぐ
 三 如來身等 如
 來甲又は五部の
 蓮花甲又は五部の
 甲ある可きかと云
 ふに、今の文は阿
 闍梨の事を作す時
 は大日の身をなす
 曼荼羅の事を作す
 時は金剛薩埵の身
 となるの意を明
 す、三部の意を明
 するに非ざるが故
 を明す本意を明
 り。之に説かざる
 なるに説かざるに

を供養せんと、此の三句を問ひ訖りて、方に護摩の處を問ふ。今此の答の中には、先
 づ弟子を引くことを説き了りて、即ち護摩を明し、方に所餘の二句を答ふ。然るに護
 摩は一切の法事の中に通ず、但だ弟子を加持するのみに非ず、故に宜しく別して一種
 の支分と作すべし。前の卷の中に於て、已に第七夜の正作法の時、漫荼羅の位を畫く
 ことを明して、中間に別に所要の支分を明す、是を以て文勢間斷せり、今更に前の文
 を承躡して、次第を作して之を説く、阿闍梨既に漫荼羅を畫き竟りて、周遍觀察して、
 已に圓備せりと知らば、方に外に出でて如法に灑淨せよ。前の如く運心して普く一切
 如來を禮し、懺悔し、歸依し、自ら三業を淨めて、然して後に供養法に依りて、三昧耶
 の明等を結びて、以て其の身を護せよ。其の諸の供養物には、亦無動の眞言を以て、
 去垢辟除して清淨ならしめよ。如法に素より具して豫め之を備へよ。又當に(三)金剛甲
 等を被服して、一一に如法ならしむべし。阿闍梨言はく、(三)如來の身と作らん時は、
 如來甲を用ひ、金剛の身と作らん時は、金剛甲を用ひよ、當に轉換して之を用ふべし
 と。又蘇悉地等に准ずるに、如來の肉髻圓光の諸相を以て自ら嚴身するに尤も善し。
 或は通用す可し、或は成辨諸事の眞言を以て之を作せ、是の如く作し已りて、然して

三 諸尊と我身
 入我々入觀な
 り。

後漫荼羅の位に向ひて、其の所應に隨ひて坐せよ。瑜伽に住して、先づ羅字門を用ひ
 て遍く其の心を淨めよ、次にまた道場の地を淨めて、衆の患を悉く除きて、虚空に相
 同せよ。然る後阿字を以て大風輪を起し、風輪の上に於て、嚩字を以て香水海を起し、
 即ち阿字門を用ひて、金剛地の妙高山王を起せ。當に知るべし、此の漫荼羅は即ち其
 の上にありと。供養次第の中の方便の如く、種種の莊嚴を觀作し、虚空藏を以て之を
 持せよ。次に一一の漫荼羅の諸尊の位の上に於て、各本種子の字を觀せよ、此の諸字
 よりみな轉じて本尊の身と作せ。若し彼の阿闍梨、觀道未だ融せず、時節を延べんこ
 とを恐れれば、但だ中胎の蓮華臺の上に於て、阿字門を觀すべし。字門より無量の光を
 出して、遍く諸尊の座位を照す、その時に諸尊即ち現れたまふ。その時に方便を以て、
 轉じて是の如くの(三)諸尊と我が身と無二無別なり、即ち是の諸尊は即ち身中に在すと
 觀せよ。阿闍梨言はく、若し行者未だ瑜伽に住せずば、云何が能く是の如くの壇法を
 造らん、乃至初めて建立する時に已に身中にありと觀じて、然る後に圖畫すべしと。
 若し深行の阿闍梨ならば、則ち常に是の如くの大悲胎藏の聖衆と共に俱なり、亦即ち
 是れ我が心は。彼の十緣生句に同じく、畢竟不可得なりと證知す。即ち本尊を觀じ已

る。

次に更に運心して種種の寶乘を作して、不動の眞言印を以て加持して、此れを以て衆聖を奉迎し、及び道路を淨治して、次に請召シヤウケウを作せ。(三) 罽離に云はく、各本眞言を以て奉請し、或は漫荼羅主の眞言を以て諸尊を都請し、或は本教の所説に依りて、當に意に隨ひて廣略すべし、兼ねて召請の眞言・印を用ひよと。又此の經宗は即ち本座に於て請を受け、還つて不來の相を以て、此の道場に來至したまふ。龜の方便の中に此彼の相あると同じからず。大衆集まり已りなば、當に無動の明を用て、障者を遣除すべし、即ち三種の三昧耶を示して加持を作す。次に當に闍伽水及び敷座を奉りて、是の言を作すべし、善く來たまへり世尊、善く來たまへり世尊、本願力を以て來りて降赴したまふ、願はくば加持を垂れて、斯の所請と及び微供ミウクとを受けたまへ、大慈悲の故に唯だ納受を垂れたまへと。時に阿闍梨、金剛の事を作さんと欲するが故に、更に無動の慧刀エダウを以て、自ら身障を除き、轉じて金剛薩埵と作りて、魔業を降伏す。なほ慧刀を以て諸の方界を結して、また更に如來の外界の眞言印を以て重ねて周界を結し、四大護を以て各一方を護れ。又無堪忍大護ムカンジンダイゴを持して、皆普く之を護るべし。阿闍

一、三、大亂脫

(二) 闍伽水を奉
り前にも獻じ
るに重ねて
は、前に奉請
たる故に奉請
洗ひ、今塗香
塗る爲に全身
の如き別ある
す、重りて奉
誠の至れるを
表す。

二 亂脫

梨言はく、凡そ漫荼羅を造らんには、初めよりこのかた即ち不動尊を用ひよ、或は降三世尊を以て是の地を護持せよと。中間に持誦せん時毎に、即ち法の如く結界クワカキし、了りてまた之を解け、作法の夜に至りて、更に金剛線の内を劑カサりて、具足し結界せよ。
三 其の灌頂と護摩との壇の處には、當に漫荼羅の外に於て、更に線を以て周域をなして、内界と相通せしむべし、並に出入する所の門を置く。漫荼羅の外界に、普く金剛線を以て圍斷せば、護摩供養の時に至りて、亦當に運心して、通門の所に於て金剛線を擧げ、通じて諸尊を來往せしむべし。ニ 又結界の時は、但だ當に本座の處に於て、常の如く作法すべし、若し行遠一匝して周界を結せんと欲せば、亦皆成就す、若し結界し了りて忽爾に妄念するが故に、界破れて、或は種種の魔事起らば、即ち當に無堪忍大護を念持すべし。若し一切の時に障なからしめんと欲せば、其の周界及び供物等に、皆先づ大護を用て之を護れ、後の時に障起らば又當に更に用ふべし。
次に當に禮を作して(一) 闍伽水を奉り、大慧刀を以て、遍く諸の供養の具に灑ぎて、淨むるに不思議法界の心を以てすべし。若し塗香を獻せん時は、即ち當に塗香の眞言に住して之を持すべし。次第に供養せん時には、又一一に加ふるに彼の尊の眞言を以

已りて、次に第二院の諸尊に及ぼし、乃至終竟せよ。或は一一に現前に之を觀じて、持誦を作し、或は自身を彼の本尊と作して、其の心月に於て眞言の字を現じて、持誦を作し、乃至頓に漫荼羅の身と作して、持誦を作し、行者の觀心の勢力に隨ふべし。若し爾ること能はずば、當に一心を以て部主の眞言百遍を誦じ、所餘の上首の諸尊には、各七遍を誦じ、并に彼の印を作すべし。具さには供養次第の中に説くが如し。

阿闍梨是の如く作法し畢りなば、また誠心を以て諸尊を頂禮して、然る後に諸の弟子を召して、一一に入らしめ、前の香水を以て灑淨し、彼れに塗香を授けて用て手に塗らしめよ。次に淨花を授けて、略して爲に住心品の中の菩提心の實義を宣説して、自ら歸依の處を知りて、眞正の發心を作し、誠を至して慇重に一切の諸佛を憶念せしめよ。然る所以は、行者能く佛心を發すを以て、即ち是れ佛子なり、當に法王子の灌頂の位を受けて、如來種姓の中に生ずべし、故に動止云爲に諸佛を忘れず。今此の經の中に、將に一切の眞言を説かんとする毎に、(二)普く諸佛に歸命すと云ふは、即ち是れ此の意なり。淨佛と言ふは、聲聞法の中には阿羅漢をも亦名けて佛とす、諸餘の大乗の未了義の經にも、亦成佛の義あり、然れども名けて遍淨とすることを得ず、

(二) 普く一切等
眞言の初のナウマ
クサマンダホダナ
アンバ普く諸佛に
歸命すまの意なり

今は正しく本心の常佛を明す、故に淨の字を以て之を甄えらぶなり。梵本を正しく翻せば、佛家をば當に佛部と云ふべし、是れ種族部類の義なり。時に阿闍梨、弟子の身を觀じて、五輪を作して、五字を以て之を持し、兼ねて心華臺の中に於て、阿字等を置きて、即ち大日の體に同せしめよ。入佛三昧耶の印を以て其の頂上を印し、次に法界生の印を以て心を印し、又轉法輪の印を作して臍輪の上を印して、各三たび彼の眞言を誦せよ。次に即ち彼の心中の阿字門を轉じて、轉字門となして、金剛薩埵の印を結びて、諸の支分を印せよ、謂はゆる五處なり。此の如くする所以は、彼の金剛の事業を成さんと欲するが爲なり。時に阿闍梨、亦當に更に三昧耶等を以て、而して自ら護持すべし。

次に新淨の白氈そうはく或は餘の絹帛きんぱくを取りて、先づ不動の眞言を以て如法に作淨して、また本部の眞言王を用て、三轉して之を加せよ。もし大日の漫荼羅を作らば、即ち毗盧遮那の眞言を用ひよ、蓮華手・金剛手も亦當に准じて説くべし。此の綵淨の帛を用て、周く弟子の面門を覆ひて、當に深く慈悲護念の心を起して、耳語に彼の三昧耶戒を告ぐべし、諸餘の未入壇の者に聲を聞かしむること勿れ。此の一偈は常に轉字輪漫荼羅

行品の中に於て之を説くべし。又彼れが頂上に一の囉字ありと觀せよ、字の上に點を安く、故に嚴るに大空點を以てすと云ふ。此は是れ囉字なり此の字の四邊に逼く光燄あり、花鬘の連環して斷へざるが如し。字の中に又逼く白光を流出すること、淨滿月の暉の如し、此の淨法界の心に加持せらるるを以ての故に、能く内外の諸障を除く。

次に引きて第一重の門の遜那・優波遜那の二龍王の守衛の處に至りて、正しく門廂に當りて、前み却くことを得ざらしめよ。師當に彼れがために、三昧耶の印を結作して、三遍彼の眞言を誦すべし。花を印の上に置きて、弟子をして、至誠の心を以て、道場に向ひて之を散らしめよ。花の至る所の處に隨ひて、當に即ち是れ行人の往昔の因縁の法門の善知識なることを知るべし、即ち此の方便門に依りて、進趣し修行するなり。三瞿醯に云はく、將に壇に入らんとする時、阿闍梨、是の言を作すべし、我某甲、法の如く此の漫荼羅を作りて、弟子を將て入らしむ、其の福德と種性と及び成就所堪の法器とに隨ひて、ただ願はくは此の漫荼羅の中に於て、其の相を示現したまへと、既に花を散らし已りなば、次に面を開きて道場を瞻視せしむべし。歡喜の心を以て之に告げて曰はく、汝今此の妙漫荼羅を觀て、深く敬信を生ずべし、汝已に諸佛の

家に生ず、諸の明尊等、同じく共に加護したまふ、一切の吉祥と及び悉地と、皆悉く現前すべし、是の故に堅く三昧耶戒を持ちて、眞言法教に於て勤めて修習すべしと。次に弟子をして、香花等を以て、普く漫荼羅の聖衆を供養せしめよ。即ち道場に於て本眞言印を授與して、一處に坐して之を誦せしめよ、次に餘人を引きて入るべし。

ニ凡そ阿闍梨、當に花の至る所の處を觀て、其の性類を辨すべし。若し佛の上に墮ちば、佛頂及び毫相等を成就す、面上に墮ちば、佛眼を成就すべし、身の中分にあらば、當に知るべし、諸心を成就すべしと、若し下分に墮ちば、諸の使者等を成就すべし。又佛身の上中下分に隨ひて、上中下の成就知るべし、蓮華金剛も亦然り、自餘の諸尊は但だ上中下の相を知れ。若し花墮ちて、彼の尊を去ること遠くば、久遠にして方に乃ち成就すべし。若し供養院に墮ちば、所屬の尊に隨ひて彼の眞言を授けよ。若し兩尊の間に墮ちば、當に其の遠近を觀るべし。若し先づ内院に墮ち、即ち移りて外院に出でば、彼の人は信心具せず、若し強て持誦せば下成就を得べし。諸の界道及び行道院に墮ちば、彼の人は決定の心なし、成就することを得じ、若し彼れ更に擲げんと欲せば、爲に護摩を作して、然る後に之を擲げしむべし。餘は彼れに説けるが如し。

次に當に諸の弟子の爲に、寂然の護摩を作すべし、是れ扇底迦センヂキヤの法なり、亦翻じて息災とす可し。次に此れは是れ一種の支分なり、今は如來の答の中に、行事の次に約するが故に、加持教授の支分を説くこと未だ竟らざるに、即ち此の中間に於て護摩を説く。或は灌頂等の法と合して、一種の支分と爲す可し。經に云はく、「寂然の護摩を作せ、護摩せんには法に依りて住せよ」とは、上に護摩と言ふは、此の護摩の法を作すべきを謂ふ。次に護摩と云ふは、是れ作法の人を誡む、若し護摩せん時には、當に法に依りて住すべし、故に重ねて之を言ふ。此の中には瑜伽の法を以て自身を加持し、乃至奉請結界等、みな念誦の時の方便に依る、故に「當依法住」と云ふ。「初め中胎藏より第二の外に至りて、漫茶羅の中に於て無疑慮の心を作せ」とは、上の文には密語して、釋迦の眷屬の院を以て第二とす、大壇の外に中胎藏と當相せしめよ、阿闍梨又其の外に在りて面を漫茶羅に向へよ、此の二位の中に於て火壇を置き、梵文に故らに密語を爲して、阿闍梨漫茶羅の中に護摩壇を作せと云ふ。若し師に従ひて受けざる者は、多く其の旨を失ひて、或は漫茶羅の院の中に於て之を造作す。今は灌頂壇を以て、又須らく正しく中胎に對すべし、此の壇を移して、稍南に近づかしむ可し、乃至西南

■ 大亂脫

(二)二位の中、大壇と阿闍梨の座との二位の中間なり。

(一)三位、大壇と護摩壇と阿闍梨の座位となり。
(二)奢字門、扇底迦の首字にして本性寂の義なり。

(三)方圓三角、息災は方圓三角は圓降伏は三角は圓なり。今は息災護摩なる故に方壇を用ふるなり。
(四)羅摩夷等、羅摩夷は牛尿なり、恒羅は牛尿なり、山中の淨地に放りて牛の尿を取らるる之を壇に塗るなり。

(五)韋陀の火祀、外道の書吠陀によりて行ふ婆羅門の護摩を云ふ。

の角より以來は、皆是れ(一)三位相望むるに、理に於て失なし。「不疑慮心」とは即ち是れ息災の意なり、一縁不亂にして之を作すべし、若し行者、(二)奢字門に住して、諸法は常に寂然なりと觀すれば、疑悔永へに盡きて、蓋障淨除す、即ち是れ寂然護摩の本意なり。

「漫茶羅を作す法は、自身の肘量を取りて、從廣一肘にせよ、其の深さは之を半にせよ、周匝して縁をおけ、廣さは四指の節、高さも亦是の如し。凡そ護摩壇は(三)方と圓と三角と、事業に隨ひて轉ず。但し此中の作法は當に方壇を用ふべきのみ。(四)摩夷夷・瞿模怛囉・を塗りて、灑ぐに香水を以てせよ。」中に金剛印を表す」とは、謂はく、鍍の内に於て當に拔折羅ハツセツラを畫作すべし、然る所以は、護摩は是れ如來の慧火なり、能く業の因縁所生の一切の災橫アイワウを焼き、廓然として蕩盡して、また遺餘なし。方壇をば大因陀羅ダイインダラと名く、是れ心王の義なり。此の慧火の印を以て、彼の源底を窮むるに、金剛の性より生ずることを明す、是の故に金剛の不可破壞に同し。下の世出世護摩品の中に至りて、世尊自ら廣く因縁を説きたまふ。若し眞言行者、但だ世諦の護摩のみを作して、此の中の密意を解せざれば、則ち(五)韋陀の火祀と豈に相濫せざらんや。故に譯

者、智の名を兼ね、庶はくは淺深二釋をして、義用兼ね擧げしめん。

經に「師位の右方に護摩支分を具す」と云ふは、假令大漫茶羅の門、西に向ひて開かば、火壇は當に大壇の西に在るべし、阿闍梨又火壇の西に在りて坐せよ。諸の護摩所用の具緣支分は、當に師位の南におくべし。護摩の薪には當に乳木を用ふべし、謂はく、桑穀ソウコクの類なり。或は牛膝莖ウキコウキを用て之れを截りて、十二指量に劑カサれ、みな濕潤にして新たに採れる者を須ゆべし。其の條理ありて端直なるを取りて、當に上下を觀て一向に之を置くべし。香水を以て灑淨して、根本を身に向はしめよ。若し燃かんと欲する時は、沉に乳と酪と酥と蜜との中に於て、其の兩頭を搯サツして、鏝コの内うちに擲なげ置くべし。或は沉水香を以てせよ。量の長四節チヨウにして、龜カメは拇指の如くせよ。蘇合香に搯して一百八遍を作して之を用ふるに尤も善し。其れ漫茶羅の中に獻する所の諸食及び香花等をば、各各に之を取りて、辨事の眞言を用ひて如法に灑淨して、座の右に置くべし。其の闕伽の當に左邊に置くべし。獻する所の諸の食は、當に酥酪等を用て調和して、共に一器に置くべし、及び諸の五穀も亦酥油等を以て之を潤し、一處に和合して別器に置きて、皆素ホトケめ辨せしめよ。若し深秘の釋を作さば、此の護摩の

(二)經 涅槃經第
四如來品

支分は是れ衆因緣の義なり、此の因緣に由りて、能く三有の災患を生ず、今還つて此れを以て慧火の資として、一切普門の身を供養し、不思議の勢力を増益す。(三)經に煩惱を薪とし、智慧を火として、是の因緣を以て涅槃の飯を成し、諸の弟子をして悉く皆甘嗜せしむと云ふは、即ち是の義なり。

又弟子の爲めに作法せん時は、阿闍梨の北の邊に於て、籍シくに生茅を以てし、蹲踞して坐せしめよ、阿闍梨も亦當に茅座に坐して、加ふるに床褥を以てすることを得ざるべし。然して生茅を受用するに、略して三義あり。一には其の性潔淨にして、處の

(三)樂觸 觸覺に
苦樂あり、樂
なる時は念慢を
生じ易き故に茅座は
之を防ぐ。

(三)樂觸を離れ、以て行者の昏怠恣慢コンタイシマンの心を蠲除ケツジヨす可し。二には此は是れ吉祥草なり、世尊は以て敷座として菩提を證したまふ、是の故に能く一切の諸障を除く。三には此の吉祥茅を以て慧性を表するなり、此の草の兩邊に多く利刺あり、若し坐臥し、執持するに、方便なき者は、反つて爲に傷らる。若し手を順へて之を將護すれば、則ち害をなすこと能はず。一切諸法も亦是の如し、若し諦理に順ひて之を觀るときは、一切の塵勞みな性淨の用あり。若し方便を失ふときは、則ち能く智身を損壞す、故に以て法門の表像とす。

若し大石の上に於て漫茶羅を作り、或は重閣の上にして、穿ち掘りて罍を作る可からずば、當に彩色を用て之を書くべし。極めて分明に嚴麗ならしめて、便ち充て用ふ可し、是れを略作護摩處と名く。若し室の中に漫茶羅を造らんに隘^{うづま}進^{すす}ならば、當に外に出でて、道場を望み見る處に於て、法の如く罍を作るべし。罍の四面には皆當に周匝して、布くに生茅を以てして、皆右に旋らしむべし、次第にみな相壓さしめて其の頭を出すべし。餘は護摩品の中に説く所の如し。又當に周匝し、廣く厚くして、地を露さしむること勿るべし、遍く香水を以て之を灑ぎ、當に成辨諸事を用て加持すべし、上の文に説く所の灑地の眞言を以てす。

(一) 阿闍梨等上念誦所は壇の念誦竟りて後直ちに投花の法を作す如し、然れども實には今の文の如く壇の供養念誦竟りなば外に出でて護摩の法をなすなり。
(二) 三角漫茶羅は火壇の形なる故に火壇を指すなり、三角爐と云ふ意には非ず。

此の中の護摩の行法は、(一) 凡そ阿闍梨、初めに漫茶羅の中に於て、供養し持誦し竟りなば、次に當に外に出でて火法を作すべし。東に向ひて吉祥座に在りて、先づ乳木の乾薪を取りて罍の中に置き、酥を用て上に灑ぎて之を燃け。後に濕薪を置きて、辨事の眞言を用て、去垢辟除し、併に灑淨し已りて、當に瑜伽に住して、火天の種子を以て、轉じて火尊と作して、(二) 三角漫茶羅の中に在くべし。下の品の中に示す所の十二の火尊の如く、隨ひて其の一の事業と相應せん者を取れ。既に相應し已りなば、當

(一) 蘇悉地經 護摩品。

に火尊の身と己身と無二無別なりと觀すべし。火尊の如く當に知るべし、火漫茶羅も亦然り、當に三處みな同一相なりと觀すべし、然る後に火天の眞言を以て之を奉請せよ。
(二) 蘇悉地に云はく、奉請せんと欲する時は、先づ此の言を作すべし、我れいま火天の首・天中の仙・梵行の宗敬する所の者を奉請す、唯だ願はくは此の處に降臨して、護摩を受納したまへと、次に火天の眞言を説きて曰はく、

南^ナ麼^マ三^サ曼^{マン}多^ダ勃^ボ陀^ダ喃^{ナン}阿^ア揭^ケ娜^ナ曳^{エイ}莎^{シャ}訶^カ。

(三) 阿揭娜曳 Agnye は阿耨尼(火天)の爲にと云ふ義なり。
(四) 也に三昧聲也 Ya に Y の點を加ふる故に曳 Ye となる。

初めの句は諸佛を歸命する義なり、前に説けるが如し。第二の句の(三) 阿揭娜曳は是れ火の義なり、此の中に最初の阿字を以て種子とす、一切の諸法は本不生なるを以ての故に、即ち金剛の智體に同じ。俄は是れ行の義なり、諸法本不生なるを以ての故に、萬行を具足すと雖も、而も所行なし、是の故に名けて無師自覺とす。若し是れ無師自覺ならば、即ち是れ大空に同じく、一切處に遍す、故に娜字と同體なり。諸法は無師無行なるを以ての故に、自ら一切處に遍す、故に三界に於て動出せずして薩^サ般^{ハン}若^{ニヤ}に至る、是の故に乗及び乗者なし、爾れば乃ち大乘とす。(四) 也に三昧の聲を加ふる所以は、此乗の定慧均等なることを明す意なり。諸佛、菩薩の道を行ひたまひし時、皆是の如く

(二) 上文に説く所
に説ける引入
投華等の法なり。
(三) 告げ語るこ
とに説ける引
華終りて弟子に
誠羅を見しめて
誡するを指す。

る後に諸尊を頂禮して、諸の弟子を召して、(二)上の文に説く所の如く、散花等の法を
作さしめよ。乃至(三)告げ語ること都て已りなば、方に一一の弟子を引きて、護摩の處
に於て、阿闍梨の左邊に於て、恭敬の心を以て、蹲踞して住せしむ。師、左の手を以
て、弟子の右の手の大指を執りて、寂災の眞言を誦せよ。一たび誦せん毎に一たび火
食を施せ。此の如くして二十一遍に至れ、諸の弟子に是の如く之を作せ。瞿醯に云は
く、また香を以て手に塗りて、其の胸の上を按でて、意に隨ひて持誦して、發遣して
去らしめよと。今次に此の寂災の眞言を釋すべし。

南麼三曼多勃陀喃、阿、摩訶扇底樂多、扇底羯囉、鉢囉唵摩、達磨囉若多、阿婆嚩、
薩嚩婆嚩、達摩三曼多、鉢囉鉢多、莎訶。

此の眞言は初めの阿ア去聲、急クを以て體とす。阿は是れ諸法本不生の義、即ち是れ金剛
智火の體なり、三昧の點を加ふるは、是れ本不生の行、金剛慧火の三昧なり、傍に二
點あるは是れ涅槃の義なり。言はく此の阿字門に入れば、慧行具足するが故に、能く
一切の障蓋を焚除して、大寂涅槃を得。寂災の眞言とする所以は、正しく此の義にあ
り。復次に作法の時には當に此の字を觀すべし、(三)周匝せる光鬘、火より出でて具さ

(二) 下の文十二
火の義は護摩品に
之を明せり。

に三色を備へたり。本体は黄白色なり、其の三昧の畫は赤色に作せ、(二)閻浮金の如し、
傍の二點は黑色なり、劫災の火の如し。本性白淨なるを以ての故に、息災の用あり、
黄色を兼ねたるは是れ増益の用なり、赤色は是れ降伏焚燒の用なり、黑色は摧伏大障
並に攝召の用なり。又此の字体は是れ方便門なり、當に知るべし、即ち大空の色に同
じく種種の事業を具するなりと。復次に(二)下の文の十二火の中に於ては、阿字は智慧
の火なり、三昧の畫は是れ行滿の火なり、攝召の義を具するは是れ風燥の火なり、降
伏の義を具するは是れ盧醯多ロケイダの火なり、黄赤和合するは是れ沒栗拏モクリナの火なり、赤黑色
を兼ねるは是れ忿怒の火なり、衆色を兼備するは是れ閻吒羅ジャンカラの火なり。要を以て之を
言はば、悉く十二種の用を備へたり、當に廣く之を演ぶべきのみ。次下の諸句は皆轉
じて相釋す。初めの句に摩訶扇底マカセンヂとは是れ大寂の義なり、藥多ヤクダは是れ逝の義なり、言
はく、如來は此の一字の義を以ての故に、本性常寂の大涅槃の中に去至したまふ。阿
字の體は是れ本寂なり、三昧の畫を具するを以ての故に善逝なり。淨除の點を具する
が故に涅槃なり。是の處を動かさずして即ち行き、即ち到りて大空に同じく、遍せざる
所なし、故に大寂と云ふ。次の句に扇底羯囉センヂケラとは是れ作寂の義なり、言はく、此の字門

は方便満足するが故に、常に十方三世に遍して、遍く普門の事業を作し、衆生を成就して、みな大寂の中に去至せしむ、故に作寂と云ふ。次に鉢囉摩達摩達摩若多とは、鉢囉は是れ最勝の義、摩達摩は是れ此の寂を證するなり、重ねて前の句を釋す。作寂を以ての故に、即ち是れ寂が中の寂なり、所以は何にとなれば、寂も畢竟不可得なるを以ての故に、常に作なり、作も畢竟不可得なるが故に常寂なり、一切世間は思議すること能はず、故に最勝と云ふ。達磨は是れ法なり。涅槃多は是れ生なり、何によりてか生ずる、謂はく、即ち此の不思議寂業の中より生ずるなり。動寂畢竟等しきを以ての故に、本不生の句の中より、具さに根・莖・枝・葉・花・菓を生じて、菩提樹王を成す。火界の能く焼き、能く養ふが如く、金剛の智火も亦爾り、淨除の點を用て焼き、三昧の點を以て養ふなり。次に阿婆嚩薩嚩婆嚩とは、又是れ前の句を轉釋す、故に無自性一切自性と云ふ、本性寂にして緣によりて起るを以ての故に、自性なし。緣によりて起る者は皆本性寂なり、是の故に一切の法の自性とす、此の義を以ての故に、妄想不生にして大空の生なり。次に達磨三曼多鉢囉鉢多と云ふは、又前の句を轉釋す、此の義を以ての故に、如來は一切の法に於て平等なり、謂はく無上菩提を成すなり。鉢囉

鉢多是是れ獲得の義なり、無所得なるを以ての故に此の平等の句を得るなり、餘は上に釋するが如し。

凡そ護摩の時は當に種種の相現るることあるべし。或る時は燒火燃えず、燃ゆれども或は速かに滅して甚だ熾盛ならず、或は烟のみ起ちて焰なく、或は烟甚だ濁り、或は聲を出すこと驢畜等の音の如くして、人間かんことを樂はず、或は成就せじと言ふ等は、當に知るべし、障礙ありて成就せざる相なりと。或は烟焰の中に、寶瓶・寶網・師子・車乘等の種種の妙なる形を作し、或は聲、鐘・鈴・螺貝等の音樂の響の如し、或は吉祥成就の音を出すは、當に知るべし、是れ無礙悉地の相なりと。乃至善く護摩を作さん者は、當に是の中に於て曲さに旨授を蒙りて、了了に具さに通塞の相を知るべし。凡そ護摩は各(二)所應の事業に隨ひて、或は寂靜を以てし、或は歡喜を以てし、或は威猛の心を以てし、被る所の衣服に白・黃・赤あるべし。當に北に向ひ、東に向ひ。南に向ひて坐すべし、其の漫荼羅に亦圓・方・三角の異あり、色も亦知る可し。其の護摩の薪は、息災には樹の最上の枝を用ひよ、増益には樹の中の枝を用ひよ、若し折伏の事には樹根を以てすべし。若し息災の事には、蘇と乳と大麥と蜜と及び乳粥と茅草の芽と

(二) 所應の事業
 等三種の法の心
 品衣色向方爐形等
 心明す
 息災 增益 降伏
 衣白 歡喜 威猛
 方北 東 南
 爐圓 方 三角

羅なくして、但だ護摩の法のみを作さば、當に鐘を遠りて一重の漫荼羅を作して、諸尊の座位を置くべし、諸尊を請じて供養せんと欲せば、廣略は意に隨ふべし。(一)蘇悉地に云はく、護摩し了りなば、皆當に本持の眞言を用て、淨水を加持して、手を以て巡遊して、鐘中に散灑すること三度すべし。また火天を請じて重ねて餘供を受けしめよ、乃至本座に還らしむと想へ。殘る所の穀・蘇・蜜・酪・等をば、惣じて一處に和して、火天の眞言を用て三轉して、之を持して護摩を作せ。重ねて護身護方等の印を作し、乃至解界して方に發遣す可しと。又(二)瞿曇に云はく、第六の夜に弟子の法を作し竟りなば、除障の爲の故に、先づ降伏の護摩を作し、次に自の増益の爲の故に、部心の眞言を以て護摩せよ。然る後に寂靜の眞言を以て息災の護摩を作せ、(三)作法の事に臨む時に至りて、若し數次不善の相あらば、當に部母の眞言を以て。息災の護摩を作して、蘇及び薪を焚くこと各百遍すべし。(四)作法の明日に於て、闕乏する所を満たさんが爲の故に、更に息災の護摩を作すこと百八遍せよと。然れども此の火法は亦是れ支分の中の難事なり、將に災障を除き、正法の威勢を増益せんとするを以て、是の故に諸の難を爲す者、皆此の中に於て其の便を伺ひ求む、若し一一に明了ならずば、當に自ら

(一) 瞿曇經 召請品

(二) 作法の事等 瞿曇經 阿曼荼羅品

(三) 作法の明日 等 瞿曇經 護摩品

損傷すべし、情に攀^{した}ひて妄りに作す可からず。

經に「行者護摩し竟りなば、應に教へて懈^しせしむべし」と云ふより以下は、是れ秘密主の間の中の、云何が師を供養せんとの句に答ふるなり、猶ほ加持教授の支分に屬す。自ら弟子を教へて、其れをして懈^しせしむる所以は、是の物を含着して之を求めんが爲に非ず、彼れが善根を發生して、灌頂の功德を成就せんが爲の故なり。若し弟子能く内外のあらゆる種種の資財を以て、大事の因縁を求めんが爲に、慳惜する所なくして、誠を至して慳重に傳法の人に報ひ奉れば、則ち能く無量の宿障を摧壞す。又自ら壇那の利益を見て、深く慶幸の心を生ず、我れ今此の世間に愛する所にして、(一)五家と共なる所の諸の過患多き財を捨てて、用て無上法寶の正法の財に買^かて、遍く衆生に施して、常に窮盡なげんと、是の思惟を以てし已りて、其の心歡喜す。歡喜するが故に則ち疑悔を離る、疑悔を離るるが故に、便ち内寂の安樂を得て住す、然る後に法水を以て之を灌げば、即ち能く永く塵垢を離るるなり。若し物なくば、乃至身を捨てて師に供養せよ、謂はく、此の身を以て阿闍梨に奉事し供給して、疲苦を憚らず、常に捨離せずして正法を請求し、乃至軀命をも惜まざれ、求道の爲の故に。その時に

(一) 五家等 暴君・盜賊・水・火・放蕩子な五家云ふ、貨財は此の五家を伴ひて之に失はれ易きものなれば過患多し。

阿闍梨、其の愍重を感じて、悲念の心を生じ、誨ふるに深秘の方便を以てす、乃至自ら受持する所の眞言の功行、満つるになんなんとするを以て、道場の中に於て、作法し廻用して之を施し、少しく功力を用ゐて大成就を得しむ。此れは是れ諸施の中の上なり。(一)瞿醯に云はく、弟子當に護摩の處に於て、至誠の心を以て阿闍梨を頂禮すべし。先づ當に衣裁二匣を奉獻すべし、然して後に餘財を捨施せよと。又彼の文は是れ灌頂し了りて、廣く漫荼羅の相を示し、眞言印を教へて、方に乃ち奉施せしむ。此の經と不同なり、任意に所用に隨はんのみ。

經に云はく、「已に馬に加護を作せば應に召して告げて言ふべし」とは、謂はく、初めの召入より以來は皆是れ加持の方便なり、今其の心を發起せんが爲の故に、又また教授して之に告げて、「今此の勝福田は、一切の佛の説きたまへる所なり、廣く一切の諸の有情を饒益せんと欲するが爲なり」と言ふは、謂はく、世尊、衆生等は無始より以來、恒常に内外の資財に匱乏にして、有らゆる所爲自在なることを得ず、是の因縁を以て、無暇の處に墮ちて、疾く無上菩提に至ること能はずと見たまふ。是の故に同じく加持神力を以て、此の無上の福田を説きたまふ。此の大悲藏の中一切普門の大海

(一)第一義僧大
悲曼荼羅の諸尊聖
衆なり。
(二)世諦の和合
僧現に世に住せ
る僧なり。
(三)生公云等
什三藏の門人道羅
法師の著せる善不
受報論の文なり。
(四)薄伽梵
子にて精進無病第
一の人。
(五)阿那律 佛十
大弟子の中に於て天
眼第一なり。嘗て天
佛前にて居睡して
阿闍梨に覺せられた
より其後終生眠ら
ず。其の爲に肉眼は
了たれども天眼は
得たりと云ふ。
(六)大迦葉等
十大弟子中の四佛
に於て大迦葉は論議
第一、舍利弗は智
慧第一、目乾連は
神通第一、須菩提
は解空第一と稱せ
る。

には、畢く集まらざること無し、今此の中に於て廣く無限の善根を種うるを以ての故に、即ち今生より以後、未來際を盡すまで、常に如意珠身・虚空藏身を作りて、能く自他の一切の希願を満たす、故に廣く一切衆生を饒益すと云ふ。復次に已に(一)第一義僧と及び傳法の人とに施し竟りなば、復教へて(二)世諦の和合僧を供養せしめよ、若し和合僧に施す時は、十方一切の凡聖の衆僧に皆悉く分あり、是の故に此の福は虚空雲海の如くして、思議す可からず。「當に大果を獲べし」とは、是れ究竟の利なり。若し此の中に於て福を樹うれば、金剛を食するに畢竟して消せずして、要す金剛地際に至りて、然る後に止住するが如し。故に(三)生公云はく、一毫の善もみな佛果に趣くと。次に世間の希願を明すが故に、また世間の義利を説く、謂はゆる「無盡の大資財は、世説す常に隨ひて生ず」とは、此れは是れ世界悉檀なるが故に、世説と云ふ。(四)薄伽梵の如きは一の訶梨勒を以て僧に施ししが故に、九十一劫より以來、常に疾患なく、終に横死せず。(五)阿那律は一食を以て辟支佛に施ししが故に、亦無量劫よりこのかた、常に寶藏と俱に生ず。本生經の中に廣く説けるが如し、故に常隨生と云ふ。復次に有部の毗尼の中に説かく、(六)大迦葉・舍利弗・目乾連・須菩提の四大弟子は、猶ほ賢瓶の

如し。若し人淨心を以て供養し竟りて、世間の現報を希求するに、願の如くならざる
ことなし、何に況や一切の僧に施さん者をや。當に知るべし、十方世界の諸の是の如
く等の具徳の人、皆其の中にありと、乃至無學の聖人の壽を延べて世に住せんと欲する
も、猶ほ僧の力に籍る。是の故に汝今悉地の果を成就せんと欲するが爲の故に、當に
所修の檀施をして、具足して缺ぐる所なからしむべし。また當に歡喜の心を以て、世
諦の現前僧を供養すべし、十方の僧盡く集まる可からざるを以ての故に、但だ界内に
於て現前に集會せん者に隨ひて之を施せ、即ち是れ一切の僧に施すなり。

經に「爾の時に毗盧遮那世尊、また執金剛秘密主に告ぐ」と云ふより以下は、灌頂
の法を明す。亦加持教授の支分に屬す。然も此の灌頂は亦諸餘の法事に通ず、或は別
して一種の支分とす可し。阿闍梨第二の漫茶羅を作すこと、當に中漫茶羅と相對して、
大漫茶羅を去ること二肘にすべし。第二は是れ次小の義なり、即ち是れ相待して之を
言ふなり。凡そ火鑪は中胎に當つべし。若し處所便ならずば、漸く移して南に近づく
ことを得、乃至西南の角に對せよ。此の灌頂の壇は又火壇の北にあり、亦四方を均等
ならしめ、唯だ一門を置く、門は壇に向けて開け。其の壇の四角の外には、四執金剛

一 亂脫

二 亂脫

三 亂脫

を書け。火方は是れ東南なり、往無戲論を置き、涅哩底の方には虚空無垢を置き、風
方には無垢眼を置き、伊舍尼の方には被雜色衣なり。壇中には八葉の大蓮華王の鬚髮
具足せるを作せ、四葉の中に於て四伴侶の菩薩を置き、帝釋の方をば惣持自在菩薩と
曰ひ、餓摩の方をば念持菩薩と曰ひ、那伽の方をば利益心菩薩と曰ひ、夜叉の方をば
悲者菩薩と曰ふ。其の四隅の葉には四奉教者を置き、火方をば着雜色衣と名け、涅哩
底の方をば滿願と名け、風方をば無礙と名け、伊舍尼の方をば解脫と名く。

三經に云はく、「中央は法界不可思議を示す色なり」とは、即ち是れは此れ嚧字なり、
純白に作せ、謂はゆる不思議法界の標幟なり。ニ復次に深秘の釋ならば、方壇は即ち大
因陀羅心王の金剛界なり。住無戲論とは即ち是れ本原性淨の三世無障礙智戒なり、此
の戒に由るが故に、一切の戲論みな息む。戲論みな息むが故に、無師の大慧を成すこ
とを得て、塵翳都て盡きて淨虚空の如し、故に虚空無垢と名く。虚空の中に垢障なき
時には。目を十方に極むるに觀ざる所なきが如く、般若も亦爾り、一切の相を離るる
に由るが故に、一切の種に於て見聞覺知せざるることなし、故に無垢眼と名く。明眼の
人は能く自在に諸の事業を作すが如く、今無礙の悲を以て、普く一切の根縁を觀じ已

りて、即ち當に普現色身を以て之を導利すべし、故に着雜色衣と名く。若し已に此の四種の金剛慧の印、一心の中に於て具足して缺くることなければ、即ち能く此の心地を鎮めて、灌頂の慧身を持するに堪えたり、猶ほ菩提樹下の金剛地際より以來、皆悉く堅實なるを以て是の故に如來成道の時、傾かず陥らざるが如し。四伴侶とは謂はく、心所有法は是れ心王の伴侶なり、言はく、此の淨法界の心王、四法を成就して能く四種の如來の事を行へば、則ち灌頂して法王の位を受くるに堪えたり。初めに陀羅尼自在王と云ふは、即ち是れ阿字門に通達するなり、此の眞言王を見る時は、即ち能く一切の陀羅尼門に於て、皆自在なることを得、故に以て名とす。又惣持自在なるを以ての故に、如來の念覺如意三昧王を成し、能く萬佛國を持す。彼の龍宮の秘寶の能く大海を持して、泛溢せしめず、亦能く之を持して耗竭なからしむるが如し、故に念持と曰ふ。已に是の如くの念寶を得れば、便ち本願を憶ひ、普く法財を雨らして、法界に充滿し、遍く衆生に施すを利益心と名く。已に無盡の資財を出して、無限の大施を作せども、而も諸の下劣の衆生は、受用するに心なくして、肯て之を求めず。此れが爲に大悲心を興し、種種の方便を以て、諸の窮子を調ふるが故に、悲者菩薩と曰ふ等なり。

(二) 普賢等 除蓋障は觀音と同體、除諸惡趣は文殊と同體なりと見て、今この四菩薩を普賢文殊觀音彌勒の四菩薩とする説あれども穩當ならず。

り。奉教者と言ふは、即ち是れ此の四門より折伏し攝受して、如來の事を行ふなり。當に知るべし、着雜色衣とは即ち是れ陀羅尼自在王の爲す所の事業なり、滿願とは是れ念持如意寶王の爲す所の事業なり、無所罣礙とは、是れ慈悲法施の爲す所の事業なり、解脱とは是れ大悲方便拔苦衆生の爲す所の事業なり、故に四奉教者と名く。

復次に四寶所成の瓶とは、即ち是れ毗盧遮那の四徳の寶なり。中胎の四角に置け、上に説く所の如く、不動明王を以て加持を作し已りて、復次に四菩薩の眞言を以て各一瓶を持せよ。(一) 普賢は是れ無盡願行の寶、慈氏は是れ無盡饒益衆生の寶、除蓋障は是れ無盡の淨知見の寶、除諸惡趣は是れ無盡の大悲方便の寶なり。復次に普賢は是れ遍法界の淨菩提心なり、慈氏は是れ此の淨心、胎藏の中に於て、根牙莖葉を發生するなり、除蓋障は是れ此の淨覺樹王の妙嚴の花果、顯現し開敷するなり、除一切惡趣は是れ此の果實を收めて後に、一切衆生の田中に種うるなり。是の如く旋轉相生して窮盡あることなし、是の故に此の四寶の瓶を以て種種の寶藥諸穀を盛り満たして、漬す所の性淨の香水を用て、蓮華臺の中の不思議法界心に灌ぐなり、是の故に法王の子と名くることを得。當に知るべし、一種の寶瓶違つて一菩薩・一金剛・一使者と機感相應

(二) 白傘 傘蓋行
道の時の物には非
ず、受香供養の間
阿闍梨之捧ぐる
なり、但し現時の
灌頂に此の事な
し。

すと、方位の法門を以て之に對して則ち之を知る可し。凡そ灌頂せんと欲する時は、辨事の眞言を以て座物を加持して、蓮華臺の上に安置せよ。阿闍梨はまた弟子の爲に法の如く護身せよ、先づ不動明王を以て諸障を除け、次に三種の三昧耶を用て三處を加持し、金剛薩埵を以て支分を加持し已りて、吉祥坐の法に依りて其の中に坐せしめよ。あらゆる塗香・花・燈・闍伽水等は、先に已に法の如く加持せり、一ら上の法の如くせよ。阿闍梨先づ當に彼れに香水を奉り、次に塗香を用て遍く其の身に塗り、花鬘を以て其の身に冠飾して、以て瓔珞とす、次に焚香を奉りて之を薫せよ、諸の燈明を其の前に布列し、並に諸食を獻すべし。凡そ此の供養物に惣じて十三に座あり、謂はく、四金剛と四菩薩と四使者と及び弟子となり。其の弟子の供物をば最も豊厚ならしめて、猶ほ本尊を供養するが如くせよ。亦大漫茶羅の中に於て、位を置きて供養す可し、灌頂の時に至りては、但だ常に彼の名號を持して、請じて弟子を加持すべし。其の四菩薩は第一の院に於て、各一方に於て之を置き、使者は如來の下にて門の左右を挾め。又新淨の(三)白傘を備へ、上に花鬘及び白絹を懸けて、亦先づ不動を用て去垢除障し、大日如來の眞言を以て之を持せよ。阿闍梨自ら執りて用て其の上に覆へ。また

(二) 犛牛 牛の一
種にして其尾を以
て拂子を作る。

餘人をして淨(二)犛牛の拂及び扇・香爐を執らしめ、みな辨事の眞言を以て加持せよ。又箱の中に於て衣并にの吉祥の物を置き、即ち是れ金篋・明鏡・輪寶・商估の類なり。并に四寶の瓶を持ちて以て供養し、并に攝意の音楽を奏せよ、此の曲は具さに瑜伽の大本の中にあり。若し塗香を獻する時には、即ち塗香を獻する曲あり、花・燈・飲食・等も皆亦是の如し、一一の歌詠は皆是れ眞言なり、一一の舞戲は密印に非ざることなし、乃至人の解する者なくば、阿闍梨當に自ら之を奏すべし、若し爾ること能はずば、兼綜衆藝とは名けず。攝意と言ふは、世人、美妙の色聲を見て、心之がために酔ひ、情に注ぐ所ありて、また異縁せざるが如く、今此の金剛の伎樂の、能く人の心を感じしむるも亦また是の如し。馬鳴菩薩自ら頼吒和羅の曲を奏せしかば、五百の王子之を聞きて、同時に家を捨てて道に入りしが如し、即ち其の義なり、瞿瞿の中には但だ、若し辨することを得ば音楽を作すべしと云へり。

經に「吉祥伽陀等の廣多美妙の言」と云ふは、此の頌に凡そ三種あり。一には名けて吉慶と曰ひ、二には吉祥と名け、三には極吉祥と名く、皆是れ阿利沙の伽陀なり。此れを用て其の心を慶慰すれば、なほ加事の用あり、阿闍梨當に自ら之を説くべし。

次に下の文に於て且らく吉慶の一種を出さん、此の方の所用に於て、已に粗ぼ周備するのみ。此の偈を説かん時は、當に自ら白拂ビヤクホフを持ちて其の身を拂ふべし。讚誦し畢りなば、阿闍梨また當に漫茶羅の一切の諸尊を頂禮すべし。灌頂の爲の故に誠を至して啓白せよ。即ち寶瓶を持ちて徐ろに漫茶羅を遶ること三匝し已りて、また更に法の如く加持せよ。弟子の所に至りて、先づ囉字ラを用て火として、其の身を焚燒して悉く灰と成し已りて、方に四瓶を用て次第に之を灌げ。灌ぎ已らば此の灰の中を觀じて嚙字門カウジを作せ、其の色純白なり此れより五字を出生せよ、謂はゆる阿・鑊ア・噴ク・餅ク・欠クなり、其の五字輪を持せよ。(二)次に暗字アンを説きて其の頂上に在け、轉じて中胎藏と成る。又此の字より三重の光焰を生ず、一重は遍く咽の上に遶り、照し及ぶ所の處に隨ひて、諸尊隨ひ現れて即ち第一院の漫茶羅と成る。次の一重の光は遍く心上に遶る、諸尊隨ひ現れて第二重の漫茶羅と成る。次の一重の光は遍く臍の上を遶る、諸尊隨ひ現れて第三重の漫茶羅と成る、その時に弟子都て漫茶羅の身と成る。若し更に深く釋せば、即ち是れ普門法界の身なり。次には當に引きて一處に至るべし。(三)阿闍梨親しく爲に衣を着せしめ、(四)首に白縞ビヤクコウを冠らしめ、香を以て身に塗り、飾るに花鬘を以てし、焚香・燈

(一)次に暗字等
弟子の身上に四重
曼茶羅を觀するな
り、即ち頂上は中
胎、咽は第一重、臍は
第二重、臍は
第三重と成る。
(二)阿闍梨等弟
子灌頂して衣を濕
せる故に前に箱に
入れて持來れる物
と着替へしむるな
り。
(三)首に白縞等
淨衣を着替へたる
後更に小壇に至り
て寶冠を冠らしめ
り。供養をなすな

明を法の如く供養せよ、并に膊ウデを絡まとひて金剛線を繋げ、及び臂釧ウデクサ指環ユビワザせよ。其の制作の法は悉地の供養の中に説けるが如し。又阿闍梨先づ囉字ラを誦て金鍊コンペイを加持し、臍字クを以て明鏡を加持し、法輪法螺の眞言を以て、輪及び商佉サウフを加持せよ。また弟子の前に當りて、金鍊を以て其の目を瑩拭して、爲に偈を説け、當に囉字門ラを觀じて、其の目の中の垢障を淨むべし。次に又現前に彼の明鏡を示して、爲に偈を説け、當に臍字門クを觀じて、其の心中の垢障を淨むべし。次に法輪フを持して、彼れの二足の間に置き、并に商佉サウフを其の右の手中に授けて、爲に偈を説け。各彼の眞言を用て之を持せよ。然る所以は、若し行人能く淨眼現前するを以て、自ら心鏡を觀るは、即ち是れ大菩提を成すなり。大菩提を成し已りなば、當に法輪を轉すべし。法輪を轉することは、若干の數量の衆生の爲に、限劑を作すに非ず、乃ち當に一切衆生を覺悟すべし、是の故に大法螺を吹く。凡そ秘密宗の中には、皆因縁の事相に託して以て深旨を喻ふ、故に此の如くの傳授を作すなり。阿闍梨次に傘を持ちて用て其の上に覆ひ、引きて漫茶羅を旋遶せしむること三匝すべし。先づ第一の行道院を遶り、次には第二の行道院を遶り、後には第三の行道院を遶る。是の如く行道する時、阿闍梨當に吉祥・極吉祥等の

饒益^ニ忙哩^リ也^リ。若^シ獲^ルリ^ニ。毗^ロ乳^シ瑟^シ珍^ナなり。吃^キ喫^ク瑤^リ囊^ナなり。若^シ伽^ナ娜^リなり。薄^ク伽^ナ梵^ナなり。牟^ニ尼^シ鑠^ク吃^ク也^リ。能^ク寂^ス師^ナ子^ナ。但^シ惜^ム菓^ヲ噉^ルなり。彼^ノ慶^ニ。婆^ロ嚩^ロ視^ト得^ナ。扇^セ噉^チ迦^キ嚩^キ囉^ナ。寂^ス作^タ。但^シ嚩^ロ備^ナ也^リ。汝^ノ今^日。〔十一偈〕

吉祥の衆徳を持ち 相を具して金山の光あり

三世の導師として 三垢を除滅す。

正覺の眼を開敷したまふこと 猶ほ水生の葉の如し

是れ衆生を饒益する 最初の善慶なり。

右先づ一切の吉慶の生ずることを得る所以は、みな如來の出世に由ることを明す。

(1) 落吃塗弭 Takpmi

故に梵に(1)落吃塗弭と云ふ、翻じて吉祥相とす、或は具相と云ふ、亦是れ嘉慶の義・吉祥の義・吉慶の義・嘉慰の義・威徳の義・好相貌の義なり、當に知るべし、此れを攝一切功德と名くと、故に會意して之を言ふ。次の句に開敷と曰ふ、亦是れ覺悟の義なり。水生とは是れ蓮華の異名なり。是の如くの義を具するを以ての故に、如來世に出でたまへば、饒益する所多し、故に最初の善慶と云ふ。或は吉慶と云ひ、或は嘉慶と云ふ、大體同なり。

及び彼の宣説したまふ所の 第一の無動の法を以て

(1) 契多 Khata

三界に開示したまふに 人天まさに供養すべし。

殊勝の法は能く 諸の衆生を永寂せしむ

是れ則ち世間の 第二の善慶とす

右世尊の一切の説きたまふ所は、究竟してみな第一實際に至る、故に無動法と云ふ。

(1) 扇噉羯囉 Qantikri

梵に(1)契多と云ふは是れ宣説の義なり、亦是れ開示の義なり。此の中の三界とは梵本には正しく三世と云ふ、意は過現未に通じて、三有に至及するなり、能く普く世間に第一の實際を示すを以ての故に、一切の人天みな是の法を供養すべし、大恩を報せんが爲の故に。梵に(2)扇噉羯囉と云ふは、譯して作寂と云ふ、此の作は是れ能作・能令・能得の義なり。此の法は能く衆生をして、一切の法の本性常寂を悟らしめ、内外の諸障、畢竟して不生なるが故に、永寂と云ふ、以下例して然り。如來世に出でたまへば、則ち能く此の法を宣説したまふ、故に第二の善と云ふ。

正妙の法と相應して 多聞の慶を獲得す

人天修羅等の 供すべき福田の僧なり。

吉祥と慚愧と功德とに富める 殊勝の衆なり

(一) 薩達喇摩 Su-dharma
(二) 欲吃多 Yu-hta

一三 亂脫

是れ則ち世間の 第三の善慶とす
右の梵文に(一)薩達喇摩と云ふは、譯して正法と云ひ、或は妙法と云ふ、句を満たさ
んが爲の故に、今具さに之を存す。此の中に相應とは梵には(二)欲吃多と云ふ、是れ應
合如是の義なり、即ち是れ契合冥符の義なり。瑜伽と稍別なり。次の句は多く此の法を
聞くに由りて、行、理と契ふ、是れ大慶の故に多聞慶と云ふ、正譯に據らば當に富聞
と云ふべし、今は舊譯に順へるのみ。又此の應供の梵名は阿羅訶と不同なり、此の
應供は是れ諸天人等、福を求めんが爲めの故に、應に之を供養すべき義なり。第二の
偈の初に富と云ふ、前の富聞と義同じ、亦是れ具備無乏の義なり、吉祥に富み、慚愧
に富み、功德に富めるなり。末の句に衆と云ふはただ是れ衆多の稱なり、梵名僧伽と
同じからず、僧伽は兼ねて和合の義あり。正法藏の世に出興するに由りて、則ち修行
果向の人あり、故に第三の善慶と云ふ。

兜率陀天宮の藏に いました時の慶と
及び天より降りたまひて 諸の群生を利益し
帝釋天神衆 如去者に翹從せしが如く

汝今彼の作寂の嘉慶に 同じきことを得たり。

右此の藏の字は、梵音には(一)藥喇婆と云ふ、是れ中心の藏なり、中胎藏の藏なり、
比吒迦・俱舍等と其の義各殊なり。菩薩の天宮の中に在し、及び天より降りたまふ時、
諸の世間に於て、無量無邊の吉慶の事あるが如し、華嚴等の經に廣く説けるが如し、
二修羅とは即ち是れ諸の天衆なり、諸天に簡異せんと欲するが故に(二)阿修羅とす、立世
等の論には之を非天と謂へり。又(三)怛他揭多とは譯して如來とす、又如去と云ふ、謂
はく、如實の道より去りて涅槃の中に至る、また更に生ぜず、故に以て名とす、用て
天より下る時を釋するには、義に於て便たり、故に文を互にせるのみ。若し兜率天に
補處の菩薩あれば、世間の佛種斷えず。若し人秘密藏の中に於て、灌頂の位を受くる
者は、乃至一生中に正覺を成す、故に彼の慶に同じと云ふなり。

迦毘勝宮城に います慶の時に
諸の大威徳の天 稱歎して禮を作すが如く
猶ほ不思議の 如實より善來する者の如く
汝今彼の作寂嘉慶に 同じきことを得。

(一) 藥喇婆 Gar-
bha なり、藏と譯
すれども、胎藏の
義なる故に比吒迦
Pitaka 俱舍 Kosa
を異なり。
二 亂脫
(三) 阿修羅 Asu-
ra
四 亂脫
(五) 怛他揭多
Tathagata

梵本に彼の慶の中と云ふが如きは、即ち時の義を含めり、以下例して然り。此れは是れ菩薩處胎の時、一切世間に無量の吉慶の事あり。亦華嚴經の入法界品と離世間品との中に廣く説けるが如し。乃至十方無量の大菩薩衆、同じく腹中に集まりたまふ、聽法の爲の故に、是の故に不可思議なり、前の偈の如去の義に對して、今來りて正覺を成ずるを以て之を釋す、亦義勢に於て便たり。菩薩、胎中に在すと雖も、一切の大威徳の諸天、稱揚作禮せざることなきが如く、汝も今亦虚空眼佛母の藏の中に於て、聖胎に託す、是の故に八部龍神共に宗敬する所なり、故に彼の慶に同じきことを得と云ふなり。

華園に在すときの慶に 光華遍く嚴飾し

悅樂の林微尼に 無量の天衆居り

導師初めて誕生して 後邊の身を盡すことあるが如く

汝今彼の作寂の嘉慶に 同じきことを得

梵に(一)枳婁羅瑜 Kisalya (二)補漉波 Pug-pa 梵に(一)枳婁羅瑜と云ふは、是れ林樹の上に乗ねて條葉を帯びたる花なり。次に(二)補漉波と云ふは、正しく花體に名く。花鬘と散花との類の如き、皆此の花を用ふ、故に

(一) 枳婁羅瑜
Kisalya
(二) 補漉波
Pug-pa

上の句に花園を以て之を甄別す。菩薩初めて誕生する時に、一切の世間に於て、亦無量の吉祥端應の慶あり、乃至無量の諸天衆等、供養の爲めの故に、皆林微尼園に集まる。又無量の不思議解脱の菩薩あり、亦陰雲の月を籠るが如く、同時に下生す。汝今秘密藏の中に於て、初めて誕生することを得、一切の法門眷屬、皆已に萌動す。若し能く勇進に修行する者は亦是れ生死の後邊の身なり、故に彼の慶に同じきことを得と云ふなり。

在家の種種の苦を 滅除する時の慶

中夜に心歡喜して 苦行の處に往詣するが如く

亦諸の天衆の 敬禮圍遶する者の如く

汝今彼の作寂の嘉慶に 同じきことを得

此れは是れ菩薩の初めて出家する時なり。梵にはただ滅除種種苦と云ふ、即ち在家の義を含めり、謂はゆる在家の種種の恩愛繫縛の苦を捨離するなり。(二)苦行處とは梵に云へるを正翻せば當に循身處と云ふべし。菩薩初めて城を逾えて循身處に往趣せし時、一切世間に無量無邊の吉慶の事あるが如く、亦華嚴等に廣く説けるが如し。その

(一) 苦行處 梵偈には恒布嚩塞 Dovana (二) 苦行處 梵偈には恒布嚩塞 Dovana 恒布は苦行、嚩塞は林の義なり。恒布は出家して跋伽仙人の住める苦行林に行きしを指す。太子の六年苦行せし處を云ふに非ず。

時に淨居天衆、乃至諸の護世者、皆大ひに歡喜して、正遍覺の優曇花、久しかずして開敷すべしと知りて、悉く皆頂禮し、圍遶す、或はまのあたり馬足を承けて之を奉送せり。汝も今亦秘密藏の中に於て、初めて無明の父母と別れて、初法明道の循身處に往詣す、當に知るべし、淨居天等も亦皆歡喜し、敬禮して、其の久しからずして世尊に同じからんことを知る、故に彼の慶の如くなることを得と云ふなり。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第八 終

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第九

沙門一行阿闍梨記

入漫荼羅具緣品第二の餘

二 又彼の龍王の 恭敬し禮せし時の慶に

河濱の衆の飛鳥の 環遶して行列し

希有の寂義に逮びて 將に諸有を摧きし者の如く

汝今彼の作寂の嘉慶に 同じきことを得。

此の時に菩薩、已に苦行の源底に到りて、義利なしと知りて、牧牛の女人の乳糜を受け已りて、河の中に於て澡浴して、相好圓滿したまふ。その時に佛道を去ること漸く近くして、無量の青雀の瑞あり、本行經の中に廣く明せるが如し。此の鳥をば正しく揀沙せんしゃと名け、形、青き雀に似て小さきものなり、方俗の間に謂ふ所の仙人鳥なり。菩薩澡浴し已りて、諸法の本寂の心を思惟して、明かに大菩提の路を見て、奇特の心を生じ、自ら必ず能く大勢力を以て、諸有を摧壞すと知りぬ、是の時にまた無量無邊

二 又彼の龍王の 恭敬し禮せし時の慶に 河濱の衆の飛鳥の 環遶して行列し 希有の寂義に逮びて 將に諸有を摧きし者の如く 汝今彼の作寂の嘉慶に 同じきことを得。

の吉慶の事、世間に興ることあり。汝も今亦秘密藏の中に於て、九十五種の外道の中の、種種に形神を疲勞すれども、義利あることなき苦行を棄捨すべし。阿字の一味の乳糜を噉ひて、常命色力を増益すべし、淨法水を以て其の身を灌浴して、明かに心王の大道を識りて、將に毗盧遮那の道場に坐せる處に詣らんとす、故に彼の慶に同じきことを得と云ふなり。

猶ほ婆伽婆の 樹王の下の時の慶に

慈心の力を以ての故に 無量の魔軍を破りて

種種の隨類形を以て 天人世間に遍するが如く

汝今彼の作寂の嘉慶に 同じきことを得。

世尊、道場樹下に坐して、天魔を降伏して正覺を成じたまひし時、一切の世間出世间に、種種の慶善の事ありき。天の樹王の上春の月に具足し開敷するが如く、もと菩薩の道を行ひし時のあらゆる希願、已に意の如くなることを得て、即ち普現色身、世界に遍くして衆生を開化したまふ。又此の中に魔軍と言ふは、梵本の正音には(二)博吃(三)と云ふ、是れ羽翼黨援の義なり、今古譯に依りて會意して言ふのみ。汝今菩提心を

(二) 博吃 劫 Pa-

發す、當に知るべし、已に佛覺の沙羅樹王の根本の下に安坐し、如來の加持神力を以て、遍く魔軍を伏することを得と。若し此れより堅固不動にして、心明道を速見する時は。即ち是れ初發心の中に、便ち正覺を成し、除蓋障三昧を以て、普く漫荼羅の身を現すが故に、彼の慶に同じきことを得と云ふなり。

善逝導師の 波羅奈に住して

初めて無上の法輪を 轉じたまひし嘉慶の時

奇特未曾有にして 世間の時分盡きしが如く

汝今彼の作寂の嘉慶に 同じきことを得

世尊は十義を以ての故に、正法輪を轉じたまふ、華嚴等に廣く説けるが如し。梵に(二)鉢囉囉囉囉囉と云ふは、是れ上妙の義・殊勝の義なり、即ち是れ世間に第一にして、更に過上なきが故に最無上と云ふ。復次に世尊のあらゆる所説は、みな大事の因縁の爲なるが故に、最無上と云ふ、一切世間には、初めよりこのかた未だ曾て聞かず、亦轉すること能はず、故に奇特未曾有と曰ふ。梵本には正しく奇希と云ふ、今會意して言ふのみ、自ら諸有を度して、亦無量の衆生をして、最後邊の身に住せしむ、乃至

(二) 鉢囉囉囉囉囉 Paravadya-
は云ふ意、最高の
は語る所のと云ふ
意、殊勝は殊勝の
義なる故に、最高
に謂ふ所の殊勝な
り。

三昧耶の偈 梵本

阿你也鉢囉勃哩阿也鉢囉勃哩今より誦嚩瑠那佛子之作阿毗貳尾修命を惜ま迦羅傳多り阿鉢囉不囉夜
 孺係孺係捨なサツラボ薩達薩達摩なり正法ボウチシツタ菩提菩提心多沫但鉢囉沫但鉢囉捨離〔一偈〕
 莽瑤莽瑤延り薩婆達謎數一切の法に薩但薩但諸衆生囊忙囊忙不なり係且者也多〔二偈〕
 味耶味耶係成な三勅臺佛なり囉契也侈説な薩但囉汝なり蘇沒囉修者なり〔二偈〕
 曳他曳他猶如ツバ自身ジビ尾單命なアキラサン護なタタアキラサン亦護イイ如是但囉也汝な鉢囉捉鉢你
 稽首稽首於ツロウ尊なシ弟子なり室者囉奴瑜薄吉嚩恭敬〔三偈〕
 阿囉閉耶阿囉閉耶教に依りて薩但多諸有薩喇所行ニリシ旨帝無な囊但囉疑慮タナ心な〔半偈〕
 佛子汝今より 身命を惜まざるが故に
 正法を捨て 菩提心を捨離し
 一切の法を慳慳し 衆生を利せざる行をなすべからず
 佛三昧耶を説きたまへり 汝、善住戒者
 自身の命を護るが如く 戒を護ることも亦是の如くせよ。
 誠を至して恭敬して 聖尊の足を稽首すべし

一、僧祇の六念
 二、檀越の六念
 三、夏衣の三念
 四、夏衣の三念
 五、夏衣の三念
 六、夏衣の三念
 七、夏衣の三念
 八、夏衣の三念
 九、夏衣の三念
 十、夏衣の三念
 十一、夏衣の三念
 十二、夏衣の三念
 十三、夏衣の三念
 十四、夏衣の三念
 十五、夏衣の三念
 十六、夏衣の三念
 十七、夏衣の三念
 十八、夏衣の三念
 十九、夏衣の三念
 二十、夏衣の三念

所作教に随ひて行ひて 疑慮の心を生ずること勿れ。

前に耳語して言を以て、一偈を告げよと云へるは、猶ほ僧祇の家に六念を授け、

薩婆多に五時の法を授け、此れを以て、曾て具戒を受くるや否やと驗知するが如し。
 今此の四戒は、受具し竟りて略して戒相を示すが如し、當に知るべし、即ち是れ秘密藏の中の四波羅夷なりと。人が他の爲に頭を斷たれて命根續かざれば、一切の支分能く爲す所なく、久しからずして皆當に散壞すべきが如く、今此の四夷の戒は是れ眞言乘の命根なり、亦是れ正法の命根なり、若し破壊する者は秘密藏の中に於て、猶ほ死尸の如し、具さに種種の功行を修むと雖も、久しからずして敗壞す。

第一の戒に正法を捨つべからずとは、いはく、一切如來の正教をば、皆當に攝受し修行し、受持し讀誦して、大海の百川を呑納して厭足の心なきが如くなるべし。若し諸乘の了と不了義とに於て、一切の法門に隨ひて、弃捨の心を生ずること勿れ。聲聞乘の中の如きは、若し作法に堪へたる人に對して、心に生じ口に言ひて、一法を捨つるに隨ひて、亦捨戒を成す、具足の毗尼に於て、衆數に墮ちすと雖も、然れども犯戒の罪に非ず。今此の秘密の大乗は、畢竟して捨の義あることなきが故に、則ち重罪を

(二) 他勝處 波羅夷を他勝處と譯す、邪を他とし戒を自とす、處とは持犯の所依處即ち戒なり。

成す。又此の一切の法門は皆是れ大悲世尊、無量阿僧祇劫に於て、積集したまふ所なり。普門を以て一切衆生を饒益せんと欲するが爲の故に、之を演説したまふ、猶ほ字輪の一をも弃つ可からざるが如し。聲聞乘の人の如きは、一事を捨つるに隨ひて、猶ほ和合の義斷するに因りて、律儀を喪失す、何に況や摩訶衍をや。

第二の戒に菩提心を捨離すべからずとは、此の菩提心は菩薩の萬行に於て、猶ほ大將の幢旗の如し。若し大將、幢旗を喪失する時は、即ち是れ三軍敗績して、(三) 他勝處に墮つ、故に波羅夷を犯す。人ありて三乗の法藏を愛重して、心に弃捨せずと雖も、然れども是の念を作す、無上大乗の種種の難行苦行は、我が堪ふる所に非ず、且く當に小乗の中に於て滅度を取るべしと。或は云はく、我れ當に善く善根を植ゑ、三寶に供養して、長へに人天の福報を受くべし、無上菩提は是れ普賢・文殊・諸大人等の所行の處なり、今我れ何ぞ能く之を得んと。是の如く等の種種の因縁は菩提の願を退く、即ち是れ自ら命根を斷ちて、波羅夷罪を犯す。又此の菩提心は畢竟して退く可き義あることなきが故に、聲聞法の中に、乃至三歸を放捨して退きて、白衣外道となる者せば、佛も亦慈悲哀愍して聽許したまふには同じからず。

第三の戒の一切の法に於て慳慊すべからずとは、人ありて正法を捨てず、菩提心を離さずと雖も、然れども正法に於て慳慊して、機を觀て惠施することを肯せざれば、亦波羅夷罪を犯す。然る所以は、如來の出世に因りて、然る後に是の正法あり、乃至一句一偈も、世尊の身命を喪捨して、其の僮僕となりて、然して後に之を得たるに非ざるはなし、是れ一切の衆生の父母の遺財なり、獨り一衆生の爲の故に非ず、而るを今竊かに己が有と爲すが故に、秘密藏の中には三寶物を盜むに同じ。略して法を説くに四種あり、謂はく、三乗と及び秘密乘となり、慳惜すべからずと雖も、然れど衆生を觀て、其の根器を量りて、而して之を與ふべし、若したやすく諸の深秘の事を説けば、疑謗を生せしめ、彼の善根を斷つ、則ち第四の戒の中に於て波羅夷罪を犯す。其れただ財を慳みて惠施することを肯せざる者は、十種の方便戒の中に於て犯を結す、下の品に之を説く。

第四の戒に一切衆生に於て不饒益の行を作すこと勿れとは、此は是れ四攝と相違する法なり、四攝は是れ菩薩の具戒の中の四依なり、初め戒を受くる時には、先づ當に此の遮難を開示すべし。若し能く奉行せん者には方に爲に之を受けしめよ、奉行する

(一) 偷蘭遮 大障
善道と障す、波羅
夷僧殘等を犯す方
便なる罪なり。

(二) 蘇漫囉多
Sūmandhā

(三) 異門 異名な
り、佛子と呼ぶに
異名を以て善住戒
者と呼びしな云
ふ。

こと能はざれば、則ち摩訶薩埵に非ず、爲に受けしむることを得ざれ。然る所以は、菩薩の一切智心を發す本は、普く一切衆生を攝せんがため、三乘入道の因縁を作さんが爲の故なり、然るを今反つて四攝と相違せる法を作して、衆生の障道の因縁を起す、一切衆生は亦字輪の體に同じくして、相離ることを得ざるが故に、一一の衆生の善根を損し、或は彼れに於て饒益の行を捨つるに隨ひて、波羅夷罪を犯すなり、例へば聲聞法の中に、七衆の一人を捨つるに隨ひて、即ち是れ不和合の義を以て、具足の律義を斷失するが如し。但し煩惱の心に隨ひて、姦・盜・殺・妄等を造れども、未だ彼の三業の善縁を損せず、猶ほ聲聞法の中の(一)偷蘭遮罪の如し、是れ方便學處の中の攝なり。次下は是れ阿闍梨の教戒の語なり、「佛說三昧耶」とは、梵本に兼ねて此の字あり、言はく、十方三世の佛、共に此の三昧耶を説きたまふ、同じく一の如實の道を行ひて、更に異路なし。今漫茶羅の中に一切集會して、現に證驗をなしたたまふ。梵には(二)蘇漫囉多と云ふ、翻じて善住戒者とす、其れ善く三昧耶に住するを以ての故に、亦善住戒者と名く、即ち是れ(三)異門を以て佛子の名を説くなり。汝が父母の生身の所有の軀命を護るが如く、今此の法身の慧命を愛することも、亦當に是の如くすべし。汝今具

戒を受け竟るを以て、當に誠を至して彼の諸尊に於て禮を作して退くべし。今より以後凡そ所作あらんは、當に具さに眞言法教に依りて、説の如く之を行ふべし。彼の新受戒者に同じく一切の事業先づ當に師に問ふべし、心にまかせて專擅に惡邪疑悔を生ぜしむることを得ること勿れ。復次に阿闍梨、持明藏の中の二部の戒本を説け、一一に皆是れ眞言なり、以て諸事を成辨す可し。如來は此れを以て諸の弟子を加持したまふが故に、今此の中の諸偈も亦爾り、作法の時は當に梵本を誦すべし、兼ねて字義門を以て而も廣く之を釋せよ。

「その時に金剛手、佛に白して言さく、乃至佛世尊を見たてまつるに同じきが故に」とは、是れ具足戒を受け竟るに因りて、眞言門の中の(一)無作の功德を明す。聲聞法の中には、若し具足戒を受け竟りぬれば、姦盜殺妄等の如き、是の一一の學處に、各(二)三千大千世界の一一の衆生の處に於て、皆無作の功德を得、福河流住して命終に至る。乃至不飲酒戒は、一切衆生の咽喉の中に於て皆無作の功德を生ず。(三)壞生・掘地戒は、一切の草木と金剛際より以來一一の微塵とに於て、各無作の功德を生ず。此の因縁を以ての故に、諸の結使を具せる凡夫なりと雖も、無學の聖人と同じく應供の數に在り

(一) 無作 無表の
戒體なり、作とは
爲作表とは表影、
無作と無表とは
異なれども意は同
じ。

(二) 三千大千等
聲聞戒は三千大千
を境界とし、盡形
壽を限量とす。

(三) 壞生掘地 五
篇の中の波逸提の
戒なり。

せん樂欲せば、當に此の善男子善女人を供養すべし、若し佛を見んと欲せば、即ち當に彼れを觀るべし」と。初めて世諦の漫荼羅に入る時のあらゆる福德聚も、如來と等し、初めて瑜伽深秘密の漫荼羅に入る時のあらゆる福德聚も、又また如來と等し。乃至廣く説かば、一一の地位の漫荼羅に入る時に隨ひて生ずる所の福德聚も、皆悉く如來と等し、是の中に(二)亦差別あり、亦差別なし。是の如くの(三)金剛界を見るを以ての故に、名けて金剛手とす、是の如くの法界を見るを以ての故に、名けて普賢とす、故に此の上首の聖尊と、一切の金剛菩薩衆と、皆共に同聲に説きて言はく、「我等今より以後、當に是の善男子善女人を恭敬し供養すべし、何を以ての故に、佛世尊を見たてまつるに同じきが故なり」と。猶ほ輪王の輔佐の、明かに輪王の種性を識るを以ての故に、世間に出興して、諸の義利多きことを見て、七寶をば常に隱沒せざらしめんと欲するが故に、皆以て誠を至して胎中の太子を禮敬して、之を衛護するが如し、矯飾の辭を以てするに非ず。(四)瞿醯に云はく、阿闍梨、上に説く所の如く護摩を作し已りて、淨水を以て、諸の弟子の頂上に灑ぎて、廣く漫荼羅の位を示せ、彼の大印及び明王の眞言を教へて、一處に坐して之を持誦せしめよ。次に教へて香花を以て本尊及び餘の諸尊を

(一)亦差別等若し外用に就かば差別あり、若し内證に據らば差別なし。(二)金剛界等曼荼羅の功德無量無邊なれども、其の林は理智に過ぎず金剛界は智、法界は理なり。

(三)瞿醯 分別護摩品

供養し、竟りて次第に坐せしめて、師自ら般若經を誦じて、彼れをして之を聽かしめ、次に爲に都て三昧耶戒を説け。汝等今日より、常に三寶と及び諸菩薩と諸の眞言尊とに於て、恭敬し供養せよ、摩訶衍經に於て、恒に信解を生ぜよ、凡そ一切の三昧耶を受けん者を見ては、當に愛樂を生ずべし、尊者の所に於て恒に恭敬を起し、諸尊の所に於て嫌恨の心を懷き、及び外道の經書を信學すべからず、凡そ來り求めん者には力に隨ひて施與せよ、諸の有情に於て恒に慈悲を起し、諸の功德に於て慇懃に修習せよ、常に大乘を樂ひ、眞言行に於て懈廢すことを得ること勿れ、あらゆる秘密の法をば、三昧耶なからん者には、爲に説くべからずと。大略此の如し、餘は供養法の初品の中に廣く明すが如し。是の如く教授し已りて、各各に彼の本尊の眞言と印との所屬の部を示し、并に爲に本漫荼羅を解説せよ。然して後に最後の護摩を作せ。護摩し竟りなば、更に如法に護身して、諸方に食を施せ。施し畢りなば、手を洗ひ灑淨して、諸の弟子のために、香花等を以て次第に一切の諸尊を供養し、誠心に頂禮し、并に歡喜を乞へ。また闍伽を執り、各各に本眞言を以て、法の如く發遣せよ。或は本教に依り、或は漫荼羅主の眞言を以て、一時に發遣すること、請の法に准同せよ。諸の供養の食をば、

るに遇へり、宜しく趣時に種を下して、其の機会を失せしむること勿るべしと、故に重ねて之を言ふなり。

爾の時に世尊既に請を受け已りて、將に大力大護の明妃を説きたまはんとするが故に、一切の願を満たし、廣長舌相を出して、遍く一切の佛刹を覆ふ清淨法幢高峰觀三昧に住したまふ。此の中に出と言ふは、梵本を正しく翻せば、當に發生と云ふべし、舊譯には或は奮迅と云ふ。此の廣長の舌相を出すことは、即ち是れ如來大神通力を奮迅し示現したまふが故に、會意して之を言ふなり。此の三昧は如來の廣長舌相、一切の佛刹に遍滿する巧色摩尼普門大用の中に於て、最も上首たること、猶ほ大將の幢の如し、故に清淨法幢と云ふ、梵に(一)駄轉若と云ふ、此に翻じて幢とす、梵に(二)計都と云ふ、此に翻じて旗とす、其の相やや異なり。幢はただ種種の雜色の綵を以て標幟し莊嚴せり、計都の相も亦大に同じ、而も更に旒旗の密號を加ふ、兵家に龜龍鳥獸等の種種の類形を畫作して、以て三軍の節度とするが如し。ある處には亦翻じて幢とす、故に合して之を言ふ、若し具に梵本を存せば、當に清淨法幢旗と云ふべし。大將は高峰の上に於し幢旗を建立して、山川に倚伏せる敵人の情狀を備さに見て、百萬の衆を

(一) 駄轉若 Dh
Yas
(二) 計都 Kein

指摩するに、動止齊一にして、離合心に從ひ、以て戦へば必ず勝ち、以て攻むれば必ず取る、若し拙將は事勢に暗くして、又幢旗を失へば、則ち人各異心にして敗るること、踵を旋らさざるが如し。是の如くの淨菩提心は萬行の幢旗たることも、亦また是の如し、中道第一義諦の山の上に住して、安固不動にして、健行三昧を以て、普く十方を觀じて、悉く無量の度門の材性の優劣と、所應の用處と、及び諸地の通塞と、障道の因縁を見るが故に、能く無量の功德を攝持し、普く一切衆生を護る、凡てあらゆる所爲、沮壞す可からず。

その時に世尊、是の如くの念を作したまふ。我れ初發意より以來、常に此の勇健の菩提心を以て、正法と及び衆生とを護持す、種種の難行苦行の事の中に於て、猶ほ金剛の如くして退轉あることなし、正しく是の如くの三昧を成就して、普く十方の諸佛の刹を護らんが爲めの故なり。今我が所願皆已に満足す、作すべき所を作さんことは、今正しく是れ其の時なりと。即時に普く一切如來法界に遍して、無餘の衆生界を哀愍する音聲を出して此の持明の法句を説きたまふ。若し我が言ふ所誠實にして虚しからずば、其の誦持し修習することあらば、其の勢力をして我れと異なることなからしめん

(一) 囉逝 Rajas
王の字は Rajas
に三昧の點
を加へて、とす
すが故に女聲を
すと云ふ。

(二) 歌羅羅 梵語
Kalala 胎
内に宿りて形
に成りたる物を
云ふ。

と、故に大力大護と名く、阿闍梨言はく、明とは是れ大慧光明の義なり、妃とは梵に
は(一)囉逝と云ふ、即ち是れ王の字に女聲を作して之を呼ぶ故に、傳度の者、義を以て
説きて妃とすと。妃とは是れ三昧の義なり、謂はゆる大悲胎藏三昧なり、此の三昧は是
れ一切佛子の母なり、此の佛子とは即ち是れ清淨法幢の菩提心なり。彼の胎藏の始め、
(三)歌羅羅の時より、含藏し覆護して、衆縁の爲に傷らざらしむるが如し、漸次に増長し
乃至之を誕育して後、猶ほ固懃の心を以て守護して、之を乳養するが如し。是の故に
母の恩最も深くして、報す可きこと難しと説く。此の三昧より起つとは、入住出の時
みな是れ不思議法界なり、世間の禪定の動寂相礙して、退失間隙の時あるが如きには非
ず。

(四) 毗涅縛 Vira
種々又は都て
の義、目契解 Mu
Khahyudh は諸門
なり。

南摩薩婆他他莫帝嚩、薩婆佩野微孽帝嚩、微涅縛目契解、薩婆他哈欠、囉吃沙摩訶
沫麗、薩婆他他孽多、奔呢也爾闍帝、鉢鉢、但囉磔但囉磔、阿鉢囉底訶帝、莎訶
初めの句は一切の諸の如來を歸命す。次の句は能く一切の諸障悲怖等を除く、是れ
如來の大力大護の徳を歎するなり。又次の句は無量の法門を歎す。毗涅縛とは亦是れ
巧の義なり。謂はゆる無量の巧度門なり、即ち是れ法幢高峰觀三昧の普門の業用なり、

(一) 薩婆他 Sar
vaha あらゆる方
法にての義。

(二) 哈欠 Kan,
Khah

(三) 訶 ha にて
ha の母を除き
たるもの。

(四) 法 Kha にて
Kha の母を除き
たるもの。

今此の明妃を説かんと欲するが故に、先づ一切如來の是の如くの功徳を歸敬するな
り。次に(一)薩婆他と云ふは是れ惣じて諸佛の是の如くの功徳を指す、同じく一字門に
入らしめんと欲するが故なり。次に(二)哈欠の兩字あり、正しく是れ真言の體なり、亦
は種子と名く、以下の諸句は皆此の二字門を轉釋す。(三)訶字は是れ因の義なり謂はゆ
る大乘の因とは即ち是れ菩提心なり、一切の因不生なるを以ての故に、乃至離因緣
の故に名けて淨菩提心とす、是れ成佛の真因、正法幢旗の種子なり、上に空點を加へ
たり、是れ入證の義なり、故に聲を轉じて哈と云ふ。(四)法は是れ大空なり、上に點を
加へて、聲を轉じて欠とす、即ち是れ此の大空を證するを、名けて般若佛母とす、正し
く是れ明妃の義なり、此の虚空藏の中に於て、真因の種子を含養す、即ち是れ大護の
義なり、復次に法字門は猶ほ虚空の畢竟清淨にして所有なきが如し、即ち是れ高峰觀
所知の境界なり、訶字は是れ菩提幢なり、亦是れ自在力なり、此の二字相應するを以
ての故に猶ほ大將の能く怨敵を破るが如し。又訶字門は是れ菩提心の寶なり、法字門
の虚空藏と和合するが故に、巧色摩尼を成すことを得て、能く一切の希願を満たす。今
此の真言の中には此の缺字を闕く、下の文には具さにあり。次の句に(五)囉乞叉と云ふ

(五) 囉乞叉 Ra

を以て種子の母胎に託して失壞せざるが如きは即ち是れ相加持するなり。是の如く諸佛の國王と明妃と和合して、共に毗富羅の種子を生じたまふ、大悲胎藏の爲に持たれて、失壞あることなきが故に、法界加持と名くるなり。世尊普く一切衆生を加持してみな平等の種子を作し竟りて、即時に遍法界胎藏三昧に入りて、此の一一の種子を觀するに、皆是れ蓮華臺上の毗盧遮那なり、普門の眷屬、無盡の莊嚴、亦大悲漫荼羅と等しくして異なることなし、而も諸の衆生は未だ自ら證知すること能はざるが故に、聖胎俱舍にありと名く、若し藏を出づる時は即ち是れ如來の解脫なり。世尊是の如く現に觀察し已りて即時に三昧より起ちて、三昧耶の持明を説きたまふ。(一)三昧耶とは是れ平等の義、是れ本誓の義、是れ除障の義、是れ警覺の義なり。平等と言ふは謂はく、如來此の三昧を現證したまふ時、一切衆生の種種の身語意は、悉く皆如來と等し、禪定智慧と實相の身と亦畢竟して等しと見たまふ。是の故に誠諦の言を出して、以て衆生に告げたまはく、若し我が言ふ所必定して虚しからずば、一切衆生をして此の誠諦の言を發さん時、亦三密の加持を蒙りて、無盡の莊嚴、如來と等しからしめんと、是の因縁を以ての故に、能く(二)金剛の事業を作すが故に、三昧耶と名くるなり。本誓と言ふ

(一) 三昧耶 Sa
maya

(二) 金剛の事業
此の眞言を誦すれ
ば如來と等しくな
る故に、佛業な
りの所作は皆障に
壞れず、故に金
剛の事業と云ふ。

は、如來此の三昧を見證したまふ時、一切衆生に悉く成佛の義ありと見たまふが故に、即時に大誓願を立てたまふ。我れ今要す普門より無量の方便を以て、一切衆生をしてみな無上菩提に至らしめん、衆生界の未だ盡きざる以來を劑りて、我が事業界終に休息せじ、若し衆生ありて、我が本誓に隨ひて此の誠實の言を發さん時、亦彼の所爲の事業をして、皆悉く金剛の性と成らしめんと、故に三昧耶と名く。除障と言ふは、如來は一切衆生に悉く如來の法身あり、但し一念の無明に由るが故に、常に目前にあれども而も覺知せずと見たまふ。是の故に誠實の言を發したまふ。我れ今要す當に種種の方便を設けて、普く一切衆生の爲に眼膜を決除すべし、若し我が誓願必ず當に成就すべくば、諸の衆生をして、我が方便に隨ひて、此の誠實の言を説かん時、乃至一生の中に於て、無垢眼を獲て、蓋障都て盡さしめんと、故に三昧耶と名く。(三)警覺の義と言ふは、如來、一切衆生はみな無明の睡にあるを以ての故に、是の如くの功德に於て、自ら覺知せず、故に誠言を以て感動して、醒悟を得しむ、亦此れを以て諸の菩薩等を警覺して、深禪定の窟を起ちて、師子頻申を學ばしむ。若し眞言行人ありて、此の三昧耶を説かば、我れ等諸佛も亦當に本誓を憶持して、遠越することを得ざるべしと、猶

(三) 警覺の義等
一には無明の睡に
ある衆生なば如來
の警覺し醒悟せし
む、此の三昧耶を
説きて聖尊を警覺

五亂脱
(一)復次に入佛
等除障の義に就
きて三種みな三昧
耶と名くることを
明す。
(二)又入佛三昧耶
等警覺の義に就
きて三種みな三昧
耶と名くる。

まふが故に、入佛三昧耶の持明を説きたまふ、此の持明を以て佛の平等の戒に入るこ
とを得、即ち是れ聖胎に託する義なり。爾の時に世尊また普眼を以て、諦かに一切衆生
は皆悉く聖胎具足して、佛家に生在す、その時に無盡莊嚴も、亦また如來と等しと觀
たまふ。此の三昧より起ち已りて、即ち法界生の眞言を説きたまふ。又普眼を以
て、此の一一の衆生は金剛の事業具足し成就す、その時に無盡の莊嚴も、亦また如來
と等しと諦かに觀見したまふ。此の三昧より起ち已りて、即ち金剛薩埵の眞言を説き
たまふ、故に此の三種をば皆三昧と名く。復次に入佛三昧耶に由るが故に、胎藏
の中に於て天折せしめず、法界生に由るが故に、初めて胎を出づる時、諸の障礙を離
る、金剛薩埵に由るが故に、能く家業を轉じ諸の伎藝を備ふ。又入佛三昧耶を以て、
秘密の中胎藏を加持し、法界生を以て、金剛菩薩の二重の眷屬を加持し、金剛薩埵を
以て、種種の隨類の形を加持す。入佛三昧耶は蓮華藏の如く、法界生は蓮華の敷きた
るが如く、金剛薩埵は蓮華の成就して、還つて種となるが如し、故に此の三種をばみ
な三昧耶と名くるなり。

南摩三漫多勃陀喃、達摩駄視、薩嚩婆嚩、句痕

(一)達摩駄視
Dharmadasi
薩嚩婆嚩 Svaha
句痕 Ko,ham =
kas + aham

(二)伐折囉咀麼句
痕 Vajraima ko,
ham
等此は金剛薩埵
に云ふは、前の法
界生と其の體は同
じけれど、漸く
長じて堅固力を成
就せるなり。

(一)達摩駄視は是れ法界の義なり、薩嚩婆嚩は是れ自性なり、亦は本性と名く、句痕は是
れ我の義なり、其の句義は我即法界自性と云ふなり。必定師子吼して、我れ及び一切
衆生は皆是れ法界の自性なりと言ふを以て、是れ平等の義なり。我れ當に種種の方便
を設けて、一切衆生をして皆悉く證知せしむべしと、是れ本誓の義なり。我れ即ち法
界の自性なりと知るを以ての故に、能く一切の分別を除きて、淨知見を開く、是れ除
障の義なり。諸佛は唯だ願ひて、本願を憶念したまふが故に、我が此の身をして、即ち毗
盧遮那法界の自性に同せしむ、是れ警覺の義なり。當に字門を以て廣く之を釋すべし。

南摩三漫多伐折囉報、伐持囉咀麼句痕

初めの句は將に金剛薩埵の眞言を説かんとするが故に、一切の金剛を歸命す、即ち
是れ無量の門より如來の金剛智を持つ者に、皆憶持護念せしむるなり、次の句に伐
折囉咀麼句痕と云ふは、謂はく、我が身即ち金剛に同じなり、金剛は即ち是れ法界
の自性なり、大堅固力を成就して、沮壞す可からざるを以ての故に、異門を以て説き
て金剛とす。如來は普眼を以て、一切衆生の金剛の智體は、我れと異なることなしと
觀たまふ、是れ平等の義なり。衆生自ら覺知せざるを以ての故に、無量の金剛智門よ

り、種種の金剛の事業を作して、要す是の如くの大障を摧きて、實際に至らしむるは是れ本誓の義なり。是の如くの實際を名けて、無垢眼・金剛眼とす、即ち是れ除障の義なり。此の師子吼の聲を以て、十方の佛刹を震動す、即ち是れ警覺の義なり、故に三昧耶と名く。復次に眞言行者、初めの三昧耶を以ての故に、如來秘密の身口意平等の身に同じきことを得、第二の三昧耶を以ての故に、如來加持法界宮の尊特の身に同じきことを得、第三の三昧耶を以ての故に、此の身土をして皆金剛の如くならしめ、無量の持金剛衆のために、自ら圍繞せらる。佛、初めの三昧耶を説きたまふことは、自受用の爲の故、第二の三昧耶は、法性身の諸の菩薩を成就せんが爲の故、第三の三昧耶は、隨類の衆生を折伏し攝受せんが爲の故なり。佛、初めの三昧耶を説きたまふことは、大悲胎藏の漫荼羅を建立せんが爲の故、第二の三昧耶は、毗盧遮那の阿闍梨の事業を作さんが爲の故、第三の三昧耶は、執金剛弟子の事業を作さんが爲の故なり。初めの三昧耶は、如來の眷屬を加持せんが爲の故、第二の三昧耶は、蓮華の眷屬を加持せんが爲の故、第三の三昧耶は、金剛の眷屬を加持せんが爲の故なり、是の故に佛、三三昧耶を説きたまふ。

(一) 金剛の甲冑は、果後の方便化他の大誓を金剛甲冑に喩ふ。
(二) 又一一の度等六度各各に五度を具せることは智論度に出づ。

(三) 迦嚩遮は、(四) 最初の嚩字等伐折囉の三字に就きて釋す、(五) 折は生不可得、嚩は自性清淨の義なり。

次に金剛鎧の眞言を説きたまふことは、金剛薩埵の身を莊嚴せんが爲の故なり。行人已に金剛の誓願を發して、一切衆生の爲に諸障を摧滅せんと欲するが故に、牢強の精進を以て(一)金剛の甲冑を被服す。且く六波羅蜜の如きは、一一に如實相にして、皆金剛の破壊す可からざる如し、(二)又一一の度の中に皆五度を具せり、是の故に周體密緻にして、間隙あることなし。六度の如く三十七品・十八空・百八三昧・五百陀羅尼等も、皆當に廣く説くべし。如來の金剛甲を被るを以ての故に、六道に旋轉して生を出でて死に入れども、一切の煩惱業苦の傷ること能はざる所なり。若し淺略の釋に就かば、行人此の眞言を以て自ら加持するに由るが故に、一切の諸の天龍等、皆金剛薩埵の身に同じく、遍體に皆金剛の甲冑を被て堅密無際にして、光猛焰の如くなるを見る、是の故に一切の障を爲す者、皆傷ること能はざるなり、

南麼三漫多伐持囉赧、伐折囉迦嚩遮吽、伐折囉は是れ金剛なり、(一) 迦嚩遮をば甲に名く。如來、金剛眼を以て、普く衆生を觀たまふに、此の金剛の甲冑を被ざることなし、是の故に誠實の言を以て之を演説したまふ。(二) 最初の嚩字を以て眞言の體とす、嚩は是れ諸法離言説の義なり、若し是れ戲論言説の所行の處ならば、悉く皆破る可く轉

(二)次に甲の義等、迦遮の三字に就きて釋す、造作は迦、假名は遮、遷變は遮、象の字相なり。

(三)定慧具足字は下に三昧の畫あり、是れ定なり、上に空點あり、是れ大空の慧なり。

す可し、堅固なることあることなし、是の故に嚙字を以て體とす、次の字は皆之を轉釋す、何の故にか諸法は離言說なる、生不可得なるを以ての故に、何の故にか生不可得なる、自性清淨なるを以ての故に、自性清淨なるは即ち是れ金剛薩埵の身なり。(三)次に甲の義を明す。若し法是れ造作の故に成る所ならば、當に知るべし、但だ假名のみあり、縁に従ひて遷變して、尙ほ自ら其の性を固くすること能はず、况や能く六塵の利箭を蔽ひ捍がんやと。今金剛の體の無盡莊嚴を觀るに、皆悉く諸の造作を離れたり、是の故に堅固不壞にして、百非も干すこと能はざる所なり、是の故に金剛甲冑と名く。最後の卍字は即ち是れ無所畏の聲なり、亦是れ自在力の義なり亦是れ歡喜の義なり、(三)定慧具足するを以て、此の訶字門を證する時、自ら必ず能く諸障を摧壞して、普く衆生を護ることを知る、是の故に大いに歡喜するなり。

次に如來眼の眞言を説きたまふことは、金翅鳥王の威力具足し、羽翮完く堅くして、又極めて明利なる眼を得て、虚空の中に於て、俯して大海を觀ること、鏡像を視るが如くして、則ち能く隨意自在に諸龍を搏ち獲るが如く、當に知るべし、眞言行人も亦また是の如しと。此の如來の淨眼を以て自ら加持するが故に、漫荼羅海會、當に其の前に

現れて、一切の根縁と及び遮道の法とを見るべし、此れに由りて金剛の事業意に隨ひて皆成る、故に次に之を説く。

南麼三漫多勃陀喃、但他揭多斫吃菟尾也、薩路迦也、莎訶

(一)但他揭多斫吃菟尾 Tathagatacak
(二)尾也 薩路迦也
(三)多字 但他揭多の怛なり

右の句義の中に、(一)但他揭多斫吃菟尾とは是れ如來眼なり、次に(二)尾也嚙路迦也と云ふは是れ觀の義なり、言はく如來眼を以て觀るなり。最初の(三)多字を用て體とす、多は是れ諸法如如の義なり、一切の法本不生なるを以ての故に、即ち此の如如も亦不可得なり、是の故に如來、一切の法は畢竟して如に非ず異に非ずと觀たまふ、見る可からずと雖も、而も亦明かに見たまふ、諸佛の如く諸の衆生の眼も亦然り。若し行者、此の眞實の語を説く時に、則ち不思議の佛眼加持を蒙りて、漸く眼清淨なることを得るなり。

次に塗香等の六種の眞言あり、皆是れ漫荼羅に入りて供養を修する所の所要なり、故に此の品の中に於て説く。

南麼三漫多勃多喃、微輸駄健杜納婆嚙、莎訶

(四)微輸駄 VI-
qudha
(五)健杜 Gandha
(六)納婆嚙 Vd-
bhavya

右の句義の中に、(四)微輸駄とは是れ淨の義なり、(五)健杜は是れ香なり、(六)納婆嚙は是れ

發生の義なり、謂はゆる淨香發生なり。句の初めの微字を以て體とす、嚙字の上に於て伊字の畫を加ふ是の故に轉聲して微とす。嚙字は是れ金剛の義、離言説の義なり、三味は是れ住の義なり、是の如く定慧均等なるは即ち是れ住無戲論執金剛の三世無障礙智戒なり。是の如く戒香は其の性本寂にして無去無來なり、而も常に法界に遍滿す故に、淨塗香と名く。一切衆生も亦等しく共に之を有すと雖も、然れども未だ發心せざるを以て故に、此の香未だ發せず。我れ今已に此の戒香を用て、遍く法身に塗るが故に、能く淨香を以て善く一切に薰するなり。

次に華の眞言。

南廕三漫多勃陀喃、摩訶妹咀囉也、毗庾娜藥帝、莎訶

右の句義の中に、(一)摩訶妹咀囉也とは是れ大慈の義、(二)毗庾娜藥帝は是れ生の義なり。謂はゆる大慈生の義なり。妹の字を以て眞言の體とす、即ち是れ華字の上に、三味の畫を加ふ、是の故に轉聲して之を呼ぶ。華は是れ心の義、我の義なり、亦は大空と名く、言はく、此の心蓮華は、妄我の爲に纏はれて増長することを得ず、今自ら心の實相を證知するが故に、慈悲藏の中より八葉鬘藥次第に開敷す、故に大慈より生ずと

(一) 摩訶妹咀囉也
Maha maipya
(二) 毗庾娜藥帝
Vyudgite

曰ふ。復次に淨菩提心の樹王の種子、慈悲地の中より滋長し茂盛して、萬徳の花を開き、方便を以ての故に實を成す、故に大慈より生ずと曰ふなり。當に字門を以て廣く之を釋すべし。

次に焼香の眞言。

南廕三漫多勃陀喃、達摩駄賭弩藥帝、莎訶

右の句義の中に、達摩駄賭弩藥帝は是れ法界の義なり、(一)弩藥帝は是れ隨至の義、亦是れ遍至の義、亦是れ逝の義、進不住の義なり、譯して遍く法界に至ると云ふ、句の初めの達字を以て體とす、衆生界本不生なるを以ての故に、乃至法界の定相も亦不可得なり。是の如くの法界は深廣無際にして、度量す可からず、而も瑜伽行人は恒に殊に勝進して、休息せざるが故に、身語心業悉く是の如くの法界に遍す、乃至一華を佛に供養する時に至るまで、亦是の如くの法界に遍す。即ち是れ焼香の義なり。

次に飲食の眞言。

南廕三漫多勃陀喃、阿囉囉、迦囉囉、沫隣捺那頭、沫隣捺泥、摩訶沫履、莎訶

右の初めに、(一)阿囉囉と云ふは是れ不可樂聞の聲なり、不善聲の義なり、人の高聲に

(一) 弩藥帝
Vidga-

(一) 阿囉囉
Ara-

喧聒して聽聞者をして心寂靜ならざらしむるが如し。次に(二)迦囉と云ふは是れ前の不善の高聲を止む、是れ恬漠寂怕の義なり。此の中には正しく法喜禪悅を以て食の義とす、是の故に此れに寄せて之を言ふなり。若し字輪の相に就かば、阿は是れ本初の義なり、此の本初あるを以て則ち二種の塵垢あり、謂はく煩惱と智障となり、此の二種の塵垢に由るが故に、則ち戲論喧聒の聲あり。今諸法不生なるを以ての故に、二種の塵垢も亦本不生なり、即ち是れ甘露の門を開きて、涅槃の飯を成す、故に阿囉囉と名く、復次に若し人萬行を勤修して、是の如くの法味を得んことを望めば、造作するを以ての故に、二障還つて生ず、是れ常命色力の眞の甘露味に非ず、今諸法は造作することなきを以ての故に、内證の味、他に從ひて得るにあらず、乳糜を食すれば更に所須なきが如し、故に前の不善聲を止むと云ふ。(三)沫隣捺那とは、凡そ西方の享祭の食は、上諸佛に獻するより、下神鬼に及ぶまで、通じて沫嚙と名く、其の句義に云はく、我れ飲食を以て奉獻すと。次に沫隣捺泥とは、此の意は言はく、我が獻する所の食を受け已りて、當に還つて我れに妙食を與ふべしと。世間の人、餽膳を以て福田に奉施して、今世後世をして飲食に乏しきこと無からしめんが爲と云ふが如し、故に今無盡の

(1) 沫隣捺那
Vaidadami

法食を以て、世間の供養を加持して、諸尊に奉施して、還つて當に我れに所願を與へて、常に不死不生の味を充足せしむべしとなり。次に摩訶沫履と云ふは、即ち是れ諸食の中に於て倍廣大豊美を加ふ、此を以て上の句を料簡して云はく、我が今獻する所及び祈る所、みな極無比味無過上味にありて、有量の食を求めずと。

次に燈明の眞言。

南麼三漫多勃陀喃、但他揭多喇旨、薩叵囉囉囉婆娑那、伽伽捺陀哩耶、莎訶

(1) 多字 但他揭
多の但なり。

右の句義の中に、但他揭多とは是れ如來なり、(二)喇旨とは是れ饒明なり、次に薩叵囉囉囉と云ふは是れ普遍なり、阿囉婆娑那とは是れ諸暗なり、伽伽捺陀哩耶とは是れ無限量等虚空なり、意は言はく、如來の餘光普く諸暗に遍して、虚空に等同にして、限量あることなしとなり。此の眞言は句の初めの(三)多字を以て體とす、心の實相に如ふは即ち是れ毗盧遮那の大智の明、普く世間を照して遍せざる所なし。諸暗と言ふは即ち是れ無明なり、無明不生なるを以ての故に、體即ち是れ明なり、是の故に如來の光明は普く諸暗に遍せり、等虚空と言ふは、無明は虚空の無量なるに等しきを以ての故に、如來の智光も亦虚空の無量なるに等し、乃至老死は虚空の無量なるが如く

なるが故に、如來の智光も亦虚空の無量なるが如し。十二因縁の如く一切の諸法も亦是の如く説くべし。是の如く決定の義なるが故に燈明の眞言と名く、此れを以て燈明を加持して佛に供養するは、即ち是れ諸供の中の最なり。

次に闍伽の眞言。

南麼三漫多勃陀喃、伽伽那娑摩阿娑摩、莎訶

右の句義の中に、(一)伽伽那とは是れ虚空の義なり、娑摩とは是れ等の義、阿娑摩とは是れ無等の義なり、謂はゆる虚空に等しくして等しきものなしとなり。如來の法身は本性淨の故に、無分別の故に、無邊際 of 故に、虚空に等同なり。然もまた無量無邊の不思議の功德あり、彼の虚空の能く譬喩する所に非ず、故に無等と云ふなり。復次に阿娑摩とは是れ不等の義なり、不等とは謂はゆる二乘なり。今は既に虚空に等同なり、又此の無等に等しきが故に、等虚空無等と云ふなり。最初の伽字を以て眞言の體とす。衆生界の中の來去も亦不可得なり、法界の中の來去の相も亦不可得なり、如來如去不可得なるを以ての故に、名けて大空とす、此の大空清淨の水を以て、用て無垢の身を浴す、是れを闍伽の眞實の義とす。

(一) 伽伽那 Gāgā

(二) 伽伽那阿難多 (Sāgāna nānā) (三) 達摩羅闍多 Dharmarajata

(三) 法界胎藏等は前の法界胎藏より指しより生ずるは法界生を指す。

次下に四の眞言あり、亦是れ漫荼羅の阿闍梨の莊嚴の相なり、故に此の品の中に於て説けり。初めに如來頂相の眞言。

南麼三漫多勃陀喃、伽伽那阿難多薩發囉傳、毗輸駄達摩羅闍多、莎訶

右の句義の中に、(一)伽伽那阿難多とは是れ虚空無量なり、薩發囉傳とは是れ普遍なり、毗輸駄とは是れ清淨なり、(二)達摩羅闍多とは是れ法界生の義なり。此れは言はく、如來の頂相は猶ほ虚空の、數量を出過して普く清淨なるが如し、當に知るべし、是の如くの頂相は、(三)法界胎藏より生ず、世間の父母の胎藏より生ずるには非ずと。此の眞言も亦伽字を以て體とす、言はく、如來の髻相は去來の相なくして、大空に同じ、而も一切衆生は去來の相を以て之を觀る、是の故に十方に周くして、其の邊際を見ること能はず、若し行者、必定の心を以て、我が頂相も亦また是の如しと自ら知る、是を佛頂の眞言と名く。阿闍梨自ら毗盧遮那と作る時は、髻を解きて更に之を結べ、若し出家の人は、右の手を以て拳になして頂上に置き、然して後に此の眞言を説きて以て之を加持すべし、即ち一切の諸の天神等も、其の頂相を見ること能はず。次に如來甲の眞言。

(二) 伐折囉入嚩
Vajra Vajra
(三) 微薩普囉
Vishvava

南麼三漫多勃陀喃、伐折囉入嚩羅、微薩普囉吽

右の句義の中に、(一)伐折囉入嚩羅とは是れ金剛光なり、(二)微薩普囉とは是れ普通の義なり、言はく、此の金剛智の光、普く一切に遍して、能く生死の暗障を除く、亦能く之を映奪する者なしと、則ち是れ如來甲の義なり。此の眞言は最後の吽字を以て體とす、三解脱門を具足せり、謂はく、上に眞字の空點あり、是れ大空の義なり、即ち是れ空解脱門なり、本體は是れ訶字なり、離因縁の故に即ち是れ無明解脱門なり、下に鄔字の三昧の畫あり、本不生なるを以ての故に、即ち是れ無作解脱門なり、是の如くの三門には一切の諸障入こと能はざる所なり。此の慧光を以て遍く身を嚴るが故に、名けて如來甲とす。(三)密印を檢するに、其の中の梵本に殘缺あるに似たり、疑ふらくは此は是れ金剛薩埵圓光の眞言なり、更に當に餘の梵本を訪ふべし。

次に如來圓光の眞言

南麼三漫多勃陀喃、入嚩囉麼復徐、但他藥多囉旨、莎訶

右の句義の中に、入嚩囉とは是れ餘光の義なり、(一)麼麼爾とは是れ鬘の義なり、焰を以て鬘として、輪環して絶へず、故に如來圓光と名く。次の句に但他藥多囉旨と云

(三) 密印を檢す
後の密印品の
印と對檢するに今
の眞言と合せずと
云ふなり。若し此
の眞言が、如來甲
ならば、但他藥多
(如來)迦嚩囉(甲)
の句あるべし、然
るに之なし、故に
如來甲の眞言に非
じと疑ふなり。(四)
(四) 麼麼爾 Ma-
rini

ふは、是れ如來の光明の義なり、此は是れ明白の光なり、梵音は焰鬘の光と其の名不同なり。正しく此の囉旨の字を用て眞言の體とす、上に囉の聲あり、是れ塵垢の義なり、下體の遮字は是れ遷變の義なり、阿字門に入るを以ての故に、即ち是れ本より塵垢なし、亦遷變せず、即ち是れ如來常寂の光なり。又伊字の三昧の聲を帶ぶ、言はく、此の常寂の光は定慧具足せり、是の故に寂にして常に照なり、照にして常に寂なり。阿闍梨此れを以て身を加持するが故に、一切の諸天神等、如來の餘鬘遍く其の體に被りて、威猛にして觀難きこと猶ほ日輪の如くなるを見る、是の故に諸の障を爲す者、其の便を得ず。

次に如來舌相の眞言。

南麼三漫多勃陀喃、摩訶阿摩訶、但他藥多爾訶嚩、薩底也達摩鉢囉囉瑟耻多、莎訶

右の句義の中に、摩訶阿摩訶とは是れ大無大の義なり、但他藥多(一)爾訶嚩とは是れ如來舌の義なり、此の舌の廣長の相遍く一切の佛刹を覆へり、故に名けて大とす、此の大更に過上なきが故に、待對す可きものなし、故に大の相も亦不可得なり、故に名けて無大とす。次に薩底也と云ふは是れ諦、達摩とは是れ法、鉢囉囉瑟耻多とは是

(一) 爾訶嚩 Ji-

(二) 鉢囉囉瑟耻多 Prati-sphita

(一)息障品は内外の諸障種々の事なるを淨除する事なり。明入漫茶羅の行法を明し、今此品には金剛手佛に漫茶羅を畫し、眞言を誦する時障を爲す者あらば、云何にしてこれを除め、除き得るか、又如何なる眞言を持し、如何なる果を成ずるか、佛の除障の法等を説き玉ふなり。

れ成就なり、譯して成就實諦法と云ふ。如來は無量劫よりこのかた、常に眞實の諦語を修するが故に、此の平等の語輪を得、實諦の法を成就して、發す所の誠言必定して異なることなし、故に最後の多字を以て眞言の體とす、如來のあらゆる語言は、常に如實相にして無誑無異なることを明す。阿闍梨此れを以て身を加持するが故に、法教を轉説することみな金剛の如し、乃至能く一言を以て諸佛の刹に遍す。凡そ此の諸の眞言等皆當に字門を以て廣く之を釋すべし。

(二)息障品第三

(三)爾時に金剛手、又復佛毘盧遮那に白して問ひたてまつる。世尊よ云何が漫茶羅を畫する時障を爲す者を除息することを得、眞言等を誦持せん者に惱害なからしむや。云何が眞言を持誦せん、果は彼れ云何。」と此れ毗盧遮那如來に加持せらるが故に、金剛手佛の神力を承けて大衆の疑を斷じ、及び未來の衆生のために復此間を發すなり。「大毗盧遮那世尊の言はく、善哉善哉大衆生、能く此説を發すこと大に諸の衆生を利益せんが爲めの故なり。我今當に一切を開示せんが爲めに汝が所問に隨ふべし。と、佛言はく障は自心より生ず、昔の慳に隨順するに由りてなり。彼因を除かんが爲めの故に、

あり。即ち此文には三問を含む。然れども當品に正しく佛が答へ玉ふは第一問にして他は後品に述べ玉ふなり。

(一)思惑は思惑なり、思惑は障の因なるが故に障の果に從へて思は即ち是れ障なりと云ふなり。

(二)有の字は梵語有の義あり。此語に又生の義もあるなり。

菩提心此を念すべし、若し分別して心思より有なるを除かんには菩提心を憶念せよ。持誦者諸過を離る。」とは、佛言はく、一切の障法は復無量なりと雖も要を以て之を言は、但心より生ずるなり、又行者過去世に慳法に隨順せしに由るが故に、今世に多く諸障あり。當に知るべし、亦是れ心の因縁より生ずるなり。當に知るべし、彼の慳貪等は是れ諸障の因なり、若し彼因を除かば諸障自ら息む。此中の對治は即ち是れ菩提心なり。若し菩提心を念するが故に、即ちこれ能く諸障の因を除くなり。又復一切の諸障は分別に由て生ず、此分別は妄の心思によりて有なりとは、(一)思は即ち是れ障なり。謂はく心中の惱惱隨煩惱等なり。此の中の(二)有の字は梵音に亦生の義と云ふ。心思の有は若し能く離るれば諸の分別も即ち是れ淨菩提心なり。行者此心を憶念するに由りて即ち能く一切の過を離る。」意に常に不動大有性を思惟して、能く一切の障を爲す者を除け。彼當に此印を結ぶべし」とは、是れ前に説く所の不動明王なり、此は是れ如來法身大願を以ての故に、無相の中に於て而も是れ相を現じて、一切の眞言行者を護り玉ふ。若し行者常に能く憶すれば能く一切の障を離る。謂はゆる不動とは即ちこれ眞淨の菩提心なり。是の義を表せんが爲めの故に事に因りて名を立つ。此明王一目を閉ぢ玉

是れ殺には非ざるなり。爾時に諸天等三千世界の天主の諸佛の三昧耶に順せざるを以ての故に、自ら命終を取るを見て、一切敬畏して自ら相謂つて言はく、天主すら尙し爾り、我如何が往かざらん。即ち共に佛所に詣して、大漫荼羅の中に於いて、法利を得。時に不動明王佛に白して言さく、此大自在天當に更に云何がすべき。佛の言はく汝應に之を起すべし。時に不動明王即ち(二)法界生の眞言を説き玉ふ。爾時に大自在者即ち復蘇息して大歡喜を生じて、白して言さく、甚だ希有なり、我初に召れて至り已つて佛に問ひ上る。此夜又は是れ何等の類ぞ、我解せざる所なり。佛の言はく、是れ諸佛の主なり。我れ是念を作す。諸佛は一切の尊にいます。云何ぞ此を以て更に主とするや。是れ我が解せざる所なり。今乃ち之を知りぬ。此大王の力に由るが故に、我をして現前に作佛を得記せしむ。當に知るべし、實に是れ諸佛の尊なり。然る所以は大自在天は三千世界の主と云ふは、即ち是れ衆生の自心なり。謂はゆる無始無明住地なり。諸惑の中に於いて自在を得。唯し大菩提心を除いては能く伏する者なし。其命を斷ち已ると云ふは即ち是れ寂然界ゴクニヤクに於いて作證するなり。謂はゆる生とは即ち是れ佛慧の門を起す。是故に眞言行者、應に一々に諸佛の密語を思惟すべし。又の法は芥子及び諸毒藥

(二) 法界生 三部
三昧耶の中の法界
の眞言を指す。

を用ひて二種相和して彼の障を爲す者の形像を作り用ひて之に塗りて、彼身をして火燒の如くにし、速に中傷を被らしむ。故に速被着と云ふ。乃至大梵等の障を爲すを尙し被着せらる、何に況んや餘をや。又凡そ此法は皆是れ久しく持誦して成就を得る者の法則を解して乃ち能く之を作す。若し但し法を聞いて即ち是の如き用を得んと求めば此理なし。(三)其の(二)法陀木の概は必ず此木無くば苦練木を用ひよ。乃至(三)鎖鐵を用ることも亦得。(四)足とはこれ智足なり。「爾時に金剛手佛に白して言さく、我佛世尊の所説の義を知るが如きは、我れ亦是の如く自の漫荼羅の位に住して世尊の尊王現威を彼位に作さしむることを知る。是の如くなれば、如來教勅して敢て隱蔽せざれ。何を以ての故に此佛の三昧耶は一切諸眞言の師とする所なるを以てなり。謂はく性住なり」とは、謂はく金剛手佛に白して言さく、此大力不動明王即ち是れ能く。是の如くの威猛の事を作すことは、能く調伏を爲して如來秘密を傳ふる所の教令使となるなり。如し本尊是れ佛部ならば即ち金輪の中に坐するの類なり。若し是の如く作すときは必ず靈驗あらしむ。此現威といふは即ち是れ効驗の語なり。作さしむとは今謂はく若し是の如く作すときは必ず効あらしむ。諸の生死の中に普く聞知することを得て敢て此眞

(二) 亂脫
(一) 法陀木 法陀
羅木とは紫檀木な
り。
(三) 鎖鐵 練鐵な
り。
(四) 亂脫
爾時 以下 膠經
なり。金剛手が
不動并に諸尊の
三摩地に請問し、
佛に請問し、領
解を述べ。

言を隱弊せじ。是故に持金剛者大力威猛にして敢て隱弊せざる所なり。謂はく此尊靈
 驗あるが故に所作の善事皆成し、諸の障を爲す者敢て如來の教勅したまふ所を隱弊せ
 ず。應に作すべき事は、此れ亦即ち是れ十方三世の佛の三昧耶なり。我等一切の執金
 剛亦應に作すべし。作すべき所と云ふは、此三昧に隨うて敢て失墜せず。何を以ての
 故に此は即ち是れ諸の金剛の性なり、是故に當に斯法に住すべし。四姓等に各各家
 法あり、若し家法を失する時は、即ち先祖父の教に敬順すとは名けず。世人名けて惡
 子とす。今此大雄猛難調を調伏し、難信の教を宣布したまふは、是れ我金剛等の(一)家
 性の法なり。謂はゆる如來種家の家法なり。(二)是故に眞言門の菩薩修行する等の菩
 薩は本位に住して、一切の事を作すべし。とは、是れ金剛手身を以て行人を勤勉す
 るの意なり。我等が應に作すべき所の事なり。若し修行の持眞言者は、亦當に此位に
 住すべし。謂はゆる如來の家法なり。應に無量の門を以て諸障を降伏し、如來の法
 をして敢て隱弊すること無からしむべし。此行人亦諸尊に(三)放ふべし。若し降伏を
 作さんと欲は、即ち自身を須ひて不動尊と作して、火輪の中に住する等なり。佛言
 はく是の如し、秘密主是の如く説く如しとは、即ち是れ誠に汝が言ふ所の如しと印可

(一) 家性 家性の
 意なり。

(二) 牒經なり 已
 下は金剛手未來の
 眞言行人を勸勵す
 るなり。

(三) 放 恐らく做
 の寫誤なるべし。

したまふ也。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第九 終

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十

沙門一行阿闍梨記

息障品第三之餘。

「(一)秘密主若しは諸の彩色と諸の漫荼羅と彼尊と尊の色とを説く、先佛の所説なり。」
 とは、謂はく本尊に各(二)形色あり、(三)下に當に更に之を説くべし。(四)如上に本位に隨
 うて事業をなす事を説けり。今復色を説くなり。謂はく會の中に於いて所有の諸尊若
 しその黄色を見れば即ち應に金輪の中に座すべし。白は即ち水輪に座す、赤は火、黒は
 風なり。次下に色の字あり。梵音別なり、此は是れ形相なり。如し寂然の貌を見れば即
 ち須らく圓壇に座すべき等なり、類して之を説け。應に一々に教に依りて書すべし。
 是れ古佛の所説なり、其道玄(はろか)に同し、我れ故に説くに非ず、衆生をして決定の信を起
 さしめんと欲ふがゆゑなり。「秘密主未來世に當に衆生有りて劣慧不信にして此説を聞
 くに、先より信根なきを以ての故に此を聞いて能く信せざるべし。慧無きを以て疑増
 多なり」とは、此衆生等は鈍根少智にして信具せざるを以ての故に、此甚深の事を聞い

(一) 毘經なり。本
 上は金剛手、本
 茶羅に住する領
 茶羅に住する領
 更に其義を廣じ、
 諸尊の形色并に所
 住の曼荼羅位と相
 應する義を説く
 也。
 (二) 形色 形とは
 形、色とは顯色
 なり、顯形二色を
 指す。
 (三) 下とは經の第
 五疏の第十六秘
 密曼荼羅品等を指
 す。
 (四) 如上とは次上
 の佛本曼荼羅に住
 する文に住すと領
 解する文を指す。

(一) 毘經なり。未
 會の文なり。

て曉了すること能はず、更に疑網を増す。此は即ち障をなす所由を説くなり。是の如
 く眞言の書及び持誦等は一々に皆深意あり、盡くこれ如來不思議の事なり。人は是の如
 くの藥を得て即ち能く空に昇り或は火に入る等は、此れ但し衆縁合するが故に決定し
 て虚からず、是れ空しからざるにも非ず。是れ諸人の籌量(チユウリヤウ)して其所以を説くべき所に
 非ざるが如し。此の如くの書色等若し法に依りて疑はざれば、乃ち能く深く法界不思議
 の境に入る。此れ唯し信する者のみ入ることを得。若し心數を以て卜量せんと欲は
 云何が所由を知りて疑はざることを得んや。世人の藥を得て空を飛ぶが如きは、此事
 汝尙し能く具さに解するに勝へじ。而も心愚にして輕毀して如來の眞空無相の法に非
 ずと謂うて徒らに自ら傷るなり。「(二)聞いて唯し堅住して修せず、彼自らを損し他を
 損す、是の如くの説は外道の法等にあり、佛説に非ず。」とは、是人此法を聞くと雖も
 決定信心をもて説の如く修行して現験を求むること能はず。能はざるを以ての故に謗
 を生じて言はく、云何が是の如くの着相の法を以て而も能く菩提を成せんか、此れ必
 ず是れ外道等の説なり、佛法には非ず。如し人天の甘露を得て、但し當に決心をもて
 信を生じて之を服すれば、自ら現験を見る。口に之を服せずして、白日に天に昇るこ

失を離るゝときは、他伏すること能はざる如く、不壞の義も此の如し。無盡莊嚴自在の力と法然所得の無功用力とをもて、而も普く彼の諸の大衆を加持して、然して後に告げて言はく、善男子今之を説くべし、汝が自ら通達する所の法界の門の如く、一切衆生界の虚妄の句を淨除して、悉く彼の眞法界無盡藏に同せしめんと欲ふが爲めの故に、各當に自ら眞言の句を説くべし。

(一) 摩經なり。但し未會の文なり。已下彌勒菩薩の眞言を説く。
(二) 莊嚴の林の上の萬徳を以て莊嚴と云ふ。即ち四受三密の諸法なり。無量の莊嚴を以て自相用の功徳を以て自林を莊嚴する故なり。
(三) 面門。面門とは或は眉間を指すこと云ひ、或は口門を指すこと云ふ。眞言なり。

「二時に普賢菩薩即ち佛莊嚴境界三昧に住して、無礙力の眞言を説き玉ふ」とは、諸菩薩の中には彼を上首とし、此佛境界莊嚴法門に於いて而も自在を得て即時に此三昧に入り玉ふ。佛境界とは此は是れ諸佛自證眞實の境界なり。聲聞等の能く之に及ぶ所に非ず。法華の方便品の中の所説の如し。(三) 莊嚴とは即ち是れ如來自證の體なり、體に無量の徳あり、徳に各無量の名あり、(四) 無量の莊嚴を以て而も自ら莊嚴するなり。此は即ちこれ不思議にして名字を離れたる法なり。云何が此定中にありて而も言説有ることを得んや。謂はく彼の菩薩此三昧に住するが故に無礙力を得、其自心の(五) 面門より種々の光を發ち光の中に此眞言を説く。
三曼多サマンタ也等奴竭多ヌケダ去也進の義也往也微囉闍也謂はく一切の障を除く也。達摩徐閑多タモシュカンダは生也。何等の法より生

する、謂はく諸法の摩訶摩訶上聲。摩は是れ第五の字通一切處なり、謂はく大空也、空中の大なる名を以て林性より生ずる也。摩訶摩訶大空とす、故に重れて之を言ふ、更に等比を爲すことを得べき者無きが故に名けて大とす、重なること空の中に更に無比也。

此意の言はく、等とは即ち是れ諸法畢竟平等なり。進とは是れ逝の義なり。謂はく佛は善逝にして而も正覺を成じ玉ふ。然も此平等法界は無行無到なり。云何が來去有らんや。次は即ち釋して言はく能く垢を離れ、一切の障を除くを以て即ち是れ勝進の義なり。無行にして進むを取も善逝とす。是の如く進行するを以て能く法生を成ず。即ち是れ平等の法性より佛家に生ずるなり。故に次に大中の大と云ふ。即ち等々無碍なるは證が中の大空なり。大空とは佛境界なり。然も此眞言は訶字を以て體とす。訶とは喜なり。謂はゆる菩薩の修を修行するなり、若し衆生此法門に従りて受持讀誦し、或は觀すれば照者即ち普賢の門に同じて、久しからずし能く佛境界莊嚴三昧自在力を得る也。

「二時に彌勒菩薩普遍大慈發生三昧に自心を説く。」とは、普は謂はく平等なり。遍は一切法界に滿つるなり。法界に稱うて大慈を生じて能く遍く一切衆生に百法の樂を與ふ。是れ彼の所入の門なり、其の自ら進達し玉ふ所の如く、三昧に入りて眞言を説き玉

(一) 摩經なり。但し未會の文なり。已下彌勒菩薩の眞言を明す。

ふが故に自心説と言ふなり。説の義は亦上に同じ。

アジダンジャヤ阿耨單闍耶此は謂はく無能勝なり、闍耶サラバ、サツタ一切衆アシヤヤ心性也謂はく彼れ先世に習フモヤタ知也阿耨單闍耶は是れ勝、阿は是れ無なり、薩嚩薩埵生也阿耨也行する所の諸根性欲なり、奴竭多謂はく能く衆生の諸根性行を了知するなり

然も此眞言は阿字を以て體とす。即ちこれ本不生の義なり。生とは生老病死の一切流轉の法なり。彼の即體常に自ら不生なり、是れ阿字の義なり。諸法は自性不生なりと知るを以て、是故に諸の一切衆生は上勝有ること無しとす。上とは無等也。又能く法體不生なりと知るが故に、群機の一切の心性を發鑿して了カキカに現覺せざる所なし。彼の得べき所の者に隨ふて之を成就し玉ふ。即ち是れ慈の中の上なり。遍く衆生に施して窮盡あることなし、是故に若し衆生有りて能く通達して此法を受持讀誦すれば行者久しからずして即ち彌勒の行に同するなり。

「爾時に虚空藏菩薩清淨境界三昧に入りて自心を説く」とは、謂はゆる此三昧に住すれば能く自心の本性清淨を知り、是の如くの清淨法界の境を了達す。即ちこれ大空の秘藏なり。此虚空藏は即ちこれ大悲胎藏をもて能く長養し、菩提の心を成就し玉ふなり。

(一) 摩經なり。但未會の文也。已下虚空藏菩薩の眞言を説く。

ア、カ、シヤ阿迦奢是れ虚空サ、マ、ン、ダ等なり、謂はく一切トガ、カ、タ了知ト、シ、ト、ラ、ン、雜色衣也、是れ種々の義、被着也、此體生するは、即ち阿迦奢の義也。三曼多法虚空に等しき也。奴養多也。吠質但纒の奇妙顯色の義也。嚩伐囉也。執持の義、囉是れ種々の衣を被るなり。

此眞言は阿字を以て體とす、阿は本不生の體なり。今此阿は是れ第二の聲即ち是れ空の義なり。本不生を以ての故に虚空に同じきなり。即ちこれ一切の法は皆虚空に等くして、自らは是の如くの了知を得る也。雜色衣といふは、即ち是れ種種の萬徳を以て法門を莊嚴せり。若人能く此空三昧を證すれば、即ち能く萬徳をもて其身を莊嚴すると淨虚空に在りて明かに顯色を觀るが如し。餘は前説に準ず。

「爾時に除一切蓋障菩薩、悲力三昧に入りて、眞言を説く。」とは、即ち是れ法性の悲自在力を以て能く一切衆生の一切の業障を除く、此障に於いて自在を得て能く此蓋障の中に住して又能く之を除く。即ち是れ如來の大悲なり。

ア、降伏の義、攝伏の義なり。此は是れ眞言の體なり。阿字は本不生なり、長聲阿の第二の字は是れ金剛三昧なり。又不動の點を加ふるは是れ降伏の義也。サツタケイタ薩埵係多有情利ビ、ユトギヤタ益なり、驃庚竭多發起也、咀纒咀纒但は即ち多字如々の義也。纒に羅字あり、是れ無垢中の囉字は是れ無塵の義、一點起生也、咀纒咀纒の義なり一點を加ふるは是れ塵字即ち大空入證也。纒を加ふるは即ち是れ大空入證也。此眞言の意の云はく體如々に於いて、此自在力を以て一切の塵垢の障蓋を除いて空を證す。空中の空は即ち大空の義なり。此相微細にして遣り難し、處々に破無明三昧を

(二) 摩經 已下は除蓋障菩薩の眞言を説く。

説いて、自體の惑相を淨除するが故に、重ねて之を言ふ。纒纒の二字又更に重ねて之を言ふ也。又相釋せば、曠字に住するを以ての故に、能く一切衆生の爲めに大饒益を作し、此性を發生し衆垢を除去するなり。若し衆生有りて此眞言門に入らば久しからずして即ち彼の菩薩の徳に同する也。凡そ觀照の時は唯し本體の一字を以て主とす、此れ即ち是れ種子の字なり。持誦するときは則ち具さに言ふ也。又凡そ諸字の次第相釋することは、如し先づ阿字有れば次の字を以て皆之を轉釋す。上の字門の中に准せよ。遍せざるを名けて普とせず、此普眼を以て衆生を觀るが故に觀自在者と名く。此三昧に入り已りて其心より種々の光を出し、光の中に此法門眞言を現するなり。

薩摩但他竭多サツマダナヘケツタ即ち是れ一切如來なり。謂イハレ囉路吉多ラロキタ觀なり、彼の所觀に同するが故に、諸如來の觀と觀ミ薩摩也サツマ體なり、謂はゆる大悲を體とす。猶し金人の彼の自體純ら是れ金なるを以て囉囉囉ラララ薩摩也サツマの故に名けて金人と爲るが如く、此菩薩も亦爾り。純ら大悲を以て體とす。囉囉囉ラララ薩摩也サツマ門に入れば即ち是れ無塵なり。三重なる。鉢ハチ是れ恐怖の義なり、大猛威自在の力を以て、彼の三重サウ所以は謂はく凡夫二乗の塵障を除く也。鉢ハチの塵障を怖とし除淨するこゝを得て佛眼に同せしむ。若シ種子なり、諸字皆此字義を釋せんが爲めなり。生に即して不生なるは是れ開字の義也。

「或は初の薩字を以て體とし、亦同じく之を用ひることを得、是れ警覺の義なり。鉢字の中に訶字有り、是れ歡喜の義なり。上に大空點あり、是れ三昧なり。下に三昧

の畫有り、此中に下の畫の字も亦三昧なり。二の三昧の中に行する也。三世の諸佛皆此觀に同じ、故に等觀と名く。

(二) 得大勢 已下得大勢の眞言を説く。此眞言は觀音の眷屬なり。故に普觀三昧に入りて眞言を説く。

(三) 經 遺教經を指す。
(四) 二點 涅槃點を云ふ。

(一) 已下多羅菩薩の眞言を明す。此れ亦所入の定は普觀三昧なり。

(一) 得大勢亦此三昧に入りて觀音と同じ。是れ彼の眷屬なるに由るが故なり。髻髻シヅメ是れは生の義なり、二重ある所以は、上は是れ煩惱生の障なり。次は是れ所知障の主なり、阿字門に入れば即ち是れ二生體を擧げて皆不生也。上に點あるは是れ大空の義なり、謂はく二障を除きて大空生を得るなり。娑字サは是れ眞言の種子の體なり。娑は是れ不動の義なり。不動住動の法は即ち生滅あり。凡そ物に生滅ある者は即ち住動の相有り。故に(三)經に動不動の法は皆是れ不安の相なりと云ふ。傍に(四)二點を加ふるは涅槃に同するなり。即ち是れ堅住の義なり。已に二障を離れて大空に同じ、此位に堅持すること諸佛住の如し。即ちこれ大勢の位なり。世人の大官位有りて、諸の財力多く多人を威伏するを名けて有勢の人と爲るが如し、此勢即ち是れ位也。言はく二生を度して佛性に同なるは即ち是れ如來の位なり。此大位大勢を得るが故に得大勢と名く。

(二) 次に多羅尊も亦是れ觀自在の眷屬なり。所入の三昧亦前の説に同じ。迦囉拏カラクナ是れ義なり。謂はく悲者より生ず、悲者は即ち是れ觀音なり。此菩薩は彼尊の眼中より生ずる悲者なり。陀婆費タハヒ也。猶し諸法の實相を見るを名けて普眼とするが如し。謂はゆる如々の體を見ること此普賢三昧より多囉多唎尼タラタリニ多囉は是れ度の義なり。然も此眞言は初の多字多は是れ如々の義なり。傍生する也。

の一點は是れ阿字なり。謂はゆる如々の行なり。囉字は是れ塵なり。六塵は即ち是れ生死の大海なり。此の如々の理性を觀するが故に一切の諸の塵勞即ち如に同じて本來不生なり。即ち是れ大海を度するは即ち是れ諸法に於いて度を得るなり。重ねて言ふことは梵を釋して極度と云ふ。自ら度を得已りて又普く一切衆生を度するを名けて極度とす。若し人自ら未だ度することを得ずして人を度することを得るは則ち爾るべからず。若し自ら度して又能く人を度するは斯れ是處あり。次の多字は即ち是れ如來の體なり。如々を觀じて塵勞の大海を度し、如來の自體を成ずることを得る也。大本の中に一百の多羅尊あるが如きは皆觀音の眼より生ず。皆是れ阿彌陀の姉妹三昧也。

(二)次に毗俱伽、三昧に入ること前の如し。

薩婆陪也一切恐怖薩婆又是れ怖亦是れ薩婆薩婆陪也怖の義囉薩薩怖也叫怖の義也薩婆陪也破障莎訶

重ねて恐怖を説く所以は、前は是れ有畏、後は是れ無畏なり。一切衆生は皆恐怖あり、未だ無界處を得ざるを以ての故に。然も此中に於いて怠慢を生じ、我執自ら高きが故に彼を恐怖して有畏を離れて而も無畏を得しむ。彼を恐怖して無怖を得しむるに由るが故に重ねて説くなり。殘害とは即ち是れ一切の障を破するなり、然も此眞言は多囉

(二)已下毗俱伽尊の眞言を明す。所入の三昧は前と同じく普觀三昧なり。毗俱伽は翻じて威嚇云ふ。蘇婆呼經には惡像を譯せり。

(二)金剛藏 金剛手を云ふ。

(三)住 止住の義なり。

字を以て體とす。諸字皆是を釋せんが爲めなり。多は是れ如々なり。羅は是れ塵なり。傍の角の一點は是れ阿なり。阿は即ち行なり。諸の塵勞の體如々に同なり。此如々の行を以て能く一切の生死の見慢我執の幢を折伏し摧滅す。即ち大摧伏の義なり。佛の大會の中に時に諸の金剛大可畏降伏の狀を現す。狀能く之を伏する者有ること無さが如し。時に觀音の額の蹙の中に此菩薩を現じ玉ふ。西方には額の上の蹙の文を謂うて毗俱伽とす。今の人の忿る時に額の上に皺あるが如きなり。此菩薩身に大忿怒の狀を作すことを現す。時に諸の金剛皆怖心を生じて(三)金剛藏の心中に入る。時に彼の毗俱伽進んで執金剛藏の前に至る。時に彼亦大に怖畏して如來の座の下に入りて言さく、願はくば佛我を護り玉へ。時に佛彼の毗俱伽に謂うて言はく、姉汝(三)住せよ。時に毗俱伽即ち住し已りて佛に白さく、唯佛の教勅し玉ふ所我當に奉行すべし。爾時に諸金剛の怖畏亦除きて皆大に歡喜して是言を作す。此大悲者而も能く此大力威猛を現すること甚だ希有なり。此中の秘意當に之を問ふべし。

(三)次に白住處菩薩當に本の梵音を存すべし。

怛他竭多也毗舍也境界也如來の境界也三婆吠する也鉢頭摩花也摩利伽羅波頭摩を以て名とす。即ち是

(三)已下白住處菩薩の眞言を明す。此尊の梵名は半黎囉囉悉寧と云ふ。

此摩訶爾と云ふは是れ處の義、住の義也。

然も此眞言は初の怛字を以て體とす。即ち是れ如々なり。如々は即ち是れ諸佛の境界なり。我今彼より生ずるなり。白とは即ち是れ菩提の心なり。此菩提の心に住するは、即ち是れ白住處なり。此菩提心は佛境界より生ず。常に此に住して能く諸佛を生ずるなり。此は是れ觀音の母なり、即ち蓮華部の主なり。

(二)次に馬頭菩薩

解怖の義、法陀是れ噉食の義、謂はく諸障を噉ふなり。然も此眞言は法字を以て體とす。謂はゆる空とは即ち是れ諸法の實相なり。猶ほ此行を行じて而も實相の果を得、復常に此を以て人に授與す。今噉食と云ふは即ち是れ此空行を以て、一切の能く菩提を障ゆる法を噉ふなり。辟闍二字を合して説かば、即ち是れ破壞の義なり。薩普吒也。普く摧破して盡さしむるなり。謂はく此空行なり。

諸法の實相を除いて餘は皆是れ菩提を障ゆる法なり。此を食噉し壊破して悉く盡すを以ての故に猛威の大勢を成ずることを得。此菩薩は是れ蓮華部の明王なり。

(三)次に地藏菩薩の眞言。時に此菩薩不可壞金剛行三昧に入り玉ふ。金剛とは即ち是

(一)馬頭菩薩の眞言を明す。此菩薩の梵名は何耶揭囉

(二)已下地藏菩薩の眞言を説く。胎藏曼荼羅には觀音院と地藏院との兩處に地藏菩薩を出せり。今は觀音院の地藏菩薩の眞言

れ菩提の心なり。此の菩提心は即ち是れ不可壞なり。此に依りて進行するは是れ金剛行なり。

訶訶訶上の訶字は是れ眞言の體なり。訶は是れ行の義、亦是れ笑の義、喜の義なり。阿字門に入れば即ち喜を發す。蘇多奴は是れ善、多奴は是れ子の義なり。謂はく善能く此利益有情の行を行ずるは眞に是れ佛子なり。善性より生ずる故に善子と名く。佛より生ずるが故に佛子と名く。此菩薩は即ち能く種々の三乗の行門を説いて衆生を利益す。(二)十輪に廣く説くが如し。

(三)次に文殊佛加持神方三昧に入り玉ふ。此加持三昧は(三)上の經の初に説くが如し。醯醯は是れ呼召、俱摩囉迦は是れ童子の義、即ち是れ呼召の義也。俱摩囉迦して本願を憶はしむる也。又俱は是れ摧破の義、摩囉は是れ魔の眷屬なり。謂はゆる(四)四魔なり。此眞言は摩字を以て體とす、即ち是れ大空の義なり。此大空を證して一切の魔を摧壞す。毗目吃底鉢他悉體多。解脱道に住する者なり、謂はく此童子解脱

なり。謂はゆる(五)大涅槃也。娑麼囉娑麼囉憶念、憶鉢羅底若先に立つる。此眞言の意の云はく、童子の解脱道に住する者を醯々して本所立の願を憶念せしむ。一切の諸佛法身成佛して、身口意秘密の體に入り玉ふ。一切の有心能く及ぶ者無し。然も本願を憶ふが故に自在の力を以て還つて生死に於いて衆生を救度し玉ふ。此眞言の意亦爾なり。此童子久しく既に法

(一)十輪 地藏十輪經を指す。
(二)已下文殊菩薩の眞言を明す。
(三)上の經 住心品を指す。
(四)四魔 煩惱、陰、死、憂、天、魔を四魔と云ふ。

身成佛するが故に其を請ふ。本願を憶ふを以て衆生を度す。由し菩薩の本願を請ふに若し見聞觸知に我を憶念する者あらば、皆三乘に於いて畢定することを得、乃至一切の願を満す。此菩薩は久しく已に成佛し玉ふ。謂はゆる普現如來なり。或は普現如來と云ふ。大悲加持力を以て童子の身を示す也。

(二) 已下金剛手菩薩の眞言を説く。

(一) 次に金剛手大金剛無勝三昧に入り玉ふ。更に等比なきを名けて無勝とす。諸佛の金剛の體を現覺し、能く諸佛の智を持するに由るが故に執金剛と名く。諸金剛に歸命すとは、金剛とは即ち諸佛の智印なり。即ち諸佛の別名なり。

戰荼センダ 極惡也、惡中の極なり、謂はく形狀暴惡を示して過る者あることなり。惡中の極也。摩訶盧瑟拏マカロセナ 此は是れ大忿怒也。極甚しき也。即ち是れ諸佛第一威猛にして、世間を殘害す。其巢穴を盡して法界に入れ金剛の界に歸せしむ。吽。此れ眞言の體なり。無怖畏の義なり。阿は是れ行なり。上の一點は是れ大空、下の盡は是れ定なり。謂はゆる大空行三昧なり。即ち是れ大金剛三昧の異名なり。能く降伏して更に勝れたる者無きを以ての故なり。

(二) 已下忙莽計金剛の眞言を明す。

(二) 次に金剛母、謂はゆる忙莽計バウマウケイなり。忙は言はく母の義なり。莽計亦是れ多の義なり、即ち一切金剛の母なり。諸金剛の智慧此より生ず。

但囉吒タラ 但囉吒タラ 此中には上の恒囉字を以て體とす。多は是れ如々の義、囉は是れ離塵

垢の義なり。伊は是れ三昧なり。即ち是れ如々無垢三昧なり。諸金剛の智慧此れより生ずるなり。吒字成せざるは是れ半體なり。體を破壊して成せざるは即ち是れ死の義なり。此三昧に由りて無明住地の人を殺す。已に無明住地を殺すが故に。惹衍底ゼンエンヂ といふは是れ勝の義なり。如し如々を了達すれば垢障淨除して無勝の生を得。故に衆母とす。無勝にして而も生ず、即ち是れ諸金剛を生ずるなり。金剛は是れ無勝者なり。亦是れ諸の無生の人を生ず。此無勝生を亦甘露生と名く。

(一) 次に金剛瓊の眞言オン 吽囉吽囉オン 此の囉字は謂はく下にニ 娜字ナあるに由りて此字を以て囉の上に加ふ。此娜字は即ち是れ大空の點なるを以てなり。若し上の囉に點を着けば即ち次の陀字には娜を加ふべからず。此中には吽字を以て心とす。是れ囉の義なり。即ち金剛縛なり。吽陀は是れ遍護の義なり。是の遍一切處彼を結するを以て也。遍一切處に彼を結すとは即ち是れ彼の法界の體を結するなり。一點は是れ遍一切處の義已に法界金剛の體を了達し彼を結して壞せざらしむるは是れ結護の義なり。

暮吒モカ 暮吒モカ 是れ鞏固の義なり。已に金剛の縛を作して、拔折バクセツ 羅隘ラエ 婆吠ハベ 是れ金剛生也。金剛界より而も生より生ず。薩嚩多囉鉢囉底訶底サハタラハチカナイ 此は是れ諸の無能害なり。金剛實の體の一切能害する者なきが如し。此金剛體性を識達するによりて、金剛の縛固體密緻なるが故に能く害する者なし。

(一) 已下金剛縛の眞言を説く。
(二) 吒字、上の囉字に連りて空點となり、吽字の音を成す。

(一) 已下月照尊の眞言を明す。

(二) 穿強轉進等これ顛喇字に連して呼字を釋す。穿強とは三昧とは二點なり。此行は堅固精進の行なり。故に穿強轉進云ふ。

(三) 已下一切持金剛の眞言を明す。

金剛縛とは即ち是れ間隙なき眞如なり。

(一) 次に忿怒月壓金剛の眞言。

顛喇。上の顛喇の字を以て心とす。顛喇は是れ攝召の義、亦是れ召請の義なり。訶字あるは是れ行なり。囉字あるは是れ離塵垢なり。上の書を加ふるは是れ三昧の義なり。兩點傍に在るは即ち涅槃に同なり。此は是れ諸佛の功德を具足す。願くば我も亦然なり。次に呼字は是れ恐怖の義なり。速に此諸佛の功德を滿せんが爲めに穿強轉進離垢三昧の涅槃の行に同するを以て大に一切の諸魔を怖れて皆退散せしむ。伴吒はれ叱の義なり。即ち一切の魔障を訶叱し滅没せしむるなり。

(二) 次に金剛針の眞言。

薩嚩達摩一切法也。上の薩字を穿の薩摩陀餘是穿の薩摩陀餘也。拔折囉蘇只金剛針也。伐囉弟也。此の意の言はく、針は是れ利智の義なり。此れ金剛の如くなる銳利の智を以て之を貫達するに、法として穿かざるくこと無し。慧を以て法性に達する意なり。是れ金剛針の義なり。謂はゆる無明を穿徹して實相の際に至る。

(三) 次に一切持金剛の眞言、時に十佛刹塵數の金剛同く金剛無勝三昧に入ること猶し

(一) 二障 煩惱所知の二障。

(二) 央掘經 央掘覺羅經第三卷を指す。

(三) 諸奉教者の得名、眞言等を明す。此 諸奉教者を指す。

金剛手の如くして異なることなし。亦自心に於いて不思議の光を出し、光の中に此眞言を現す。當に知るべし、餘の眷屬にも准じて有るなり。呼吒呼初の字を以て體とす。亦是れ大空行三昧なり。此三昧は即ち是れ大金剛無勝の行人なり。此三昧に入るが故に大空行三昧と名く。三字は是れ衆多の義なり。一切衆生多の金剛同説するが故に三字を合するなり。

呼吒呼初の字を再説するは謂はく二障を調する也。髻髻とは鬘は是れ生の義なり。上に一點あるは是れ大空なり。已に諸障を破す。當に大空の生を得べし。即ち是れ諸佛の生なり。金剛智より生ずるは即ち是れ諸佛法身の生なり。央掘經に此不生の身を生ずと云ふが如し。即ち其義なり。

(一) 次に諸奉教者此眞言を説く。此は謂はく、専ら本尊の側に在りて命を承け往來して所作あるに隨ふものなり。亦上の諸金剛に同じく大金剛無勝三昧に入りて眞言を説く。此れ一切諸部の奉教なり。同じく此眞言を用ひるなり。

融融上の融字は是れ種子也。此訶字は是れ行、是れ喜なり。中に翳字あるは是れ三昧なり。融融亦是れ呼召の義なり。此訶字は是れ行、是れ喜なり。中に翳字あるは是れ三昧なり。重ねて導ふことは謂はく行が極行なり。言はく極定なり。緊只囉曳何ぞ速くせずと云ふ也。此は是れ約勒の

り。三昧前に同じ。

毗瑟紐ビセチウ費言ヒと作すなり。第一の字を以て種子とす。毗ヒは是れ空の義、瑟紐セチウは是れ進の義生の義なり。空に乗じて進むなり。謂はゆる此天は迦婁羅鳥カルクに乗じて而も空中に行く。私に謂はく釋迦は五部の佛の中に於いて、迦婁羅に乗じ玉ふ。即ちこれ虚空進行の義なり。

次に嚙捺羅ロダラも亦佛所化の身なり。是れ摩醯首羅マクシユラの化身なり。亦伊舍那イセナ嚙捺羅ロダラ也。即ち本名を以て眞言とすなり。魯字を以て心とす。駄羅ダラは是れ授與の義なり。猶し自ら多く有して能く他人に恵むがごとし、謂はゆる諸乘なり。乘は即ち也字の義なり。自らは是の如きの寶乘に通達して能く遍く一切衆生に施すなり。嚙は即ち無塵垢三昧なり、自ら此三昧を得て復て人に施すなり。

(二)次に風神の眞言亦佛の化身なり。三昧前の如し。幡ハタ也。吠ヘイ即ち本名を以て眞言とす。幡字を以て體とす。吠ヘイは是れ縛の義なり。阿字門に入れば是れ無縛の義なり。即ち解脱なり。傍に阿字の點あり、即ち行なり。第三の吠字は是れ無言説の義なり、又伊字を加ふるは是れ三昧耶なり。也ヤは是れ諸乘なり。無礙の乘を以て而も一を度するなり。

(三)風神の眞言を明す。

同二五五、亂脫

(二)次に美音天是れは諸天に於いて詠美を顯はすものなり。乾闥婆クワンタラと稍異り、彼は是れ樂を奏する者なり。薩囉薩伐底曳サラスバダイエ即ち美音の名なり。初め薩字を以て體とす。是れ堅の義なり。若し堅住ある即ち生住異滅の相あり。阿字に入れば本來無堅なり、即ち成壞なきが故なり。餘字は皆此を釋せむが爲めなり。私に謂く此妙音を以て衆生を悅可せしむ。言辭柔耍ジュウヤにして衆心を悅可し歡喜を得しむる者なり。無堅を説いて無常を知らしめ、驗ケンに如來堅固の法を得るなり。

(三)已下美音天の眞言を明す。

六、亂脫

(三)已下羅刹種の眞言を説く。

(三)次に泥哩底ニリヂは吃れ羅刹主なり、亦佛の化身なり。囉ラ垢コ吃キ利リ娑サ都ト是れ能破の義なり。彼常に衆生を噉食す、如來も亦爾り。能く一切塵障の有情を食して厭足あることなし。提鉢底曳テイハチエ提字に駄ダの聲あり、即ち是れ法界なり。伊イを加ふるは是れ三昧なり、謂はゆる法界三昧なり。鉢底をば住と名く。此法界三昧に住するを名けて妙住とす。一切の垢障は即ち是れ法界なりと觀じて法界に入るは即ちこれ能く腹に噉入する義なり。最後の曳字は是れ乘なり。此乘とは速疾無比なり。字門の體は種子の字なり。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十

(一) 已下焰魔王の眞言を説く。

(二) 次に焰魔王の眞言亦佛の化身なり。
吽縛薩縛哆也亦本名を以て眞言とするなり。初の字を以て體。吽縛は是れ堅固住の義なり。亦是れ諸縛を除くなり。謂はく理を以て縛を除いて非法を以てせざるなり。煙字の中に多の聲あるは即ちこれ如々なり、薩字に堅固の義あり。也字は是れ乘なり、此の如々の乘に乗じて進んで行ず。傍に阿字の點あり、即ち是れ行なり。如々に乘じて進行する者は即ち是れ去りて正覺を成ずる也。

(三) 已下死王の眞言。
(四) 閻羅 閻魔と同じ。

(三) 次に死王の眞言、此はこれ閻羅明王なり。又大悲發生漫荼羅を成就せむが爲めの故に通達する所に隨ひて而も此眞言を説く。
沒囉底也吠此れ即ち死の義なり。死はこれ殺の義、其根本を斷つ。之に名けて殺さす。本意に由りて我一切衆生彼を斷じて盡く餘あること無からしむるは即ちこれ殺なり。此は死法門に於いて自在を得ることを明す。即ち佛の現化し玉ふ所なり。眞に一切衆生を殺すには非ず。初の沒字を以て種子とす。

(四) 已下黑夜神の眞言。

(四) 次に黑夜神の眞言、此は即ち閻羅の侍后なり。
迦羅囉都て黒名なり。底哩曳即ち夜。初の迦字を以て體とす。夜暗の中に多く恐怖及び諸の過患

あるを以て彼の無明黑暗の中の長夜の諸障垢等の怖畏を除かんと欲ふが爲の故に此眞言を説く。

次に(一) 閻羅王七母、七姉妹有り。此七母の名は餘經に准すべし。皆本名を以て眞言とす。今惣を説かば左の如し。

(一) 已下閻羅王七母の眞言を出す。七母の別名は義釋ち左閻羅、婦吠哩、吠慧、婆伽、嚩囉、哩、印捺哩、嚩囉、未囉囉、嚩囉、れなり。

摩怛哩弊也摩怛哩といふは是れ等の義なり。等は是れ初の摩字を以て種子とす。是れ無我の義なり。

(二) 已下釋提桓因即ち帝釋天の眞言を指す。

(二) 次に釋提桓因。

釋迦囉也即ち字釋迦といふは是れ百福德の義なり。因の中に會し百度福を修せしを以てなり。謂はゆる一百遍。大無遮の施會を作して普く衆生に施すが故に此勝生を成ずることを得。初の釋の字を以て種子とす。因つて以て名とする也。是れ止息の義なり。諸障を止息して障既に息み已れば其福を増益す。迦囉といふは是れ増進なり。又奢といふは即ち是れ奢摩他なり。常に深言を以て諸天を利益するが故に心を眞言とす。亦佛の化生なり。

(三) 已下嚩囉摩龍王の眞言を明す。

(三) 次に嚩囉摩龍王の眞言、此は是れ大海の中の龍なり。諸龍王此眞言に同じ。

阿半アハ水スイなな鉢ハツ多タりり也ヤ助ス聲シヤウなりなり水中スイジュウに於おいて自在ジザイを得えるを以もての故ゆゑに水主スイシュと名なく。初ハツの阿字アジを以もて種字シュウジとす。

(二)梵天の眞言を明す。

(一)次に梵天の眞言彼の大悲胎藏を成せんと欲うが爲めの故に亦上の如く説くなり。補囉闍ハラジヤ一切生イツセウなり。麼多曳マダエ即ち是れ衆生の主なり。一切衆生は梵天に因る。故に一切衆生の主と名く、能く一切有情を生ずるが故なり。補囉字を以て種子とす。補はこれ第一義、囉は是れ障垢なり。勝義の中に於いては障に即して無障なり。一切の聖者皆此より生ずるが故に。主といふは生主なり。亦是れ佛の化身なり。

(三)日天子の眞言を明す。

(二)次に日天子の眞言、阿ア本ホン不生ブシヤウ地ヂ與ユ多タ耶ヤ也ヤ初ハツの阿字アジを以て種子とす。即ち本不生の義なり。自ら此理に通達して而も人に授與す。即ち是れ常に衆生を利益する義なり。猶し彼の日の如し。世人日を謂つて常に衆生を利益する者とす。

(三)月天子の眞言

(三)次に月天子の眞言。

戰セン不死フシ達羅ダツラ即キち月の名なり。若し死せざる者は則ち亦不生なり、不生不死の者は甘露と名く。世人月は能く毒熱煩惱を除くこと甘露に同きを以ての故に、以て名とす。一切甘露の味淨月三昧に過ぎたるはなし。

(一)諸龍の眞言。

(一)次に諸龍の眞言。前はこれ龍王なり。此は是れ一切の諸龍に是れ通用なり。迷迦メイカ扇セン爾ニ曳エ此コには譯して嗽雲とす。雲は是れ黑暗なり。即ち諸の衆生の垢障なり。能く諸障を嗽じて而も自在を得るが故に以て名とす。初の迷字を以て體とす。即ち我の義なり。無我なり。

(三)難陀と跋難陀との眞言。

(三)次に難陀、跋難陀守門二龍王の眞言。

難徒ナンダ初ハツの難字を以て體とす。是れ觀の義なり。觀に即ち觀に難ナン拔ハツ難ナン陀ダ度ダ拔ハツ難ナン陀ダ度ダ即キち波の音あり。即ち具れ越なり。自ら諸法の生死流轉を越えて寂勝處に住す。此を以て世間を護持するが故に以て名とす。

右上は釋迦の眷屬を罄ツツし了んぬ。皆是れ寶處三昧に住して佛の化身を以て大悲藏を成就せんと欲うが爲の故に而も眞言を説く。

(三)摩經なり。

「(三)時に毗盧遮那佛自の教迹不空悉地フクウシヤククワクワの一切菩薩の母たる明妃を説かんと樂欲す。」とは、自の教迹とは即ち是れ法佛自證の教、即ち秘密平等の教なり。爲はく此中に於て諸を修行をなす者皆悉く空しからず。空しからずとはこれ唐捐トウケンならざる義なり。彼の力能に隨うて皆法身の理に向つて即ち彼佛に同するが故に不空と云ふなり。

(一) 虚空眼明妃の眞言。

如上の諸菩薩眞言を説くことは各同類の行者を引攝せんと欲ふ。若し修行することあらば即ち虚空眼より而も法身を生ずること我が如にして異なることなし。

伽伽娜ギヤナ初の字を以て心さす。伽は是れ無去來の義、又伽ガ韻なり。落ラク乞キ又エリ。努ヌ即ち虚空に同じて一相清淨無邊にして分別ベツブツ伽伽娜ギヤナ空クウ三迷サンミ等也、如上の大願虚空の相の如ニ薩サ薩サ都ト一切イツセツ竭ケツ多タ更無比なり、謂はく此等虚空に等比を爲す有ることなし。陛ビ薩サ囉ラ堅ケンうして壞クハ三婆サンパ吠バイ從ジュウ生シヨウなり、謂はく不可イカク閻エン囉ラ去キョ無來の行に住するに由りて大威光を成じて與ヨ歸命キメイなり。斯法に住するに由ヨ阿穆アム伽喃カナン不空者なり。所歸命ソキメイ眞言の首に比ヒなすことなきなり。娜ナ母モ歸命キメイなり。斯法に住するに由ヨ阿穆アム伽喃カナン不空者なり。所歸命ソキメイ眞言の首に歸命普遍諸佛とは一切の名猶し自ら普遍すれども、東方一切佛と指すが如きは、即ち十方に遍せざるを以て此少分の一切に簡ばんが爲めの故に普遍諸佛と云ふ。他此に效へ。一切佛菩薩の母虚空眼竟んぬ。

(三) 已下不動明王を説く。

時に佛又復一切の障者を息めんが爲めの故に火生名三昧を證して、此大摧障の眞言を説き玉ふ。此れに威勢ありて能く一切修真言者の種々の障難を除く。乃至佛、道樹に在るときも此眞言を以ての故に一切の魔軍散壞せざることなし。何に況んや世間の諸障をや。又此障に略して二障あり。一には内障謂はく自心より生ず。其類甚多なり。

詳に説く可らず。二には外障謂はく外事より生ず、亦甚多なり皆能く摧滅す。

戰セン茶チャ極惡なり、謂はゆる暴惡ボウオウ摩訶マカ囉ラ瑟セツ擊キョウ大忿怒ダイオン破壞ハク怖フ堅固ケンコウ哈カ鐵テツ戰セン茶チャの中又甚だ暴惡なり。摩訶マカ囉ラ瑟セツ擊キョウ大忿怒ダイオン破壞ハク怖フ堅固ケンコウ哈カ鐵テツ

一三、亂脫
二四、亂脫
(二) 第五字 拏を指す。

後の二字を用ひて種子とす。諸の句義皆此を成就するなり。初に戰茶とは戰は是れ死の義、阿字門に入れば即ち是れ本より生死なき義なり。茶はこれ戰の義、此無生死大勢の主なるを以て即ち諸の四魔と戰ふなり。次の摩は是れ我の義、阿字門に入れば即ち無我なり。亦是れ空なり。訶は是れ喜の義、亦是れ行なり。囉ラといふは一瑟セツとふは二囉ラ字あり是れ垢障なり。郎ラウの聲あるは是れ三昧なり。即ち奢摩他シヤマタ謂はく三昧なり。拏ナは是れ空の義、(三) 第五の字は則ち大空三昧なり。薩サは是れ堅の義、頗ハは是れ沫の義、世間は聚沫の如しと了知するが故に破敗し易し。傍に阿字の點あるは即ち行なり。吒チャは是れ戰の義能く敵障を怖オソして破せしむるなり。也ヤは是れ乘の義なり、併ヘイは是れ大空行三昧なり。上の説の如し。但タ是れ如ニ囉ラは是れ無垢なり。迦カは是れ作なり。謂はく一切の法無作なり。哈カ字の訶カは是れ行の義、又阿の聲あるは是れ魔障を怖す、金剛三昧なり。點は即ち大空なり、此大空不動の行の行を以て大に一切の魔障を怖す。鐵テツ字の麼マは是れ我の義、阿字門に入れば即ち無我なり。又此の大空無我三昧を以て衆魔を

怖畏せしむ。此字に亦阿の聲及び點あるを以てなり。訶・盧・哈・鑊の四字に皆阿の聲あり。即ちこれ重々に魔を怖す。極めて内外の二障を怖す義なり。右聖者不動主の眞言畢んぬ。

(一) 降三世明王の眞言。
(二) 序品。住心品を指すか。但し法幢高峰の名は具縁品に出づ。住心品に説くは加持三昧なるが、此加持三昧は自ら法幢高峰の義ありて、高味は名け玉ふにか、観の義ありて、高降三世の二眞言なり。

(一) 次に降三世明王の眞言、是れ毗盧遮那如來法幢高峰觀加持三昧に住し玉ふ。初の(二) 序品の中に説くが如し。如來(三) 此二明を説き玉ふことは、皆是れ彼の法佛の三昧なり。行人をして初發菩提心より守護し增長して、佛果の圓を生成せしめて終に退失せず、非道に墮在せざらしめんが爲には、即ち不動明王これなり。世間の難調の衆生を降伏せんが爲めの故には即ち降三世明王是れなり。相次で之を説く。謂はゆる三世とは世をば貪瞋癡に名く。此三毒を降するを降三世と名く。又由し過去の貪の故に今此貪此報の身を受け、復貪の業を生じ未來の報を受くるが如く、三毒皆爾なり。名けて降三世とす。復次に三世とは名けて三界とす。謂はく毘盧遮那如來始め有頂より下地に至るまで、上より下に向ひ相次で一々の天處に皆化して、無量の眷屬ある大天の主を化し玉ふ。今彼天に勝れたること百千萬倍せり。彼れ怖ること未曾有なり。更に何の衆生ありてか我に勝れんや。乃至法を以て之を降伏す。即ち次第に下りて能く三世

界の主を降伏するを以ての故に降三世明王と名くる也。

訶訶訶 訶は是れ行の義、是れ喜の義、此三行は即ち是れ三乘の人の行なり。此字の行即ち(二) 毗薩廢曳れ奇哉此三行本來不生なり。本不生に由るが故に即ち此三行を越ゆ、是な佛行となすなり。毗薩廢曳れ奇哉惟哉の義なり、佛の常教の如きは慈を以て瞋を對治し、無貪を以て貪を治し、正見を以て邪見を治す。今は乃ら大忿瞋を以て忿瞋を除き、大貪を以て一切の貪を除く。此れ即ち最も解し難く信じ難きが故に惟哉と言ふ也。薩嚩怛多揭多 一切諸佛(二) 毗舍也 境界(三) 薩嚩怛多揭多 生なり。謂はく諸佛の境より而も生するなり。佛境とは謂はゆ(二) 爲す(三) 帝嚩路迦也 此は是れ降勝(二) 義、上の説(三) 惹 能く遍く一切衆生の心に入りて之を覺し、障をして盡さしめ、法身の佛に等しきなり。

然も此眞言は此帝嚩の字を以て體とす。上に多の聲あり、即ち是れ如々の義なり。囉はこれ垢障なり、伊の聲あるは即ち是れ三昧なり。如々の體なるを以て即ち是れ本來不生なり。不生なるを以ての故に即ち垢障亦自ら本來不生なり。此理に稱うて修すれば定慧俱に足るが故に能く三世を降伏す。

(一) 聲聞の眞言。

(一) 次に聲聞の眞言、

醯都 因(二) 鉢囉底也 毗揭多 難(三) 羯磨 泥社多 通釋して離因緣生と云ふ。生は業に由る、生を離るゝことは即ち業を離るゝに由てなり。初の醯訶の聲あり、是れ行、是れ三昧の伊の聲は、次の都字 多の聲あり、即ち聲聞所入の如々。次の鉢字 聲聞所見第一。次の囉字 小乘所對の帝聲聞の定なり。亦即の聲あるは三昧なり。 國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十

（一）羅刹の眞言。

（三）茶吉尼の眞言。茶吉尼は藥又の類なり。

（二）次に羅刹の眞言。即ち彼の方言を用ひて眞言とす。

吃噉心な計囉三字を兼ねて乃ち種子なり。中に二の迦、二の羅あり。即ち是れ能く一切の業垢を食するなり。二の囉字は三昧なり。重れて説くこまは重れて淨むるなり。

（三）次に茶吉尼の眞言。此は是れ世間に此法術を作る者あり、亦自在に咒術をもて能く人の命終せんと欲するを知る者なり。六月より即ちこれを知る。知り已りて即ち法を作して其心を取りて之を食す。然る所以は人の身中に黄と云ふものあり。謂はゆる人黄なり。猶し牛に黄あるが如し。若し食することを得ば、能く極大成就を得て一日に四域に周り遊びて、意の所爲に隨ひて皆得、亦能く種々に人を治す。嫌む者あらば術を以て之を治して極めて病苦せしむ。然れども彼の法は、人を殺すことを得ず。要す自家の方術に依りて、人死せんと欲すれば去じ六月より即ち之を知る、知り已りて術を以て其心を取る。其心を取ると雖も、然も法術ありて要す餘物を以て之を代ふ、此人の命も亦終らずして死に合ふ時に至りて方に壞するなり。大都是れ夜叉大自在なり。世人所説の大極に於ては摩訶迦羅に屬す。謂はゆる大黒神なり。毗盧遮那降伏三世の法門を以て彼を除かんと欲ふが故に化して大黒神となる、彼に過ること無量にして示現す。灰を以て身に塗りて曠野の中にありて術を以て悉く一切の法を成就して空に乘じ

水を履むに皆礙なき諸の茶枳尼を召して、而も之を訶責す。汝常に人を噉するに猶るが故に我今亦當に汝を食すべし。即ち之を吞噉す。而も彼をして死せしめず。伏し已りて之を放ち悉く肉を断せしむ。彼佛に白して言さく、我今悉く肉を食して存することを得。今如何が自ら濟はん。佛の言はく、汝に死人の心を食することを聽す。彼が言はく人死せんと欲する時は、諸の大夜叉の命盡くるを知りて争ひ來りて食せんと欲す。我如何が之を得ん、佛の言はく、汝が爲めに眞言法及び印を説く、六月より未だ死せざるに即ち能く之を知る。知り已らば法を以て加護し、他をして畏れて損することを得しむること勿く、命終の時に至りて汝に取り食することを聽す。是の如く稍引いて道に入ることを得しむるが故に眞言あり。

訶訶は定なり。行なカ行なり。彼の邪術利は垢なり。訶の垢を除くなり。

（二）夜叉女の眞言。

（三）夜叉女の眞言。能く世間を噉し、能く諸の業垢等の惡を食す。是れ夜叉の義なり。ニ乘なり。一藥。上上の三。吃又。六言語断な。尾。乘なり。七。備夜。二。法界。九。達。二。囉。無垢なり。句義に持夜又明心と云ふ。是れ彼の方言を用ひて咒を作すなり。

（三）毗舍遮の眞言。

（三）次に毗舍遮の眞言。謂はゆる是れ極苦楚の義なり。此輩は多くは是れ餓鬼なり。

世間成就品第五。

第三の經に云はく、「爾時に世尊復金剛手秘密主に告げて言はく、諦あきらに聽きき諦あきらに聽きき。前は已に佛に問ひき、今前を騰たのへて之を答ふるか故に無問自說なり。眞言教法の如くすれば彼の果を成就す。」とは、謂はく眞言行人法教の如く正教に依りて法行を修すれば、此行善く成して悉地シツヂの果を得るなり。佛の意の言はく、若し衆生ありて如上の大果を成就することを得んと欲は、先づ當に次第に依りて之を修行すべし。即ち是れ最初發足の處なり。「當に字と字とに相應すべし。句と句とも亦是の如し。心想を作して念誦して善く一落ラク又シヤに住せよ。初の字は菩提心なり。」とは、如上の一々の字に各字義あり、此字より實相門に入る即ち眞言の字なり。又此諸字合して句を成す、則ち句義なり。此句は正しく實相の體を證はす。是の故に持眞言行者必ず字々相應し、句々相應せしめよ。或は心の種子の字に住し、或は眞言を想うて輪の像に成さしめ、或は鬘ウツの形の如くし、或は珠を繋けたる如く明淨にして無垢なり、修環し相續して間斷あることなし。是の如く現前すること明了ならしめ已りて、此眞言の輪を想へ、明白なること淳淨の乳の如し。次第に流注して斷絶あることなし。口の

(一) 世間成就品は經第三卷初にあり、此品は佛前應じて、正しく眞言を誦する次第儀軌及び成就す法を明す。
(二) 無問自說、金剛手の問なくして直に佛説き玉ふを云ふ。
(三) 一落又、一住、一切智々の大果なり。
(四) 一落又、一住、一切智々の大果なり。
(五) 如上、一々字、普通眞言藏品の所説を明す。

(一) 頭尾相接、眞言の字の始末なり。
(二) 身心、身の中、心なり。
(三) 身分、手足の支分なり。
(四) 一落又、梵音此に二義あり、一は鏡の義、二は見の義なり、二は見の義なり、今は第二の義に解す、但し義釋には深淺の二釋を用ひて、淺の二釋をなせり。

中より入り、上より下に向うて、遍く下品に灑シぎ頭尾相接して牽いて此中に入る。
(一) 身心より流布して、身分に灌ぐ。此因縁を以て能く行者の身心の諸障をして悉く清淨なることを得しむ。謂はゆる一落又とは此は是れ隱語なり。梵音別意なり。即ちこれ一見の義なり。心をして此境に住せしめ、一縁不亂なれば字々相應し、句々亦相應す。想へ此一々の字は明白淨徹なること淨明珠の如し。一々の字皆又明了にして遍く光鬘くわうまありて次第に斷せず、而も其心に注ぐこと甘露を灌灑くわんしやするが如し。是の如く一縁ある時は假使種々の障起ること有りて、或は大可畏の像を作すに、諸の散心の人見る者狂亂し、或は大聲を作すに假使山王も亦破碎しつべし。是の如くの事ある時、行者眞の踊勤の菩提の心に住し、一縁不動にして取捨あること無し、故に一見に住すと名く。若し是の如くせざれば百年を経て千萬落又を誦満すと雖も猶し成就することを得じ、何に況んや一落又をや。復次に此字とは即ち是れ菩提心なり。一々の字は即ち是れ實相門に入るに由りて、皆法界の體を得。云ふ所の字とは梵には阿剌藍アキヤランと云ふ。阿は是れ不壞の義なり。即ち是れ淨菩提心なり。此の如くの行門を淨菩提心とするが故に、若し垢を除かずんば本尊の三昧現前するに由なし。故に行者一々の字をして淨菩提心

(二) 摩經なり、

と相應せしむべし。

(三) 内外内とは能觀の心、外とは所觀の境を指す

「(二)第二をば名けて聲とし、句を想うて本尊と爲て而も自處に於いて作す。」とは、又當に字々句々眞言の聲を觀想すべし。前の如く次第に相續し輪環して斷せず。一々の聲相明了にせんこと鈴鐸風梵の音の次第に斷へざるが如く、而も其身に入りて其體内に遍せしむ。此因縁を以て能く身心をして垢濁を掃除せしむること、火の起る時諸塵悉く淨なるが如し。亦當に心を一境にして善く住して亂れざるべし。假使種々の境界有りとも亦前に説くが如し。又句の中の義とは、即ち是れ本尊の體なり。先づ本尊を想ふこと明了にして、次に即ち自ら已身本尊に同なりと觀じて(三)内外をして明了ならしむ。字の眞言觀は即ち是れ眞言の身なり。聲の眞言觀は即ち是れ眞言の主なり。句義の觀は即ち眞言の體なり、即ち眞言の心なり。句とは是れ義趣歸趣する所の處なり。即ち本尊の心なり身語意淨なり、三事清淨にして(三)平等なること、猶し内に明眼あれば外に淨境を見るが如し。又暗障なく三事等きが故に明了に現前す。此三事等してを以ての故に身口意皆一見に住す、衆緣具するが故に即ち成就の樂あり。此三事等しきが故に明に本尊を見る。故に當に自所に於て作すべし。又即ち自ら其身を觀じて亦本尊に

(三) 三密俱に現じて隱顯なき故に平等と云ふ、能觀の心を明眼に喩へ、所觀の境を淨境に類す

(二) 摩經なり已下行者自ら佛身を成じて還りて本尊に對して出入旋轉すること明す

同す。三事等しきを以ての故に世間成就と名く。爾時に本尊及び諸の菩薩等、想に隨うて現じ、念に隨うて至り、問に隨うて答へ玉ふ。然して後に出世の眞言を修學する行に入る。此の如くならざれば、徒に其功を損しくして益あることなし。

(二) 第三の句は當に知るべし、即ち諸佛の勝句なり。行者彼の極めて圓淨なる月輪に住すと觀じて、中に於て諦誠に諸字を想うて次第の如くす。」とは、次に當に佛を觀すべし。即ち本尊を觀するなり。彼の爲めに爲さんと欲する所の事に隨うて、各像類の法門あり。色に白黃赤等あるが如く、坐起身印の形をも作さんと欲ふ所の事に隨うて極めて之を觀せよ。如し心を寂にし災を息めんと欲は、即ち息災の像を觀せよ。既に成就することを得れば明了無礙なり。又月輪の圓明清淨なるを想うて字輪を觀じて、此輪の明淨の心の中に在け、前の如く成就す。此れ即ち淨菩提心の義なり。三業平等清淨なるに由りて能く諸佛の相を見たてまつる。淨菩提心と念佛三昧と相應して明了無礙なり。唯獨自明了にして餘人は見ざる所なり。この中に諦誠に想へと云ふは、圓明の本尊及び字を觀すること諦了分明にして、隱昧あることなければ諦了分明と名く。「(二)中に字句等を置て而も想うて其命を淨む。」と云ふは、即ち是れ如上に先づ字を觀じ聲を觀じ本尊

(二) 摩經なり已下出入命息念誦の法を明す

を觀するなり。或は句と云ふ。然して後ちに佛を觀せよ。佛とは即ち本尊なり。彼の緣ある所の者に隨うて而も之を觀せよ、皆是れ佛の普門の身なり。故に異相なければ同じく佛と名く。先づ此の三種の觀をなして都合して方に種子となす。子となすを以ての故に必ず當に果を得べし。次に本尊を觀せよ、果を成せんと欲ふが爲めなり。人の種子あれば之を良田に種へて方便をして、將に養うて果を成ずることを爲すが故に、是れ種子と成すと云ふ。己に一切智々の果を成せんが爲の故に佛を觀するなり。行者初觀の時に忽に暫く與に相應すること、猶し電光の如く、暫く道を見ることを得。爾時に(一)着を生ずべからず。然る所以は西方に一阿闍梨の弟子あり。此觀を作す時忽に暫く相應す。心に(二)貢高を生じて餘の同學に向うて之を説く。彼れ即ち之に謂へらく、若し法を見る者は即ち是れ果を成す、夫れ眞言の果とは即ち一切種の慧を具せり、我れ昨に偈頌を作り得たり汝能く知るか。若し汝この近事に於いて猶は達すること能はずんば、當に知るべし、諸佛の境界未だ通達すべからずと、此事を説く所以は若し人字の明了を見る時は、法と相應するに由るが故に必ず當に身心異なることあるべし、先よりこのかた愚鈍なれども、乃ち惣持を得れば一句を聞くに隨うて、無量の義趣に通達して説けども、窮盡

(一) 着 執着なり

(二) 貢高 高慢の心を生ずるを云ふ

せず、況んや我慢等の過の爲めに動せられて高慢取着の心を生せんや。是故に行者當に是の如くの法愛を離れて自ら退せしむること勿るべし。又行者本尊を觀する時、初め忽に見て滅するに隨うて愛味取着し、或は憂悔を生ずべからず。但し當に一心に之を行じて久しくすれば自ら諦了分明なるべし。若し尊を見るとき諸そあらゆる所想自然に成就す。圓光月輪及び字等念に隨うて現じて洞然明徹なり。若し字を見るときは字の外に皆光炎あり。猶ほ明なる火炎のごとくにして明淨無比なり。或は字輪を作すと前の所説の如し。亦輪の上に於いて具に光明あり、心に隨うて成就す。乃至此圓明を觀せんに小ならしめんと欲は(三)便ち小なり、大ならしめんと欲は(四)便ち大なり、乃至十方の佛刹に周遍せんとすれば皆悉く周遍す。或は十方の諸佛の無量無數の色像言語所演の秘藏を觀見し、神通の事を見んと欲は(五)皆明に見ることを得。譬へば善巧の金師の好き眞金を得て、百練清淨にし柔熨無垢ならしめて、意の所爲に隨ひ心に隨うて一切を成するに無礙なるが如し。此を持誦の果と名く。又謂ふ所の出入の息とは、世人の息を身に入れて復出し、出し已りて斷絶間隙あること無きが如く、此人の字輪の圓明を觀見することも亦復是の如し。本尊の心より念々に其心に流入すること猶ほ入息

(二) 無間、間断なきを云ふ、

(三) 此文は楞嚴なり、但し現行會意の本と相違あり、未會の文なり、而して以下の文は三念誦を説く、(四) 云ふ所の阿字の終りに説く所の阿字は一切眞言の心なり、

の如し。又自許の身心の中より念々に流出して本尊の心に入りて、念々の心(二)無間なること猶し出息の如し。是の如く念々に周環して窮りなし。即ち是れ眞言行人の出入の息なり。是の如く出入の息身心に流注して諸の垢穢を淨め、漸く諸根清淨なることを得て、又事に隨うて字輪の種子の色を觀せよ。若し息災ならば白、降伏ならば青黒等の類なり。類を以て知るべし。是の如く作すときは、是れ亦能く心に隨うて諸事を成辨す。又經の中に云ふ所の(三)命とは謂はゆる風なり。風とは想なり、想とは念なり。是の如く命根出入息の想は復淨妙なりと雖も、猶ほ是れ想風の所成なり。亦當に之を淨むべし。云ふ所の彼等を淨除し已りて、先持誦の法を作せ。」とは、(四)云ふ所の阿字とは一切の種子は皆阿字より生ずるを以てなり。若し種子の相を觀する時は即ち阿を觀せず。若し並べて觀せば則ち二相有り、是故に但し阿字を觀じて一切の種子とせよ、一切の法は阿字門を出でざるを以てなり。故に斯を先づ種子の別想を觀すと云ふ。次に此中に至りて一々に須らく阿字門に入るべし。若し阿字門に入る時は即ち本不生の理體を見るなり。是の如く見已れば即ち三業に皆通あり、身通を以ての故に普く色身の隨類を見し、普く所意見の身を見ず。語通を以ての故に能く一音を以て遍く十方の佛刹に至

(一) 六根清淨、眼耳鼻舌身意の六根各々に他の五根の作用を具し諸根互用するに至るを云ふ、(二) 楞嚴なり、此文は先持誦の法を明す、善く眞言に住す、(三) 善く眞言に住す、(四) 善く眞言に住す、(五) 善く眞言に住す、(六) 下文、下の悉地出現品の轉明妃の文を指す、

り、亦能く普く一切衆生の語言差別に應ず。心通を以ての故に乃至一切衆生の心の動作する所、心の戲論する所、明了に之を知らざる所なし。亦能く諸の如來秘密の事を知る、即ち是れ(一)六根清淨を究竟し種智を成するなり。

「(二)善く眞言に住するものは、次に一月念誦すべし。」とは、謂はく一月の中に先づ當に此の如く、上の如く之を觀することを作すべし。又秘釋せば一歳は十二月をもて而も成せり。本際に還復りて其元本を得、亦菩薩の十二地の如し、即ち(三)十住と(四)等と妙との覺なり。猶し十二月の如くなるが故に。此中に一月の分を得るときは即ち是れ初住地に入るなり。一々の句字或は本尊等隨うて一々に誦了し成就して障垢あることなし、故に一々の句に相應すと云ふ。「(五)行者前方便」とは、是の如く觀行する時若し一花を以て佛に獻せば、心を至して廻向して此をして一々の句の中の解を通達せしめんと願ふ、並に(六)下文に花を以て十方一切の刹土に遍じ、普く佛事を作す。爾時念に應じて即ち成ず。乃至香食等の事をも一々に是の如く廣く説けり。設ひ天大に旱し、或は種々の災患あるに、爾時に行人一花をもて供養し此旱をして除くことを得、大雨を降注せしめんと願ひ、或は諸患自ら息んと願ふに、時に應じて成就せざるることなし。復此一々の功徳を

(一) 摩經なり、

以て菩提に廻向して普く一切衆生に施す。此の如く菩提の大願も亦當に成就すべし。何に況んや餘事をや。前に一月と云ふは即ち是れ心一境と相應するなり。「(一)々の句に通達す。」とは、謂はく前に字輪を觀じ、聲輪及び本尊の種子を觀するに、一々に明了に現前して錯謬あることなきを、一々の句に通達すと名く。先づ佛を觀じて成ずることを得れば即ち圓明を見る。隨うて一を成ずることを得れば餘は即ち成就す。謂はく本尊を觀するに明了なる時は圓明字輪等の相自然に成就す。此月と云ふは即ち是月をば三昧に喩ふ。法性清涼にして乃し能く普く衆生の心水の中に現す、世間の月の如くには非ず、但し心を借りて喩とするのみ。但し隨うて一を成ずれば餘は自ら成ず。然も具に説く所以は、(二)下文に至りて各用處あるが故に須らく具に月を觀する法用を明すなり。

(三) 下文 悉地出現品の文を指す、

(四) 摩經なり、

(五) 摩經なり、
れ第二月念誦を説くなり、

「(三)諸佛の大名稱、此の先受持を説き玉ふ。」とは即ち是れ最初に種子を成就するなり。「(四)次に當に所有に隨うて塗香花等を奉る」とは、謂はく能く一花を以て普く法界に遍す、乃至願力の因縁をもて能く衆生の種々の苦惱を除く。普門の常の所説の如きは豈是れ一華をもて能く是の如くの力願を成就せんや。「(五)正覺を成せんが爲めの故に

(一) 摩經なり、

(二) 摩經なり、
れ第三月念誦を明す、

自の菩提に廻向す。」とは當に知るべし、即ち是れ自心の菩提の種子明淨に自在の力用を顯現するなり。次に此中には兩の字の深義を釋す、と云ふ。(一)是の如く兩月に於いて眞言當に無畏なるべし。」とは、即ち是れ悉地に及ぶ義なり。今此は是れ大用のみ。第二月なり。第一月と云ふは、謂はく種子を成ずるが故に。第二月と云ふは、謂はく位を成ずるが故に。(二)次に此月を滿じ已りて行者持誦に入る。」とは、世間の説ならば即ち是れ初の一月には持誦し、次の一月には世間の法の中に於いて成就を得。謂はく種々の藥物をば法を以て之を成じ、能く聞持を得て、一たび聞いて忘れず、乃至力と通と明と行と皆善く成ずることを得て、大空に於いて自在を得。若し出世の義をもて説かば即ち是れ其成就の時に隨うて能く一切の所願を滿す。

謂はゆる「山峯」と「牛欄」とは、觀の義なり。成就を成す時は山の如し、即ち中道の山と相應す。一々の事皆理と相應するなり。謂はく動せざるを山と名く、即ち是れ大菩提心なり。此菩提心は究竟極の地に在るが故に山峯と名く。人の山に登りて下萬物を觀るに明了ならざることなきが如く、此法性の山も亦爾り、下法界を觀するに圓照にして無礙なり。牛欄とは牛は是れ(三)五淨の所生なり。能く穢を却け障を除きて清淨の

(三) 五淨 黄牛の尿と屎との未だ地に落ちざる物と、及び乳と酪と酥とを云ふ、

(一) 兩河 已下經の河潭等の三字を釋す、河潭のこは既に第四卷に説けり、故に上に既にこれを説くと云ふ、(二) 四道の三字を釋す、(三) 一室 經の一室の文を釋す、(四) 大天室 經の大天室の文を釋す、(五) 漫荼羅 已下經の漫荼羅處等の一句を釋す、又上は第四卷を指す、(六) 作護 已下經の是處而結護の句を釋す、これ不動降三世明王の印明を以て道場を結界し諸事を護淨す、(七) 此句は未曾の經文を引いて釋するなり、現流の文の行者作成就の句に當る

事を成就す。牛淨らかに養はるゝを以ての故に細草豊茂にして自然に滋長せり。此菩提心の牛欄も亦爾り。能く妄想分別の過を防ぎ。諸の心地を淨めて、大悲の水を以て之を平等の地に灑げば所生の功德任運に成長す。(一) 兩河の義は上に已に之を説けり。兩河とは謂はく流注して絶へず、是れ生死の流なり。又心心寂滅にして法性の大海に趣く、是れ出世の流なり。此中間に於いて是の中道妙住の境あり、妙成就を造るに堪えたり。(二) 四道の中と云ふは謂はく四聖諦道の中なり。「(三) 一室」とは謂はく諸境の分別を除いて如々の行にあり、此を以て室とす。「(四) 大天室」とは謂はゆる涅槃の室なり。此を以て菩提の自在力を成辨す。若し是の如くの大天の室に入らざれば、云何が能く自在力を成せんや。(五) 漫荼羅の義は上に之を説くが如し。四角に金剛三股の象を爲作りて周匝して相接するを「金剛宮」と名く。若し秘説をなさば、此は是れ大智なり、能く壞する者なし、彼の金剛妙智を以て金剛界を結し、菩提心を護るが故に所作皆辨するなり。(六) 作護とは、謂はく降伏三世の明及び不動の明を以て諸事を護するなり。若し理をもて説かば、此降伏三世と不動明王とは即ち是れ大菩提心なり、能く一切衆生を守護するに、彼の善根をして自在に成就せしむるに堪えたり。「(七) 藥物の力成す」とは謂は

(一) 餘處 蘇悉地經等を指す

(二) 已下は經の即中夜分等の二句を釋す

(三) 已下智者應當知等の二頌を釋す

(四) 三乘 三密を云ふ

く空青、蘇油、牛黃等なり。事に隨うて成辯せよ。(一) 餘處に之を説くが如し。「理をもて説く。」とは、即ち是れ身口意の成就なり、謂はゆる三業無盡莊嚴の藏、奮迅示現して、法界の衆生を成就す、佛法法爾なり。先づ事の中成就を以て然して後に淨慧の大空を用ひて之を觀察せよ。即ち是れ出世の成就なり。(二) 藥及び心成就する時、上中下の相あり、日出を上とし、夜半を中とし、初夜を下とす。此時の中に於いて、相有るをば當に知るべし、事に隨うて即ち是の上中下の成を知る。初夜は是れ初めて入りて未だ證せざるの義なり、半夜は是れ菩提心の義なり。謂はく此より以後は暗を背け明に向ふ、然れども猶ほ未だ即ち是れ大明にはあらず。日出に至るは是れ成する相なり。猶し大日の普く世間を照すが如し。(三) 此時の中に於いて或は餅聲あり、或は種々の鼓聲、或は大地動じ、或は妙音聲の種々妙相ありて、人の聞かんと樂ふ所の其意に悦可せしむるを聞く。或は空中にあり、或は壇中にあり、若し此相あらば當に知るべし、即ち是れ世の悉地成するなり。若し理説せば一々の法合の處に果を得、謂はく(四) 三乗の果なり。或は法輪を轉じ、大勢を得乃至長壽にして壽量無數なり、勝進して虛空に遊び淨眼明照なり。淨了無礙にして淨心遍智すらくのみ。已上は成就世間品

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十終

大正十年五月廿五日印刷
大正十年五月廿八日發行

國譯密教論釋第三奧付

【非賣品】



禁轉載

編纂者 塚本賢曉

東京府北豊島郡高田町字雜司ヶ谷三百十二番地

發行者 伊豆宥法

東京市牛込區若宮町三十五番地

印刷者 川邊多門

東京市本郷區湯島三組町八十一番地

印刷所 國譯密教刊行會印刷部

東京市本郷區湯島三組町八十一番地

電話下谷三九二三番

發行所

東京市牛込區若宮町三五
振替東京五〇一八七
電話番町二五二三番

國譯密教刊行會

353
283